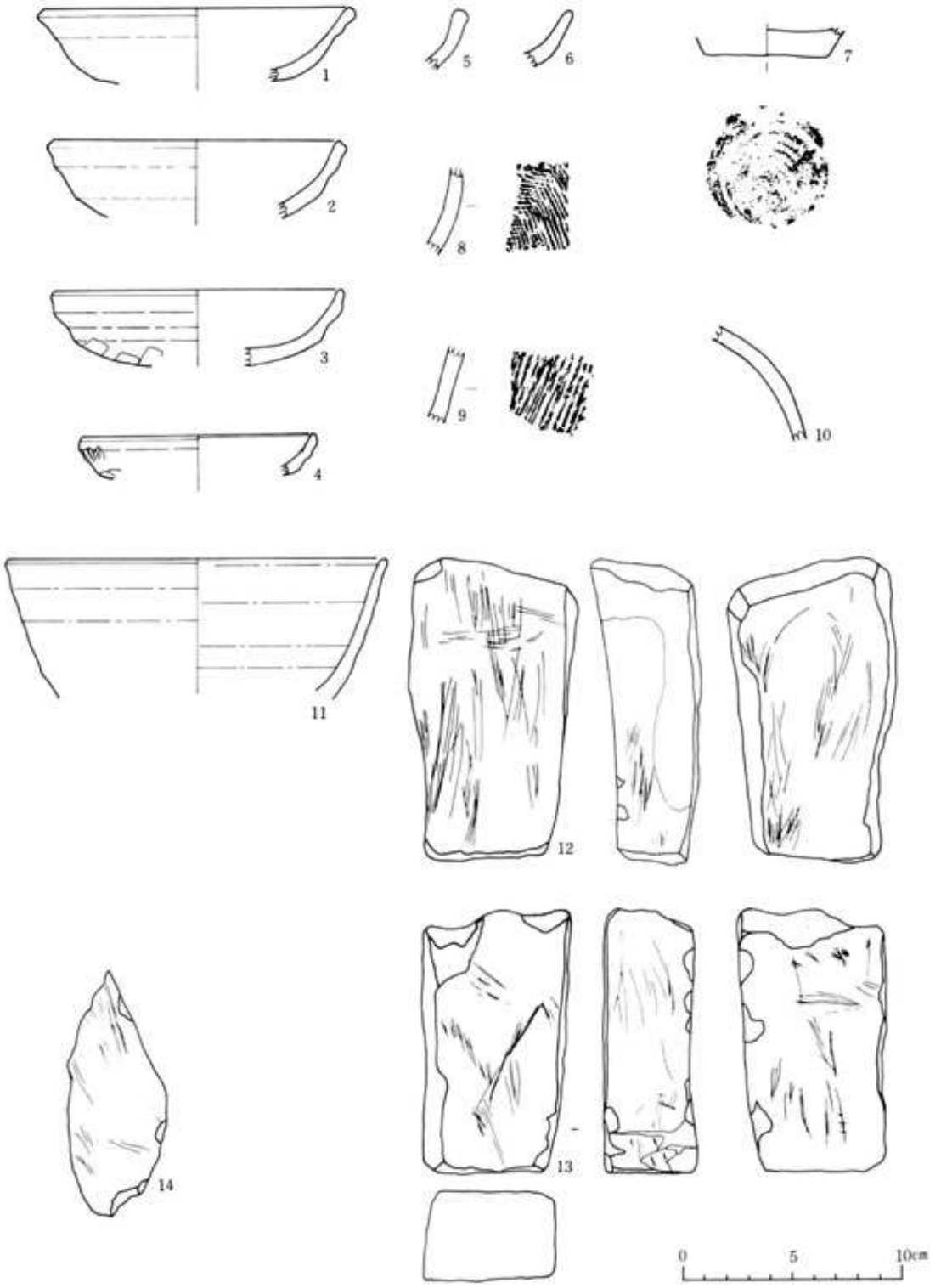


第3図　　出土遺物実測図

清綱は平泉初代清衡の子であると「尊卑分脉」に記している。「吾妻鏡」に見える俊衡法師が比爪太郎俊衡であり、泰衡の近親縁故者である。俊衡は頼朝が泰衡を追って平泉に入ったのは文治5年8月22日であり、更に北方、紫波郡にまで進出した。9月4日である。この進出に俊衡は驚き、居館・比爪館を焼失したと記されている。

この比爪館についての擬定地として2説みられる。1つは城山説であり、他の1つは赤石南日詰説である。

この2説については具体的には前記「比爪館跡発掘調査報告書」の中に次のように記されている。

<城山説>

① 在二日町〈城山の西北〉　「邦内郷村志」

② 城山〈志波城の転用〉　「旧蹟遺聞」

③ 日詰　「篤焉家訓」

④ 日詰　「奥々風土記」

⑤ 二日町新田の東南・古跡　「(明9)岩手県管轄地誌」

村の東南、郡山古城

⑥ 郡山城趾〈城山・日詰町の東傍なる一丘〉「大日本地名辞書」

<南日詰説>

① 五郎沼のひんがし北　「けふのせはのの」

② 五郎沼付近　「史蹟名勝天然記念物調査報告・第9集岩手県」

③ 南日詰　「(昭3)陸軍特別大演習時の講演草稿略地図」

④ 南日詰　「(昭31)紫波史談」

以上、比爪館跡擬定地について要約し記述したが、大銀遺跡出土の赤焼き土器は、きわめて平泉関連の諸遺跡から出土する土器と類似していることから、大銀遺跡周辺には平安末期〜鎌倉初頭にかけての遺跡が十分考えられ、これが比爪館跡に関連する遺構が存在することにも結びつく可能性がある。今後、周辺遺跡の調査が重視される。

注1．板橋　源 他(1966・1974・1976)「比爪館跡発掘調査報告書」　紫波町教育委員会

注2．黒板　昌夫 他(1954)「無量光院跡」　文化財保護委員会

注3．藤島玄治郎 他(1961)「平泉・毛越寺と観自在王院の研究」　東京大学出版会

吉川弘文館(1972)「新訂増補・国史大系　吾妻鏡　第一」

大日堂遺跡

遺跡記号：DND
所在地：紫波郡紫波町北日詰字東ノ坊4—11他
調査期間：昭和50年5月16日～6月10日
調査対象面積：2240㎡
平面実測基準点：東京起点474.880km (BA50)
基準高：海抜96.00m

1．遺跡の位置と環境（第Ⅱ図・P　、第Ⅲ図・P　）

大日堂遺跡は紫波町北日詰にあり、東北本線日詰駅の東約600m、国道45号線と交錯する南側段丘上にある。本遺跡は砂礫段丘Ⅲ（低位段丘・金ケ崎段丘面相当）面上にあり、奥羽山脈東縁部に広がる扇状地・段丘の東端部にあたり、段丘崖下・沖積地水田面との比高は約1.5mである。遺跡周辺は宅地、畑地、水田等に利用されている。調査対象範囲は国道ぞいの一部水田を埋めたてて建てられたレストハウス跡地となっており、地表は攪乱土の盛土になっている。

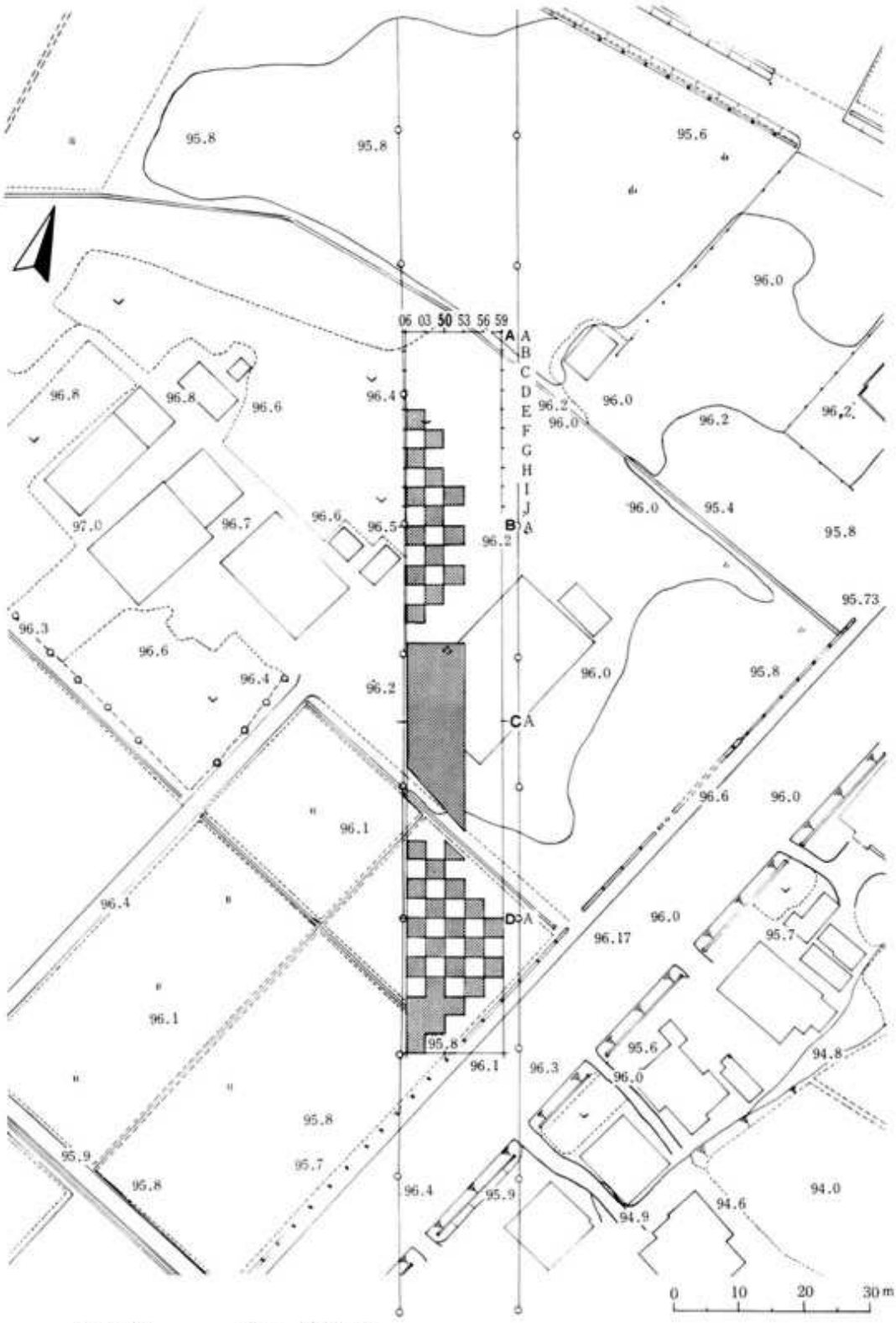
遺跡周辺には、新幹線ルート内に発見された大銀遺跡、田頭遺跡、杉ノ上Ⅲ・Ⅱ・Ⅰ遺跡がある。更に、南西約400mの近接地の赤石小学校付近には比爪舘跡遺跡があり、昭和40年の第一次調査、昭和44年・第二次調査、昭和47年・第三次調査、昭和49年・第四次・第五次調査が行なわれ、その調査報告書[注1]がまとめられている。それによると、柱痕跡、建物遺構、溝状遺構、胆沢城、徳丹城出土遺物と同一の遺物、また平泉遺跡から出土する土器に酷似するものなどの発見があり、この赤石小学校付近を『吾妻鏡』に記されている平泉藤原氏の一族比爪氏の居舘跡と確定している[注2]。

このようにこの付近は縄文～平安末にかけての遺跡が多く分布していることがいえる。（第Ⅲ表）

2．調査の方法と経過

本調査対象地は昭和47年の東北新幹線建設地内における遺跡分布調査の際、若干の土師、須恵器片の散布が見られたことにより調査地となったものである。調査は、まず路線敷内の遺跡全体を対象に3m×3mのグリッドを設定し、遺跡基本土層の把握のための深堀りを各ブロックごとに実施した。その結果、後述するように各ブロックにわたって礫まじりの砂質シルトの盛土が20～30cmの厚さになっていることがわかり、また、旧ドライブイン跡のコンクリート敷きも広範囲にあることから、Aブロック以外を重機使用（バックホー等）による盛土除去作業を実施し、旧水田面上約10cmまでの盛土除去を進め、その後、遺構検出、および遺物検出作業を進めた。

中心軸、実測基準高は別記のとおりである。

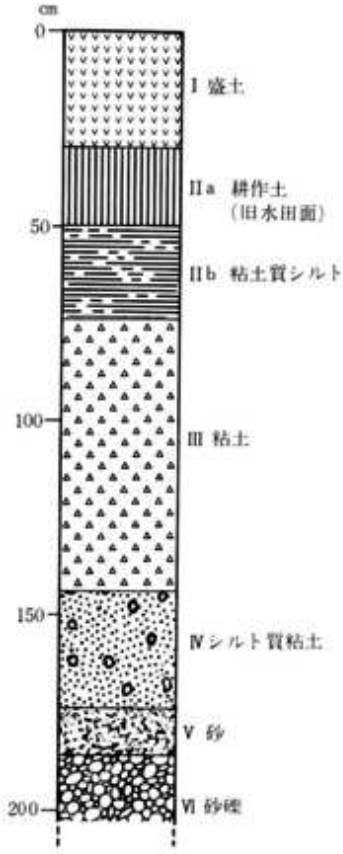


第1図　　グリッド配置図

3．調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層序（第２図、写真図版２－３）

遺跡は標高、海抜96.00mのほぼ平坦な面となっているが、建築物等の基礎工事跡や盛土などが広範囲にわたっているため、土層にかなりの攪乱があるが、ほぼ自然堆積が保たれている地点の基本土層を観察すると以下のようになる。



第２図　基本土層柱状図

第Ⅰ層は盛土である。Ａブロックは約20cmであるが、Ｂブロック以南になるとその厚さも増し、DE50グリッドにおいては約30cmになる。この盛土は粘性のない極赤褐色土（5YR⅔）を示し、コブシ大の礫などのほかガラス片なども混入している。この盛土はドライブイン建築時（調査時点より約６年前）に盛ったもので、周辺微高地等より運搬したものとの事である。第Ⅱ層は盛土前の旧水田耕作土で、シルト質土層である。これを更にａ、ｂ２層に細分できる。Ⅱａ層は5YR⅔黒褐色土の粘性のあるシルト質土であり、植物根も若干含まれる。Ⅱｂ層は10YR⅔黒褐色土である。このⅡ層はＡブロックでは10cm内外であるが、Ｄブロックでは約45cm内外の厚さとなる。出土遺物はこのうちⅡｂ層の粘土質シルト層からのものが多く、平安時代の土師、須恵器片がみられる。いずれも小破片が多く、特にＤブロック周辺に多く散布している。第Ⅲ層は2.5GY⅔オリーブ灰の粘土層で上部に須恵、土師片を含む。このⅢ層はＡブロックには見られず、Ⅱ層下はⅣ層の砂礫となる。Ⅲ層はＤブロックから認められる。このことは、Ａブロック北地点が湿地となっていることから、Ａ・Ｂブロック周辺もこの湿地が続いていて流路となっていた可能性がある。遺物はこのⅢ層からも出土しており、Ｄブロックからは土師器片、須恵器片のほか、古銭（寛永通宝など６点）が出土した。Ⅳ層はシルト質粘土層（青灰色）となり以下Ⅴ層の砂、Ⅵ層の砂礫層となる。しかし、Ｄブロックでは各層の入り混じりが見られ、特にDF03グリッドにおいては砂層の中にⅡ層の入り込みが見られることから、層の動きが考えられる。これは自然的な層の動きと考えられ、これが、紫波町西部地区に見られる旧河道の停水地帯、特に滝名川末端の旧河道の停水地帯にできたと思われる五郎沼堤や、その他の後背湿地にみられる流路の変遷等の作用によるものと考

えられる。

以上のような土層を示すが、遺物は前述のようにⅡb、Ⅲ層上部から出土する。

〔2〕 発見された遺構と遺物

調査の結果、第1表のような遺物が発見されたのみで、遺構は検出されなかった。

〔出土遺物〕（写真図版2－2）

縄文土器（第3図・1～3、写真図版3－1）　図示の他1片出土し、合わせて4片の出土があった。いずれもAJ03グリッドの盛土からのものであり、他地点からの移動があったものと考えられる。1は深鉢胴部片で、単節斜縄文の地文である。胎土に石英粒が混入している。2、3は鉢型土器の胴部片で、縦回転による撚糸文が施され、更に沈線の下端に円形刺突文が施されている。時期的には縄文時代後期に位置づけられると思われる。

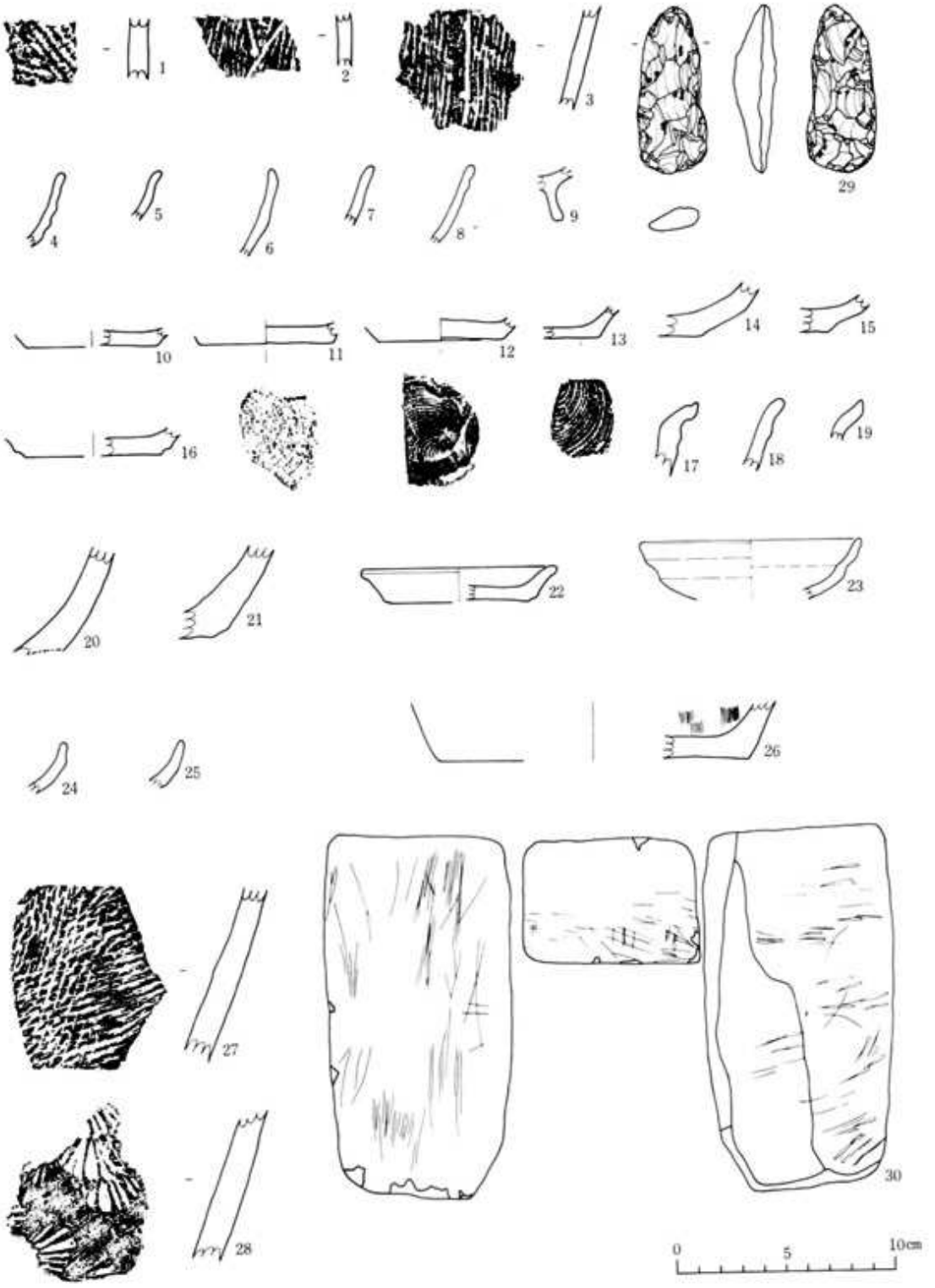
土師器（写真図版3－2）

坏（第3図・4～8）　いずれもロクロ使用によるもので口縁部小片のみである。体部がやや丸味をもって立ちあがるが、口唇部で若干、外反するもの（4、5、7）、口唇部もそのまま内弯するもの（6）、内外へラミガキ・黒色処理が施され、体部がやや内弯して立ちあがるもの（8）などがある。

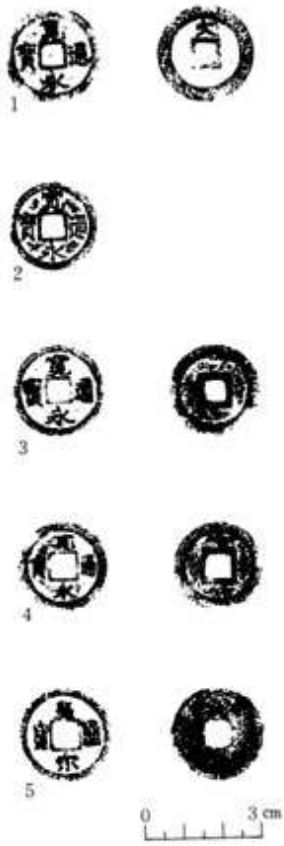
高台付坏（第3図・9）　坏高台部片である。台部が広がりをもっている器形と思われる。

甕（第3図・10～19）　11～13は甕底部片である。回転糸切痕を有するもので比較的小型の器形と思われる。14～15は大型の甕底部片である。15は橙色（5YR7/6）で回転糸切痕を有する。再調整も認められない。17は単純口縁を有したもので、比較的大型の甕になると推定されるものである。口縁部は外反し、口唇部は直立する。胎土の色調は橙色（2.5YR7/6）で、焼成は硬質である。再調整は認められない。これらの点から15、17は赤焼き土器的な要素を持っているともいえる。この他、図示してはいないが、最大径が口縁部にあり、器高が体部径より高くなると考えられる大型甕口縁部片が出土している。これは、口縁部が若干外反するのみで、口唇部は体部からのほぼ1cmの肥厚のまま丸くおさまる形をとっている。焼成も硬質で灰白色（2.5Y8/2）を呈している。口唇部にナデ痕が見られるほかは再調整痕は認められない。18は小型の甕口縁部片で、器高が低く、比較的小型のものの甕になるものと思われる。口縁部は外反し、口唇部が直立する。19は口縁下半部片である。20、21は大型甕の体下半部片であるが、全体器形は不明である。体下半部にヘラケズリが施されている。胎土は石英粒が混入し、全体としてザラつく感じであるが、焼成は硬質である。

皿（第3図・22～25、写真図版3－3）　いずれもDブロックの第Ⅱb層上半より出土したもので、器形を推定できる程度の小片のみである。22はDD03グリッドより出土したもので、口


1
2
3
29
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
30
0
5
10cm

第3図　　出土遺物実測図



第4図　古銭拓影

径、底径、器高の推定値はそれぞれ、9㎝、6.5㎝、1.5㎝である。また、口唇部、体部、底部の厚さは3㎜、5㎜、6㎜を測る。底部は平底で、若干磨滅はしているが回転糸切痕が観察できる。体部はやや外反して立ち上がり、口唇部で丸くおさまる。ロクロ使用による痕跡も観察できる。胎土は灰黄色（2.5Y7/2）を呈し、やや硬質である。内、外面に黒色の付着が認められる。23はDE50グリッドより出土したもので口縁、体部、底部の一部が観察でき得る程度の小片である。口径、器高の推定値は10㎝、2.5～3㎝である。底部は丸底で、体部外面に段がまわる。口縁部外面にロクロ痕が認められ内面と外面口縁部に黒色の付着物が見られる。24、25は体、口縁部片だけであるが、体下部から丸底になる器形と推定される。体部は二例とも内弯し口縁部に至り、口唇部で丸くおさまる。24は口縁部でくびれ、さらに若干内弯する。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/4）で焼成は硬質である。また、二例とも黒色の付着物があり、特に24は内面全体に認められるが、25は口唇部だけである。25は口唇部、体下部の厚さは2.5㎜、5㎜である。

須恵器

甕（第3図・26～28、写真図版3－6）　DD03グリッド、第Ⅱa層出土のもので、甕底、体部片である。底部径は推定14.3㎝である。底体部内面にナデ痕がみられる。前記『第一次・比爪舘跡調査報告書』・第9図・No.4の出土須恵器に類似する。27、28はいずれも大型甕の体部片であるが、27は内・外面とも平行叩き目痕をもち、外面の一部に2度の叩きを施している。28は外面は平行叩き目痕をもつが内面は蓮華紋のあて工具を使用している。内・外面とも灰白色（10YR8/2）～にぶい黄橙色（10YR7/2）の色調である。（写真図版3－5）

石製品

石器（第3図・29、写真図版4－10）　DE06の第Ⅱa層上面から出土したもので両側縁がほぼ平行で、全体として短冊型をなすものである。両面加工で、下端部に刃部を有し、使用による刃潰れが見られる。一側縁も刃部として使用された可能性がある。各部位の計測値は長さ77㎜、幅30㎜、厚さ16㎜、重さ41.6ｇで石材は硬質頁岩である。

砥石（第3図・30、写真図版4－9）　CG50グリッド第Ⅱb層上層より1点出土した。直方体状のもので上面、片側面の二面に砥磨面がみられ、特に上面には数条の細い溝が走る。石材は淡緑色流紋岩質凝灰岩である。遺物の時期については、本遺跡の場合、包含層に各時期の遺

第1表　　出土遺物集計表（破片数）

項目＼グリッド						AJ03	CG50	CH03	CI03 CI06 CI50	CJ03	DA06 DA50 DA56	DB03 DB53	DC50 DC56	DD03 DD53	DE03 DE06 DE50	DG06	DF06	表採
縄文土器	鉢	破片数				4												
土師器	坏	黒色処理	破片数					1						2	9			
			ロクロ使用	有	再調整有									2	7			
					〃無										1			
					〃不明			1							1			
				無														
		非黒色処理	破片数			1			1	1	1		2	3	8			
			ロクロ使用	有	再調整有	1			1	1	1			1	5			
					〃無								2	2	2			
					〃不明										1			
				無														
	高台付坏	破片数											1					
	甕	大型	片数									1	6	10	21	2	2	
			ロクロ使用	有	成形													
					調整							1(内黒)	4	6	13	2	2	
					不明								2	4	8			
				無														
		小型	破片数			1			2		1	4	5	13	27	1		
			ロクロ使用	有	成形	1			2		1	4	4	10	26	1		
					調整								1(内黒)	3(内黒)	1			
					不明													
				無														
	小皿	丸底	破片数										1	2	1			
		平底	破片数											1				
赤焼土器	甕	破片数				1									1			
須恵器	壺	破片数													3	1		
		残存部	口縁部															
			体部												3	1		
			底部															
	甕	破片数				1			2	1	3		7	6	8	4	5	1
		残存部	口縁部															
			体部			1			2	1	3		7	5	8	4	5	1
			底部											1				
石製品																		
石器							1								1			
古銭										1	8				1			

物が混在しているため不明である。

その他

古銭（第4図・1～5、写真図版4－1～8）　DE06グリッド第Ⅱb層中ごろから「皇宋通宝」1枚が出土した。(写真図版4－8）初発は北宋の景祐4年（1037年）である。直径24mm、厚さ1mmで字体は真書である。皇宋通宝は、中世を通じ、中国から大量に輸入され、使用された銭貨の一種であり、国内出土の中国銭では最も普遍的なものである。

その他「寛永通宝」が9枚出土したが、古寛永はDA50グリッドから2枚出土した。

4．考察とまとめ

大日堂遺跡の調査では遺構の検出はなかったが、出土遺物の一部に特徴的なものが認められる。以下、主として県内出土遺物と比較しながらその性格を考えてみたい。

特徴的な遺物として皿型土器の出土がある。これは前述したようにDブロック第Ⅱb層上半より出土したもので、平底のものと丸底のものがある。

平底の小型皿型土器の出土例は岩手県内では主として平泉から出土していたが、最近、本遺跡近接地の赤石小学校付近からも発見されている。類似の出土例として、前記紫波町日詰字箱清水、赤石小学校校庭の西隣り（比爪舘跡）から出土した土器[注3]、岩手県平泉町無量光院、阿弥陀堂本堂内部西南隅より出土した土器[注4]、同じく平泉町毛越寺南大門跡築地内出土や同常行堂跡出土の土器[注5]等と酷以している。いずれも厚手で体部はやや軽い内反りで、ロクロ使用がなされている。阿弥陀堂本堂出土のものには黒色の付着物が認められたという。また、北上市・極楽寺跡毘沙門堂西側や白山神社裏山などの祭祀様遺構からも出土している[注6]。これら皿型土器について『無量光院跡』、及び『比爪舘跡調査報告書』では燈明皿（型）、供物皿としている。

次に、丸底の皿型土器についてその類似例を見てみると、無量光院・阿弥陀堂跡出土の土器[注7]や毛越寺・講堂跡出土の土器[注8]に類似する。ただ、口径が平泉出土の土器の場合は約15cmと比較的大きい数値である。この丸底型の皿型土器についても『平泉、毛越寺と観自在王院の研究』[注9]で供物皿、燈明皿としている。

以上の類似例からみる限り、本遺跡周辺には、平泉期に相当する遺構が想定され、更に広範囲に考えるならば新幹線ルート内の調査対象遺跡として調査を実施した大銀遺跡出土の赤焼き坏型土器[注10]の出土から考え、赤石小学校付近から本遺跡、大銀遺跡を含めた広い範囲に平泉期～鎌倉期にかけての遺構が存在すると考えられる。またそれが、前述の比爪舘跡と結びつく諸施設がこの付近に存在しただろうことも十分考えられる。

次に土師器全般について考えてみると、いずれもロクロ使用によるもので、いわゆる表杉ノ入式期のものであるが、焼成についてみると硬質のものが多く、色調もにぶい橙色（5YR7/4）、灰黄褐色（10YR6/2）など呈するものが多くの割合を占める。大型の甕型土器では体部下半にヘラケズリ痕などの再調整が認められるものがあり、いわゆる再調整のない赤焼き土器とは区別されるが、全体として土器製作の技術上から新しい時期のものとして把えることが可能ではないかと思われる。

古銭の出土があるが、本遺跡出土の各遺物と直接的な関連があるかどうかは不明である。本遺跡周辺の字名「大日堂」、「東ノ坊」との関連で把える必要があるかもしれない。今後、本遺跡を含めた近接地の過去の調査内容と各資料を総合的に検討することが必要と考えられる。

注1．紫波町教育委員会（1965）「比爪館跡第四次、第五次発掘調査報告書」
注2．紫波町教育委員会「比爪館跡第四次、第五次発掘調査報告書」　文化財調査報告書9号
注3．紫波町教育委員会（1966）「比爪館跡発掘調査報告書」第9図・No.2
注4．文化財保護委員会（1952）「無量光院跡」112ページ、第40図、土師器実測図・No.9
注5．東大出版会（1961）「平泉・毛越寺と観自在王院の研究」142ページ、第124図・No.8、No.9
注6．沼山源喜治（1978）「東北北部の歴史時代の土器」9ページ、シンポジューム発表資料
注7．文化財保護委員会（1952）「無量光院跡」111ページ・第39図および112ページ・第40図1～5
注8．東大出版会（1961）「平泉・毛越寺と観自在王院の研究」141ページ・第122図No.1
注9．上記報告書 143ページ19行目
注10．本書掲載「大銀遺跡」第3図・1～6

引用・参考文献（注記参考文献を除く）

岩手県（1961）「岩手県史」第1巻
岩手県紫波町（1972）「紫波町史」第1巻
司東真雄（1978）「岩手の歴史論集」Ⅰ
日本銀行調査局編（1972）「図録・日本の貨幣Ⅰ」原始・古代・中世

田頭（たがしら）遺跡

遺跡記号：TG
所在地：紫波郡紫波町桜町字中桜32—1他
調査期間：昭和49年9月5日～10月16日
調査対象面積：1760㎡
平面実測基準点：東京起点476.304km（BA50）
基準高：海抜102.60m

1．遺跡の位置と立地（第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P14）

田頭遺跡は紫波町桜町字中桜地内に所在し紫波町の中心部（日詰）より直線にして南西約1km、また国鉄東北本線日詰駅より北1.2kmの東北本線沿いに位置する。

遺跡の東約1km付近を北上川は直線的に南流しており、本流に沿って巾1～3kmの河岸低地の発達をみる。北上川の西側はこの河岸低地の部分を除けばほぼ広い台地で占められる。これら台地はいずれも扇状地や旧河床が段丘化したもので少なくとも新旧を異にする3段以上に面区分がなされ、中・低位の段丘が特に広い面積を占めている。

田頭遺跡はこのうち都南段丘面に比定される低位の段丘上に立地する。遺跡の立地する北側の段丘崖に沿っては小河川（大坪川）が、南側 0.7km付近を平沢川が北上川に向けて東流する。調査区に接しては西側を国鉄東北本線が走り、東側は水田地帯となっている。遺跡の地目は畑地となっており、102.2～102.4mの標高を測る。東側水田面との比高は約1～1.3m程である。

2．調査の方法と経過（第1図）

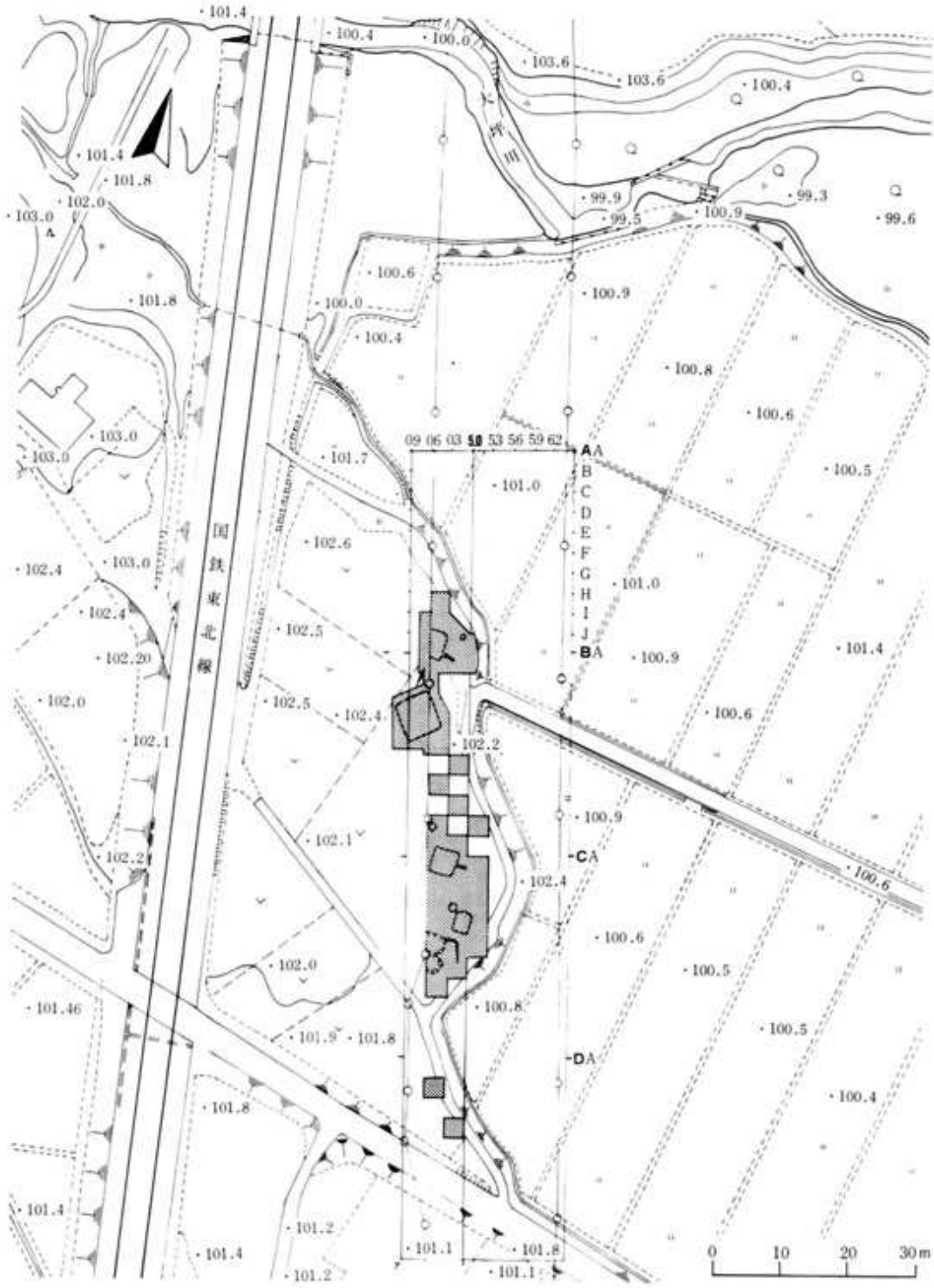
本遺跡は東北新幹線建設事業にともなって昭和47年に実施した路線敷内の遺跡分布調査の際発見された遺跡である。調査はグリッド設定にかかわる測量より着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭東京起点476.260kmと476.280kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め476.304kmを本遺跡の基準点（BA50）とした。このBA50を基点にして一辺3mのグリッドをくみ市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。なお地権者の了解を得て、西側の一部路線敷外も調査した。

3．調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位（第2図）

CB06に設置した深掘りの北壁セクションにより本遺跡の基本的層位を観察すると以下のようになる。

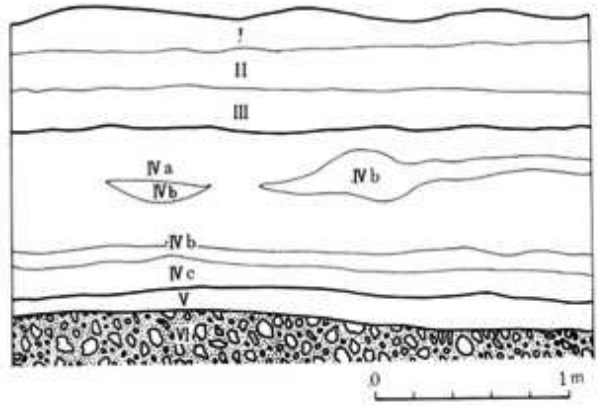
第Ⅰ層：黒褐色（7.5YR2/2）土で粘土質シルト。クロボクで構成され層厚は20～30cmを測る。畑地として利用されており、割合にフカフカしている。



第1図　田頭遺跡グリット配置図

第Ⅱ層：黒褐色(7.5YR3/1)土で粘土質シルト。Ⅰ層同様クロボクで構成され10～20cmの層厚を測る。調査区東側では薄くなる。土の構造はⅠ層に比してやや密でしまりがよい。土器片、炭化物等を混入する遺物包含層である。

第Ⅲ層：褐色(7.5YR4/3)土。粘土質シルト。層厚10～15cmを測り、非常にしまりがよい。少量の礫を混入する。この層以下は無遺物層である。



第2図　土層図

第Ⅳa層：明黄褐色(2.5YR6/6)土。細砂を混入したシルト、70～80cmの層厚を測り、Ⅳbを帯状またはレンズ状に挟在する。

第Ⅳb層：浅黄色(2.5YR7/3)土。細砂。

第Ⅳc層：淡黄(5Y8/3)土。シルトを混入した細砂。非常に堅くしまっており、酸化鉄の流れが縦方向にみられる。

第Ⅴ層：灰色(5Y5/1)土。グライ化しており、粘性が強い。酸化鉄の流れが縦方向にみられる。

第Ⅵ層：礫層となる。

〔2〕 発見された遺構と遺物

調査の結果発見された遺構としては竪穴住居跡5棟、ピット4基である。AI09住居跡、BC12住居跡の調査にあたっては地権者の了解を得て用地外の一部を拡張して全掘した。なおBC12住居跡調査の用地外拡張の際、縄文土器の出土をみている。

(1) 竪穴住居跡

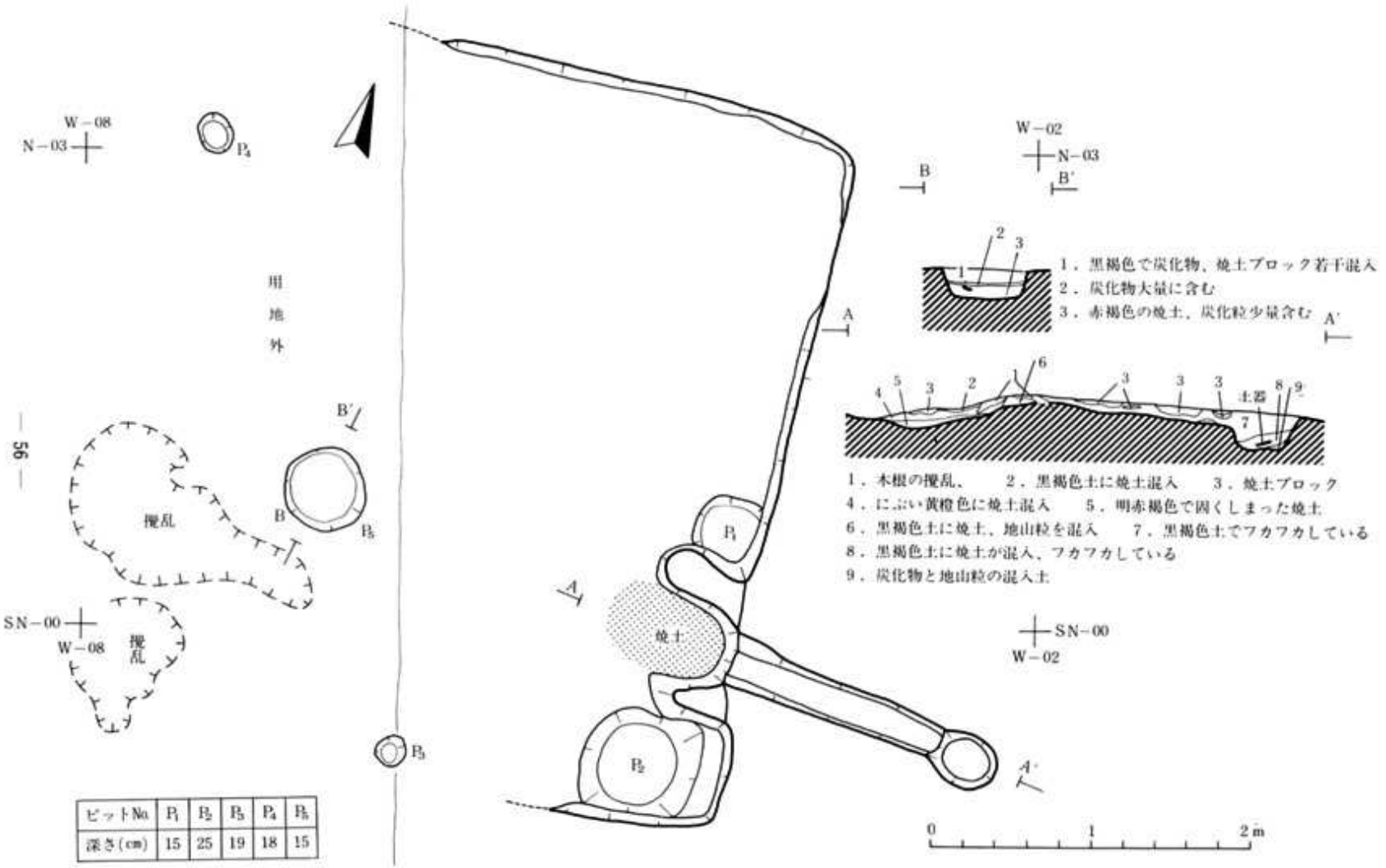
AI09住居跡（第3図）

本住居跡は客土用の土取りのため一部床面まで削平がおよんでおり、全体を検出することはできなかった。

〔遺構の確認〕　粗掘前、土取跡に焼土等が露出しており遺構の存在が予想された。遺構の検出確認面は第Ⅲ層の地山面である。

〔平面形、規模〕　西側半分以上が失なわれているため不明であるが残存部から推定すると、ほぼ隅丸方形を基調としたと考えられる。南北長は約4.5mである。

〔壁、床〕　地山を壁としている。残存壁は東辺と北辺の一部だけで、壁高はカマド付近の高



ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5
深さ(cm)	15	25	19	18	15

第3図　A109住居跡平断面図

い部分で約5cm程である。床も褐色の地山面を使用し、貼床、周溝は認められない。床面は一部削平により破壊されているものの平担であると思われ、カマド付近から中央部にかけてはかなり堅くしまっている。

〔柱穴〕　カマド部分それに床面に数個のピットが認められた。そのうちP_3とP_4の2個が柱穴と考えられる。

〔カマド〕　東壁南部に煙道をともなって設けられている。燃焼部の袖はかなり破壊されているが、焼面は70～50cm程の範囲で検出されよく焼きかたまっていた。燃焼部より煙道部へは特に段差はなく上向きに移行する。煙道部は長さ約80cmで底面は4～5°程の傾斜をもって下向し煙出し部に至る。煙出し部は煙道底面より約10cmの落ち込みとなっている。カマドの軸方向はN－94°－Eである。

〔貯蔵穴〕　カマドの袖両側に検出されたP_1とP_2は貯蔵穴と考えられる。P_1はカマドの北側袖と壁に密着して検出されたもので径30～40cm、床面からの深さは約15cmを測る。P_2は南東隅に検出され径約70cm、床面からの深さは約25cmを測り、遺物の出土もみている。

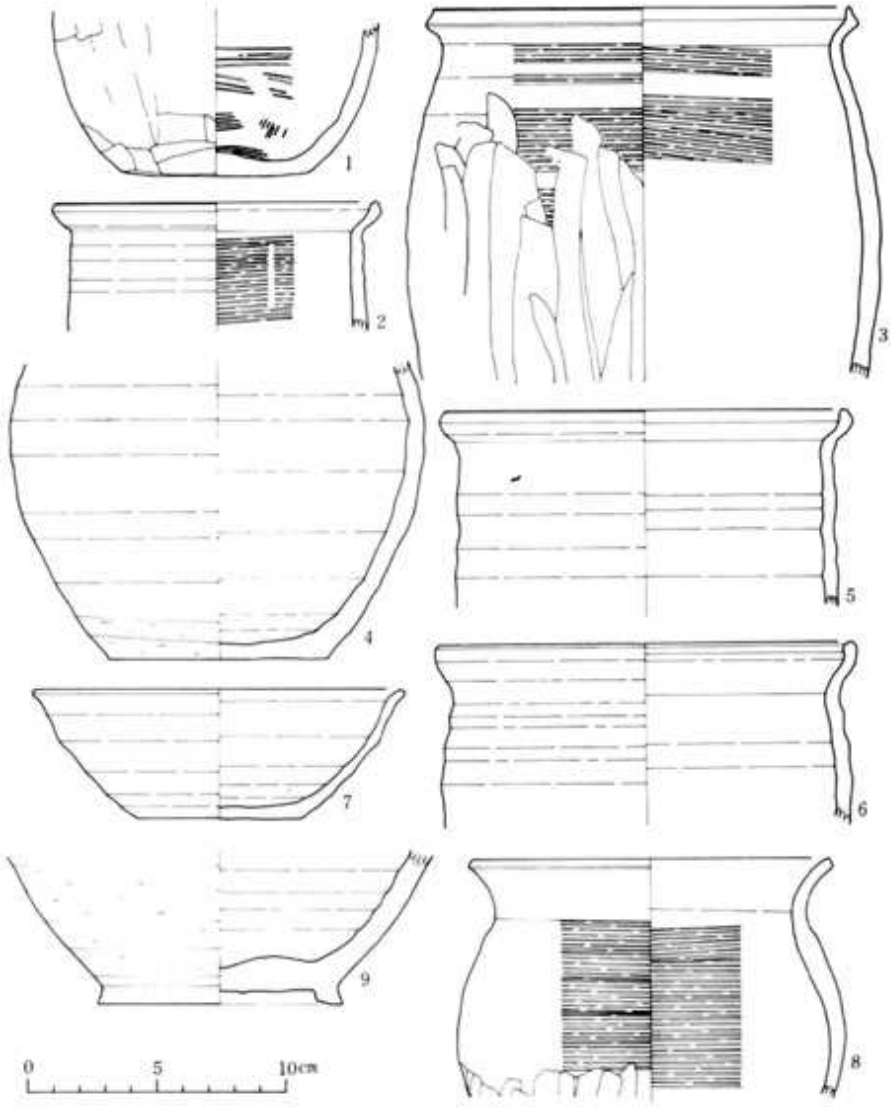
〔その他の施設〕　住居跡床面に検出されたP_5は径約50cm、床面からの深さ約20cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部には赤褐色の焼土が約7～8cmの厚さで検出され、壁も焼けていた。P_5は住居跡内の炉と考えられる。

〔出土遺物〕

土師器（第4図1～6）

甕　1は成形が巻き上げロクロ不使用の甕体部下半である。器形は底部からの立ち上がりより張らみを持って立つ。体部及び底部外面は荒いヘラケズリで成形され、内面は刷毛目が施されている。灰白色を呈し焼成はやや甘い。

2～6は成形にロクロを使用した甕類であるが、規模・器形には差異がある。2は口径約12cmと小形の甕である。体部はほぼ直立し、頸部より外傾、口縁は上方にツマミ出される。体部内面に刷毛状工具によるロクロナデが見られる。3は口頸部が短かく胴の長い甕で、体部が丸く張り出している。口縁は強く上方へツマミ出されている。体部内外面共に刷毛状工具によるロクロナデがなされた後、外面の下半は強くヘラケズリされている。色調はにぶい褐色を呈し焼成良好。内面に微量のカーボンが付着している。4は体部が丸く張らむ器形の甕体部で、底部は回転糸切り無調整、体部下端のみを回転ヘラケズリ調整している。浅黄色を呈し、焼成は普通。内面にカーボンの付着がある。5、6はいずれもロクロ成形後、調整を受けていない甕の体部上半部である。5は体部が直立、頸部より外傾して口縁上方にツマミ出され、口唇が丸くおさまる。灰白色を呈していて焼成はやや甘い。6は体部が幾分張らみ、頸部から緩く外傾、口縁はやや内弯し丸くおさまる。



第4図　A109住居跡出土土器実測図

これらの土器類はいずれも胎土中に石英などの小石を多量に混入している。

須恵器(7～9)

坏　7は灰白色を呈した須恵器の坏でやはり胎土には石英粒が多く混入、焼成は普通である。底部は回転糸切り無調整。器形は体部立ち上がりより外傾して、さらに口縁部が外方へ屈曲するもので、口唇は丸くおさまる。

小形甕　8は緑灰白～緑黒色の自然釉が内外面を覆った焼成良好の須恵器甕である。胎土中には砂粒を含む。体部は丸く張らみ、頸部から外傾、口唇は平たく終わる。内外面共に刷毛状工具により丁寧にロクロナデされ、外面の下半をヘラケズリしている。同一個体の破片はBJ06住居跡の埋土中からも出土している。

壺　9は高台を有する壺の体部下半である。黒褐色の自然釉が外面を覆い、焼成は普通、胎土には砂粒が混じる。底部切り離しは回転糸切りでロクロナデ調整されている。体部下半の外面は回転ヘラケズリを受けている。

図示土器以外の出土遺物については第2表にその分類と出土数を示したが、土師器の甕と赤

焼き土器の坏がある。赤焼き土器は坏のうち酸化炎焼成で軟質、ロクロナデの後の内黒処理、器面調整を受けていない土器を総じて呼称した。色調は赤褐色から灰白色まであり、器形・焼成度合にも個体差が見られる。以下、他遺構についても同様に扱かった。

第1表　　AI 09住居跡図示土器観察表

実測図番号	写真番号	出土層位	土器区分	器種	口縁部 外面	口縁部 内面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	器高(cm)	口径(cm)	頸部径(cm)	体部径(cm)	底部径(cm)	脚部径(cm)	脚部高(cm)
1		ピット2	土師器	甕			ヘラケズリ	横方向刷毛目	ヘラケズリ	刷毛目状 ロクロナデ				12.4	7.3		
2		〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	刷毛目状 ロクロナデ				12.4	11.2				
3		煙出し穴	〃	〃	〃	〃	刷毛目状 ロクロナデ 下半 ヘラケズリ	刷毛目状 ロクロナデ 下半 ロクロナデ				16.0	15.4	18.2			
4	4－2	埋土	〃	〃			ロクロナデ 下端回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り 無調整	ロクロナデ				16.0	8.4		
5		ピット2	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	〃				15.6	14.8	14.7			
6		かまど付近 埋土	〃	〃	〃	〃	〃	〃				16.0	15.0	16.0			
7	4－1	埋土	須恵器	坏	〃	〃	〃	〃	回転糸切り 無調整	ロクロナデ	5.0	14.2			6.4		
8		床面	〃	小形甕	〃	〃	刷毛目状 ロクロナデ 下半 ヘラケズリ	刷毛目状 ロクロナデ				14.0	12.0	15.0			
9		〃	〃	高台付壺			回転 ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					9.2	9.4	0.6

第2表　　AI 09住居跡出土土器破片数

出土地点	土器区分	器種	残存部位	ロクロ	外面	内面	底面	備考	破片数(個数)
カマド燃焼部	土師器	甕	体部	不使用	刷毛目→ヘラケズリ	刷毛目		BJ06住9図6に酷似	1
〃	〃	〃	〃	〃	刷毛目	〃			1
〃	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	〃			1
〃	〃	〃	底部	〃	〃	〃	ヘラケズリ		1
床面	赤焼き	坏	口縁～体部	使用	ロクロナデ	ロクロナデ			4
〃	〃	〃	底部	〃	〃	〃	回転糸切り 無調整		1
〃	土師器	甕	口縁部	不使用	横ナデ	横ナデ			1
〃	〃	〃	体部	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ			2
〃	〃	〃	口縁部	使用	ロクロナデ	ロクロナデ			1
〃	〃	〃	底部	〃			回転糸切り 無調整		1
ピット2	〃	〃	口縁部	不使用	横ナデ	横ナデ			1
〃	〃	〃	体部	〃	刷毛目	不明			1
〃	〃	〃	底部	使用			回転糸切り 無調整		1
ピット3	〃	坏	口縁部	〃	ロクロナデ	ヘラミガキ		内黒	1
ピット5	赤焼き	〃	口縁～体部	〃	〃	ロクロナデ			1
(カマド付近) 埋土	土師器	〃	底部	〃	〃	ヘラミガキ	回転糸切り 無調整		1
〃	〃	甕	体部下半	不使用	ヘラケズリ	不明			1

BC12住居跡（第５図）

当初BC06からBD06グリッドにかけて検出されたが、住居跡全体からみれば、東辺の一部と南東コーナーだけで遺構の殆どは用地外にあった為、地権者の了解を得て全掘した。

〔遺構の確認〕　BD06グリッドにも攪乱がおよび若干の焼土が露出していたので遺構の存在が予想できた。遺構の検出確認面は第Ⅲ層の地山面である。

〔平面形、規模〕　平面形は隅丸長方形で長軸約6.2m、短軸約5.8mを測る。長軸方向は南北である。床面積は32.5m²程と思われる。

〔壁〕　側壁はほぼ垂直に近く掘り下げられ、南辺の一部を除いては周溝が全周する。東辺の壁は床面近くまで削平され、周溝のみが残存する。西側では検出面から床面までおよそ15～20cmを測る。周溝は巾10～15cm、床面からの深さは10～20cm程を測り、U字ないしはV字型の断面を呈し、底面は凹凸がある。

〔床〕　客土用の土取りや木根の攪乱が一部床面までおよんでいるが、床面はほぼ平担である。地山を床として使用しており、北西隅を中心に北壁と西壁に沿って1～1.5m巾で割合にやわらかい部分が認められるほかは堅くしまっている。

〔柱穴〕　側壁周溝と床面にピットが検出された。柱穴は周溝と床面に配置されており、特に床面のP_3、P_5、P_6、P_8はほぼ対角線上に対応の位置にあり、主柱穴と考えられる。

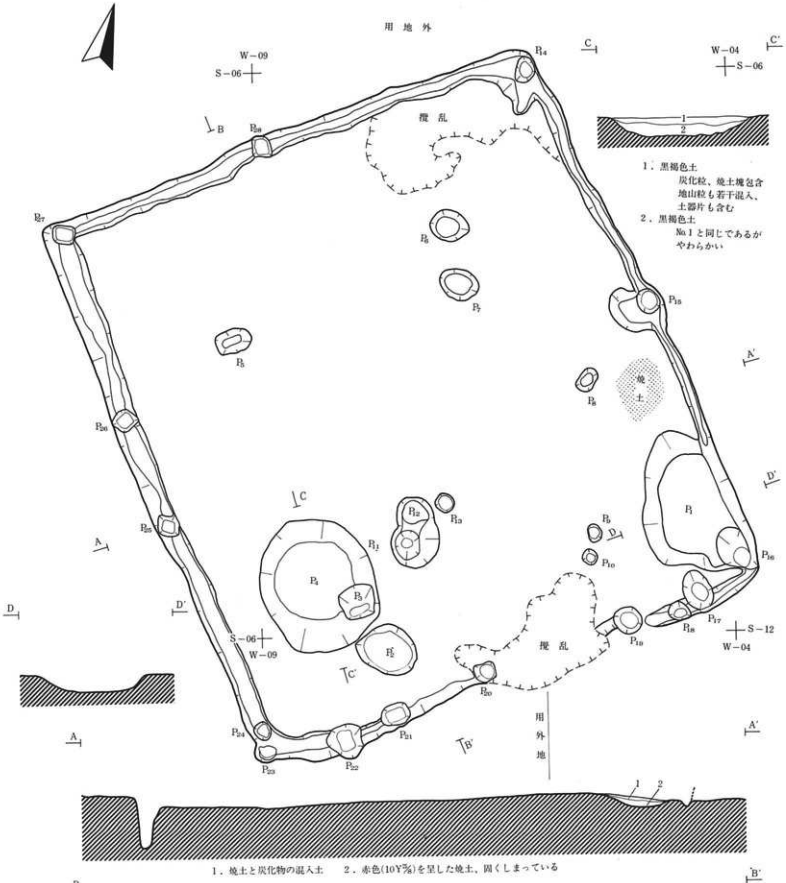
〔貯蔵穴〕　貯蔵穴と断定できるものはないが、類似したものとしてP_1、P_2、P_4がある。P_1とP_2からはそれぞれ遺物の出土をみている。

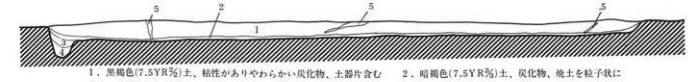
〔出土遺物〕

土師器（第６図５～10）

坏　小破片が数点出土しているだけである（第４表参照）。底部の残存資料では、底部回転糸切り一部回転ヘラケズリ調整を受けた内黒坏が見られる。

甕　甕では成形時にロクロ不使用のものと、使用したものとが混在しているが、前者が圧倒的に多い。図中５～８はロクロ不使用、９、10はロクロ使用の甕である。５は体部が丸く脹らみ、短かく外反する口頸部の付く甕である。最大径は体部にある。明褐色を呈していて焼成は甘く、胎土中には石英等の小石が極めて多量に混入している。体部内外面ともに不整方向のヘラナデを行い、外面の下半を強くヘラケズリしている。口縁部は内外面ともに横ナデ。６は胴の長い器形の甕上半部である。頸部にはナデによって僅かな段が作られている。口頸部は緩く外反し、口唇は丸くおさまる。体部外面は縦方向の刷毛目の後、ナデに似た浅いヘラケズリ（以下「浅いヘラケズリ」と略す）を行っているが、工具の巾など詳しくは観察できなかった。内面は横方向の刷毛目調整が行なわれている。口縁部は外面刷毛目の後、内外ともに横ナデしている。褐色を呈し焼成はやや甘い。７～10は最大径が16cm以下の小形の甕である。７は体部





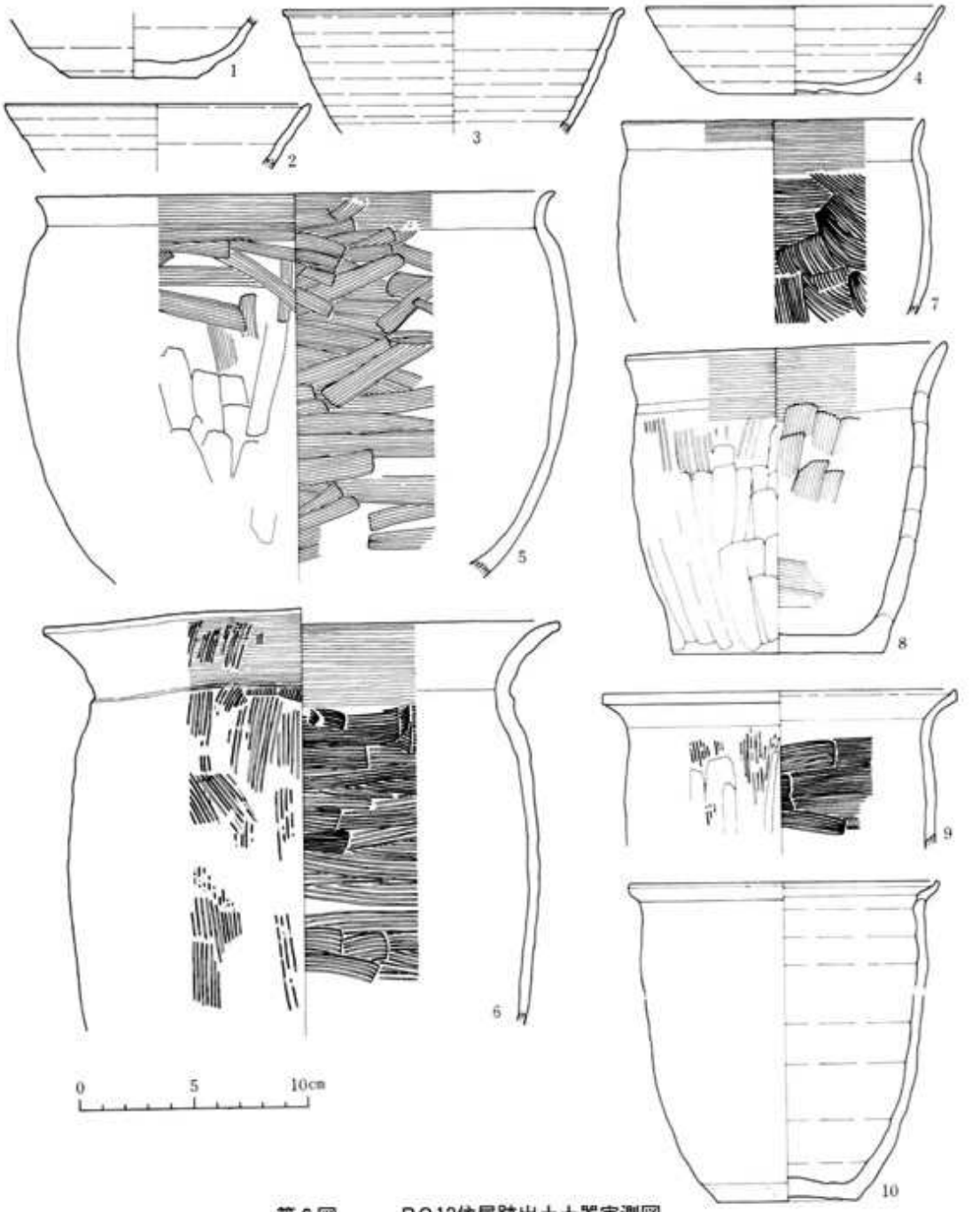
1．黒褐色(7.5YR3/1)土、粘性がありやわらかい炭化物、土器片含む　2．暗褐色(7.5YR3/3)土、炭化物、焼土を粒子状に含む、土器片も包含する　3．黒色(7.5YR3/1)土、やわらかくフカフカする　4．暗褐色(7.5YR3/4)土、地山粒混入し粘性あり　5．木根による攪乱

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
深さ(cm)	18	21	51	20	52	25	17	17	16	27	17	15	19	33
ピットNo.	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28
深さ(cm)	37	56	46	27	49	45	42	52	43	32	43	37	37	48

0　1　2m

※深さは床面よりの深さを示します

第5図　BC12住居跡平断面図



第6図　　BC12住居跡出土土器実測図

が幾分丸みを帯びた器形で、口頸部はほぼ直立、口唇は先細る。体部外面は器面の剝落が著しく調整痕は不明、内面は丁寧な刷毛目調整が行なわれている。口縁部は内外共に横ナデされている。8は器高が低く、底径の大きい形の甕で、頸部の段は不明瞭のものである。明赤褐色を

呈し、焼成が甘く、器面全体が磨滅あるいは板状剥離している。体部外面は刷毛目の後、ヘラケズリ、内面はヘラナデ調整されている。口縁部は横ナデ。巻き上げの際の接合痕が明瞭である。

9はロクロ使用の甕であるが、成形後体部全面に調整を受けたもの。体部は僅かに丸味を持って立ち、頸部から強く外傾、口唇は上方へツマミ出される。体部外面は刷毛目の後浅いヘラケズリを受け、内面は刷毛目が見られる。橙色を呈し、焼成はやや甘い。10はやはりロクロ使用の甕だが、体部外面は器面の大半が剥落している。体部は僅かに膨らみを持って立ち、極端に短かい口縁部がつく。口縁は外傾し上方にツマミ出されている。底部は回転糸切りの後、手持ちヘラケズリを受け、体部下端は回転ヘラケズリを受けている。

上記の土器はいずれも胎土に多量の小石（特に石英）を混入している。

須恵器（2～4）

坏　2は坏口縁部で、ほぼ直線的に外傾するものである。4は底部回転ヘラ切りの坏である。器形は体部下端に丸味を持ちながらほぼ直線的に外傾するもので、口唇がやや丸む。色調は灰白、焼成は普通で、口縁部に重ね焼痕が見られる。

埦　3は上記の坏に比して器高の高い土器で、口径15cmに比して推定器高6cm強と思われる。体部はほとんど直線的に外傾して立ち、口縁は外方にツマミ出されている。にぶい橙色を呈し、充分な環元炎焼成には至っていない。胎土に砂粒を混入。

赤焼き土器（1）

1は赤焼きの坏下半部である。橙色を呈し、焼成は非常に甘い。底部は回転糸切り無調整である。図示土器以外の出土土器については、第4表を参照。

第3表　　**BC12住居跡図示土器観察表**

実測図番号	写真番号	出土層位	土器区分	器種	口縁部 外面	口縁部 内面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	器高(cm)	口径(cm)	頸部径(cm)	体部径(cm)	底部径(cm)
1		埋土	赤焼き	坏			ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り無調整	ロクロナデ					5.6
2		周溝埋土	須恵器	〃	ロクロナデ	ロクロナデ						13.4			
3		〃	〃	埦	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ				15.0			
4	4－3	埋土 床面	〃	坏	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り無調整	ロクロナデ	3.9	13.0			6.6
5		ピット1	土師器	甕	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ下半ヘラケズリ	ヘラナデ				22.6	21.8	24.4	
6		ピット1,2 周溝	〃	〃	刷毛目→横ナデ	〃	縦方向刷毛目→浅いケズリ	横方向刷毛目	荒くヘラケズリ	底周部ヘラナデ		22.6	18.2	20.6	8.0
7		ピット4	〃	〃	横ナデ	〃	器面剥離	横～斜方向刷毛目				13.2	12.8		
8	4－4	炉付近	〃	〃	〃	〃	刷毛目→ヘラケズリ	ヘラナデ			13.6	14.0	12.9	12.9	9.3
9		周溝埋土	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	刷毛目→浅いケズリ	横方向刷毛目				15.4	13.6		
10	4－5	床面	〃	〃	〃	〃	器面剥離 下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	ロクロナデ		13.4		11.0	6.2

第4表　　BC12住居跡出土土器破片数

出土地点	土器区分	器種	残存部位	ロクロ	外面	内面	底面	備考	破片数(個体)
床面	土師器	坏	体部下半～底部	使用	ロクロナデ 下端 回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	外面一部 回転ヘラケズリ	内黒	1
〃	須恵器	〃	口縁～体部	〃	ロクロナデ	ロクロナデ			1
〃	土師器	甕	体部	不使用	縦方向刷毛目	縦方向刷毛目			1
〃 (炉付近)	〃	〃	〃	〃	刷毛目→浅いケズリ	〃			1
〃	〃	〃	体部下端～底部	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ	外面 細かなヘラナデ		1
ピット1	〃	坏	体部	〃	ヘラミガキ 下端 ケズリ	ヘラミガキ			1
ピット2	〃	甕	口縁部	使用	ロクロナデ	ロクロナデ			2
周溝埋土	須恵器	坏	〃	〃	〃	〃			2
埋土	土師器	〃	口縁～体部	〃	〃	ヘラミガキ		内黒	2
〃	〃	〃	体部～底部	〃	〃	〃	回転糸切り 無調整	〃	2
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り 一部手持ヘラケズリ		1
〃	須恵器	〃	口縁部	〃	〃	ロクロナデ			1
〃	〃	壺	体部	〃	上半 回転ヘラケズリ 下半 縦方向ケズリ	〃		長頸壺	1
〃	〃	〃	〃	〃	縦方向ヘラケズリ	〃		〃	1
〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃		〃	1
〃	土師器	甕	口縁～体部上半	不使用	口縁一横ナデ 体部一ヘラケズリ	口縁一横ナデ 体部一ヘラナデ			1

BJ06住居跡（第7・8図）

〔遺構の確認〕　第Ⅱ層を掘り下げていくうち、土器片等が出土し遺構の存在が予想されたが直接の検出確認面は第Ⅲ層の褐色土（地山面）である。

〔平面形、規模〕　平面形は隅丸方形で一辺約3.6mを測る。床面積は11.2m²程と思われる。

〔堆積土〕　床面までは約40cmを測り、撹乱もおよんでおらずほぼ原形のまま残されている。基本的には4層にわかれる。

第1層(黒褐色土)：砂含みの粘土質シルトでⅡ層と類似している。炭化粒・焼土粒を含み土器片も若干出土する。住居跡の埋土中央部に広い分布を示す。

第2層(暗褐色土)：20～25cmの厚さを示し、住居跡の全域に分布している。1層より炭化物、焼土の混入多く土器片も包含する。住居の火災後の埋土である。

第3層(暗褐色土)：住居跡の壁沿いに分布する。焼土・炭化物・地山粒も含み土器片も包含する。住居の火災後に周辺から入りこんだものと考えられる。

第4層：住居が火災にあった時に堆積したものと思われる。殆とが焼土と木炭の破片、炭化した部材であり、土器も包含する。焼土及び炭化部材の上にはかなりの数の石が中央部に集中して検出された。これは屋根に乗せた石が住居の火災と同時に落ち込んだものと考えられる。4層は床面全域に亙ってみられた。

〔壁、床〕　地山を直接壁とし一部焼土化している部分もある。壁は床面よりやや緩やかな傾斜で立ち上がる。残存する壁の高さは約40cmを測る。床面はほぼ平担で地山を直接使用し堅くしまっている。周溝・貼床はない。

〔柱穴〕　床面に2個のピットが認められたが柱穴ではない。精査を加えたが床面からは検出できなかった。また住居跡の周辺に数個のピットが検出されたが性格は不明である。

〔カマド〕　東壁中央やや南寄りに煙道をともなって設けられている。カマドは潰れたかたちで検出された。燃焼部の両袖と天井には石を使用して堅牢に造られている。袖の部分は地山面を若干掘り窪め、石を芯にしてシルトで固めて構築されている。燃焼部側壁もよく焼けており天井の石もかなりの熱を受けた痕跡がある。

燃焼部より煙道部へは特に段差はなく上向きに移行する。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、長さは約1mを測る。底面は10°程の傾斜で下向し煙出し部に至る。煙出し部は若干の落ち込みをもってほぼ垂直に立ち上がる。カマドの軸方向はN—76°—Eである。

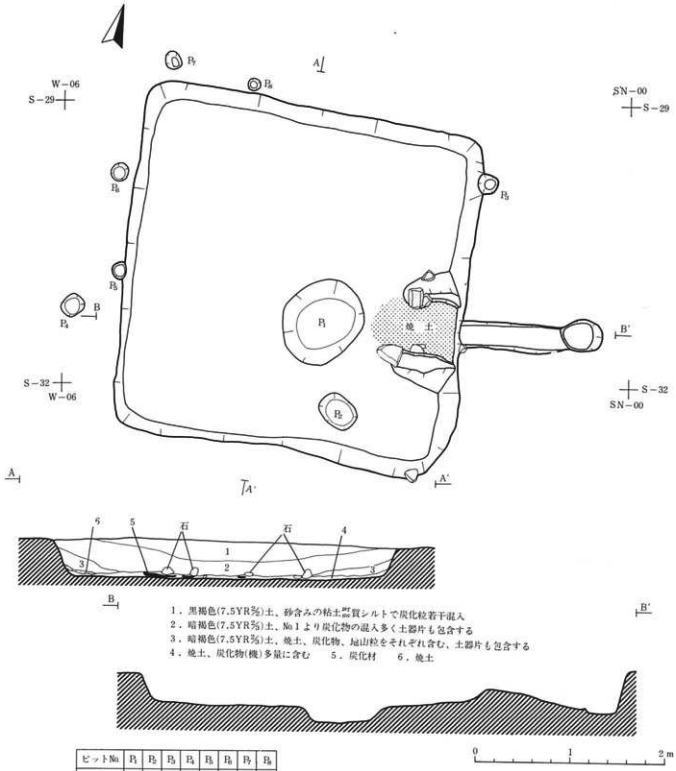
〔貯蔵穴〕　床面に2個のピットが検出されたが、貯蔵穴と断定できるものはない。

〔出土遺物〕(第9、10、11図)　本住居跡は焼失住居ということもあり、多量の遺物が出土した。特に土師器の甕類の出土が多い。一応埋土4層以下の出土遺物を住居跡に伴うものと考え、それ以上の土層からの出土遺物は埋土出土として扱った。

土師器（第9、10図）

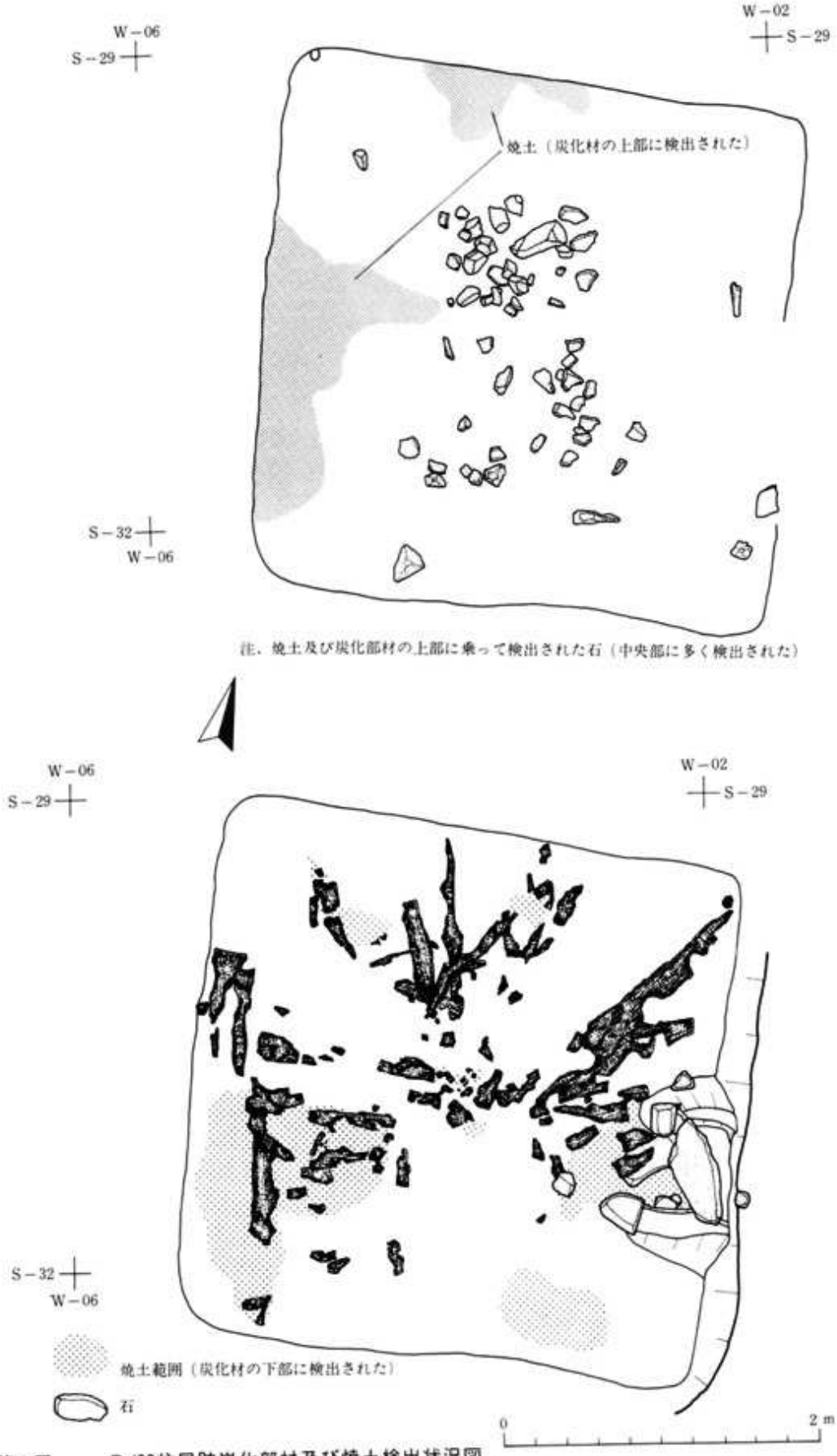
坏(第9図1～5)　いずれもロクロ使用の坏で、内面黒色処理されている。1は比較的器高が高く、体部に丸味を持って立つ器形で、口唇は丸む。鈍い橙色を呈し、焼成はやや良好。底部外面は回転糸切り無調整、体部下半に回転ヘラケズリを受けている。内面は底部から口縁部まで横方向主体の丁寧なヘラミガキが施されている。2は内面調整が、底部から口縁下方まで縦方向に行なわれている。底部はやはり回転糸切り無調整である。鈍い橙色を呈し、焼成は良好。3はやや小形の坏で、口縁部がぶ厚く作られている。内面のヘラミガキは横方向である。4はやはり小形の坏で、口縁部は先細る。体部外面に「入？」の墨書があるが、欠損しているため下の一字は判読できなかった。内面は口縁部から体部にかけて不整方向、底部周辺は放射状の細かなヘラミガキが行なわれており、器面の状態は良好である。5は比較的口径の大きい坏で、口縁部は厚く作られ、丸くおさまるものである。内面は口縁～体部を横方向にヘラミガキした後、底部～体部を縦方向にヘラミガキしている。

甕　土師器の甕類の出土は本住居跡中最も多かったもので、ロクロ使用、不使用共に混在している。規模は器高約12cmの小形のものから30cm以上の大形のものまであり、器形・器面調整法にも個体差がある。しかし、大形の甕類は巻き上げ、ロクロ不使用の成形によるものがほとんどで、小形の甕類の中にロクロ使用、不使用が混在しているという傾向が見られる。成形・器



ピットNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
深さ(cm)	16	25	13	20	6	20	23	17

第7図　BJ06住居跡平断面図



第8図　BJ06住居跡炭化部材及び焼土検出状況図

面調整法の類別から記述を行う。

1．ロクロ不使用　体部外面一縦方向の刷毛目の後、部分的に浅いヘラケズリ、体部内面一横方向の刷毛目のもの(第9図6、8)。口縁部は内外面とも横ナデされている。8は口縁部外面も刷毛目の後、横ナデしたものである。器形は胴が長く、口頸部は短かく、強く外反する。体部外面にカーボン付着。焼成は普通。体部外面一縦方向のヘラケズリ、体部内面一横方向のヘラナデのもの(第9図7、9、第10図1、9、10)。口縁部はやはり横ナデされている。9図9は内面が磨滅して、調整痕は不明瞭となっているが、約3cm単位の幅広のヘラでナデられている。器形は8に似るが、体部の張らみが強い。体部外面に多量のカーボンが付着している。10図1は器面の磨滅・剝落が甚しく、またかなりの加熱を受けたものである。器形は、体部下半がやや張らみながら立ち、口縁部が外反、最大径は口縁部が持つ。9、10は最大径が体部にある甕で、口頸部が外反する。10は、体部外面のヘラケズリは、頸部付近に深く食込んで終結している。体部外面一縦方向ヘラケズリ、内面一刷毛目の後、縦方向ヘラナデ(第10図3)。体部外面一縦方向ヘラケズリ、体部内面一縦方向刷毛目のもの(第10図2)。2は器高35cmを超すと思われる大形の甕である。内面の調整は幅広の工具で整然と行なわれている。橙色を呈していて焼成は良好。内外面に多量のカーボンが付着している。

2．ロクロ使用　外面一ロクロナデ、内面一ヘラミガキ、黒色処理されているもの(第10図4)。小破片からの推定復元だが、口径は比較的大きいものである。内面のヘラミガキは細かく丁寧に行われている。外面一ロクロナデ、下半を回転ヘラケズリ、内面一ロクロナデのもの(6)。底部は回転糸切り、無調整である。内外面ともロクロナデの後、再調整などは行われていないもの(7)。やはり底部は回転糸切り無調整である。6、7ともに鈍い橙色を呈して、焼成はやや甘い。

以上の土師器類は胎土に多量の石英粒などの混入物を含んでいる。

須恵器（第11図1～9）

坏　11図1～5の坏は、いずれも底部回転糸切り無調整の坏である。1は体部立ち上がりより、ほぼ直線的に外傾するもので、内面のロクロ痕はシャープである。2は比較的器高の高い坏で、焼成良好である。3はロクロ成形後、内面を再びナデて、第一次のロクロ痕の陵を押しつぶし、谷の部分を沈線化したものである。第二次のナデにロクロが使用されているか否かは判断できなかった。色調は灰色で胎土は細かく良好である。4、5は器高の低い坏で、特に5は器高に比して口径・底径ともに大きい皿形に近い形となっている。色調は暗灰褐色、体部外面の口縁下方に自然釉が見られる。焼成普通。

高台付坏　6は脚高5mmの短かい高台の付いた坏である。高台部接合後は、坏底部に一部回回糸切り痕を残してロクロナデしている。

壺　7は比較的口が広く、肩の張らない形態の壺である。ロクロナデ後、外面を回転ヘラケズリしている。底部外面は回転ヘラケズリの後、中央付近を指頭により押えこんでいる。

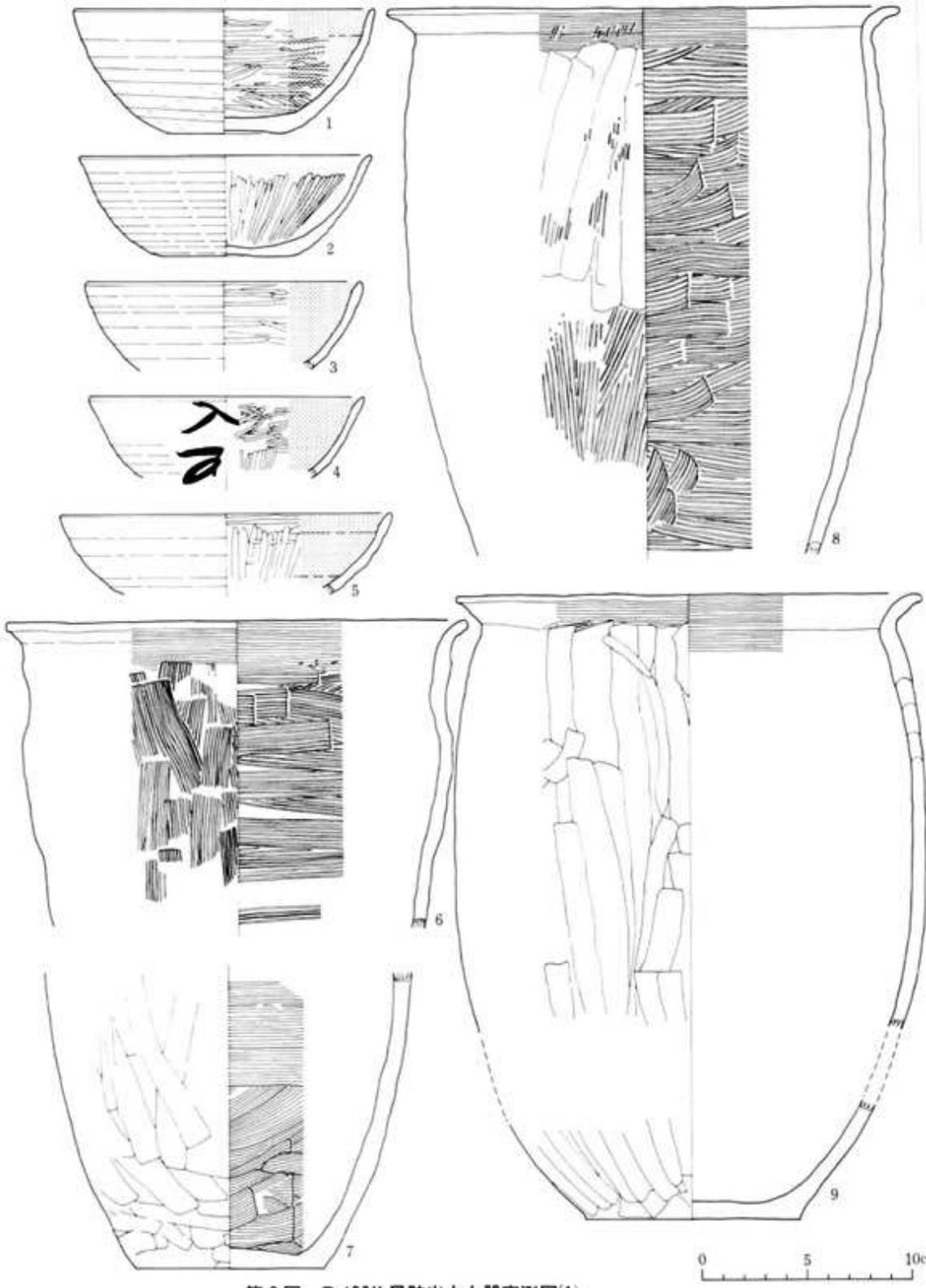
全体に灰褐色を呈し、内面や外面の頸部付近に自然釉が見られる。8は短かい高台の付いた長頸の壺である。頸部の接合は二段接合で、体部内面に補強粘土を付加している。外面は上半部と下半部とをそれぞれ回転ヘラケズリしたもの。頸部に刷毛状工具によるロクロナデが行なわれている。全体が灰色を呈していて、焼成は普通だが、器面の板状剥離が著しい。9は大形の広口壺の口頸部片、12～13は体部片である(あるいは大甕か？)。12は外面を灰色の自然釉が覆い、焼成良好のもの。外面叩きの平行沈線は木目平行のもので、交差して叩きしめられている。13はやはり器面暗灰褐色の自然釉が見られる。内面には放射状に沈線文が彫られたあて工具が使用されている。14は焼成不良の生焼けである。14の内面のあて工具文様は不明瞭であった。

赤焼き土器（第11図10・11）

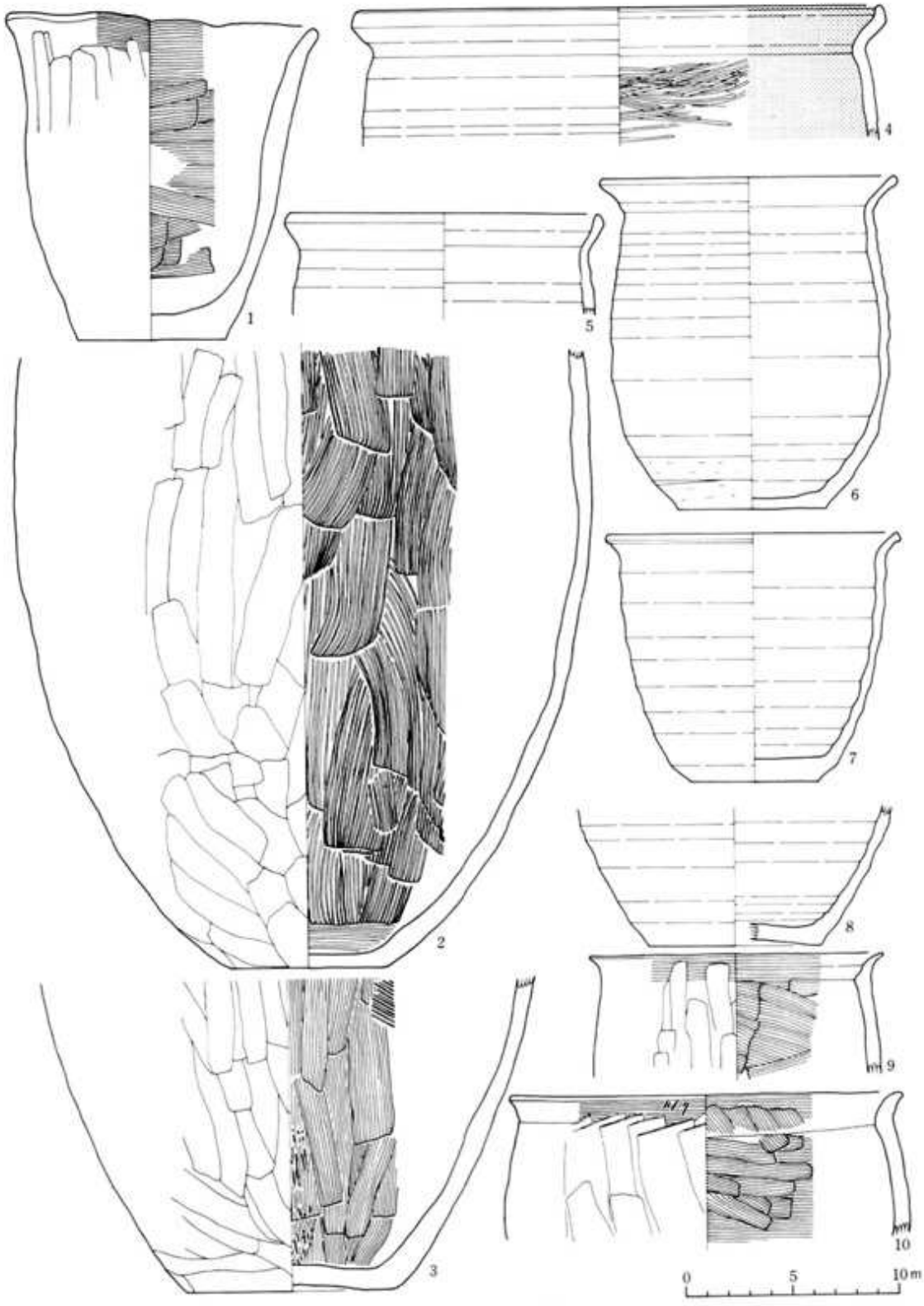
10は暗灰褐色を呈して、焼成不良、軟質である。器面は無調整で口縁はぶ厚く丸む。11は橙色を呈した軟質の坏である。底部は回転糸切り無調整。

第5表　　BJ06住居跡出土土器破片数

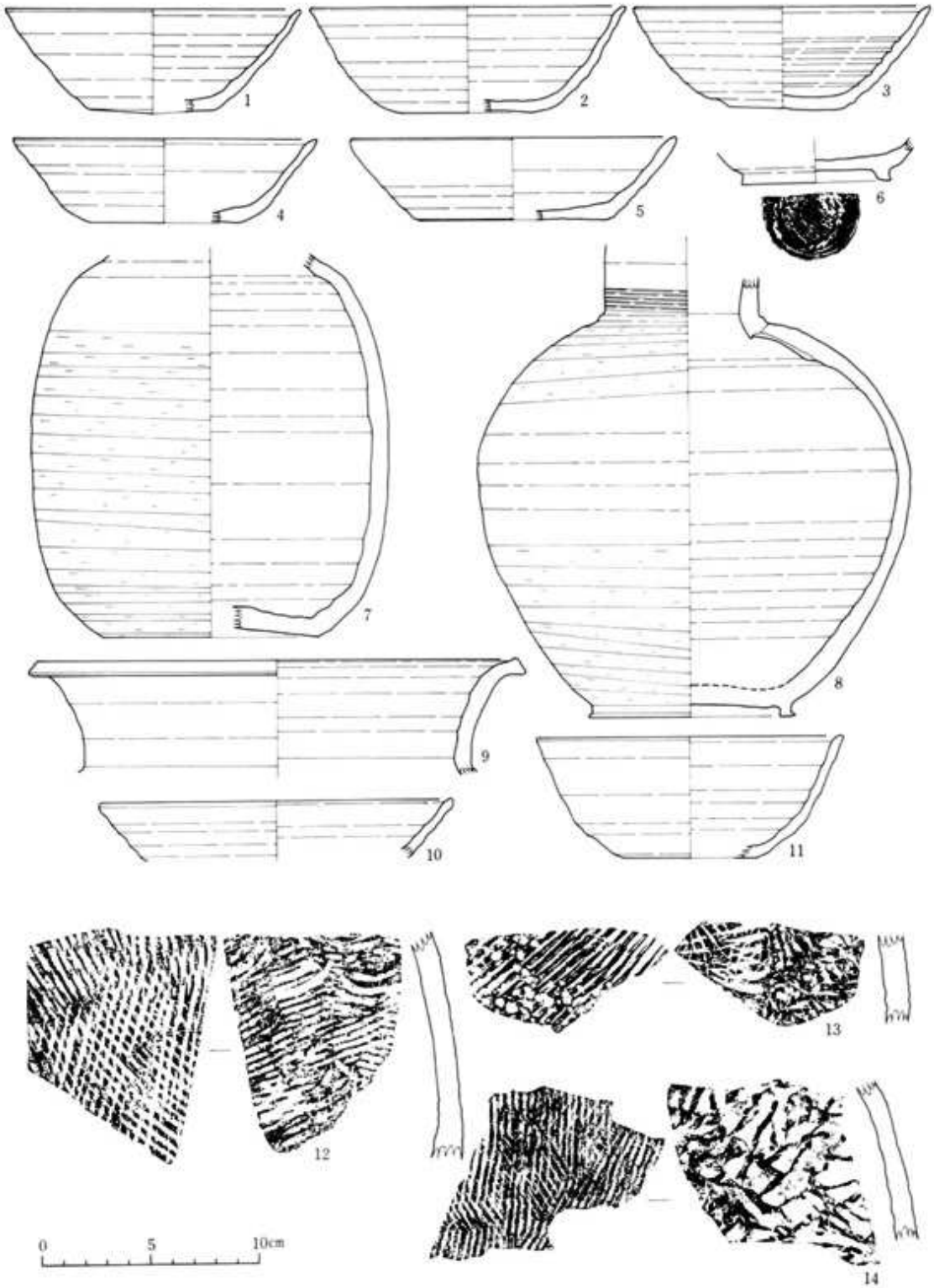
出土地点	土器区分	器種	残存部位	ロクロ	外面	内面	底面	備考	破片数(個体)
床面	土師器	甕	体部	不使用	ヘラケズリ	刷毛目			1
〃	〃	〃	口縁部	使用	ロクロナデ	ロクロナデ			2
かまど袖	〃	〃	〃	〃	〃	細かなヘラミガキ			1
〃	〃	甕	〃	不使用	横ナデ	横ナデ			1
〃	〃	〃	体部	〃	浅いヘラケズリ	刷毛目			1
ピット2	〃	〃	口縁部～体部上半	〃	口縁―横ナデ 体部―ヘラケズリ	口縁―横ナデ 体部―刷毛目			1
〃	〃	〃	体部下半	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ			1
〃	〃	〃	体部	使用	ロクロナデ 下半 ヘラケズリ	ロクロナデ		床面出土土器片と接合	1
ピット4	赤焼き	坏	底部	〃		ロクロナデ	回転糸切り無調整		1
埋土	土師器	〃	口縁～体部	〃	ロクロナデ	ヘラミガキ		内黒	2
〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃		〃	1
〃	〃	〃	底部	〃	〃	〃		〃	1
〃	須恵器	〃	口縁～体部	〃	〃	ロクロナデ			1
〃	〃	〃	体部～底部	〃	〃	〃	回転糸切り無調整		1
〃	赤焼き	〃	口縁～体部	〃	〃	〃			5
〃	〃	〃	体部～底部	〃	〃	〃	回転糸切り無調整		3
〃	土師器	甕	口縁～底部	不使用	口縁―横ナデ 体部―ヘラケズリ	口縁―横ナデ 体部―不明	外面荒いヘラケズリ		1
〃	〃	〃	体部	〃	ヘラケズリ	不明			1
〃	〃	〃	〃	〃	浅いヘラケズリ	ヘラナデ			1
〃	〃	〃	体部～底部	〃	上半 浅いヘラケズリ 下半 ヘラケズリ	刷毛目？	ヘラケズリ		1
〃	〃	〃	〃	〃	ヘラケズリ	刷毛目→ヘラナデ	〃		2
〃	〃	〃	口縁～体部	使用	ロクロナデ	ロクロナデ			4
〃	〃	〃	体部	〃	ロクロナデ 下半 ヘラケズリ	〃			1
〃	須恵器	壺	〃	〃	ロクロナデ →回転ヘラケズリ	〃		長頸壺片	1
〃	〃	〃	〃	〃	上半―カキメ 下半―ヘラケズリ	〃		AI06住4図8と同一個体	2
〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃		長頸壺片	1



第９図　ＢＪ06住居跡出土土器実測図(1)



第10図　BJ06住居跡出土土器実測図(2)



第11図　BJ06 住居跡出土土器実測図(3)・拓影図

第6表　　BJ06住居跡出土土器観察表

実測図番号	写真番号	出土層位	土器区分	器種	口縁部 外面	口縁部 内面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	器高(cm)	口径(cm)	頸部径(cm)	体部径(cm)	底部径(cm)	脚部径(cm)	脚高(cm)
9図-1	4－6	床面	土師器	坪	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ 下半 回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転糸切り 無調整	ヘラミガキ	6.0	14.2			5.2		
-2	4－7	床面直上	〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	〃	〃	4.8	14.0			6.0		
-3		〃	〃	〃	〃	ヘラミガキ	〃	〃				13.0					
-4	6－2 ド	かまど部分	〃	〃	〃	〃	〃	〃				13.0					
-5		埋土	〃	〃	〃	〃	〃	〃				15.6					
-6		〃	〃	甕	横ナデ	横ナデ	縦方向刷毛目→部分的に強いケズリ	横方向刷毛目				21.8	20.2	20.4			
-7		床面直上	〃	〃			ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	一部ヘラケズリ	底周部ヘラナデ					9.0		
-8		床面	〃	〃	横ナデ	刷毛目→横ナデ	刷毛目→部分的ケズリ	横方向刷毛目				24.4	21.8	22.8			
-9	5－2	かまど	〃	〃	〃	横ナデ	ヘラケズリ		ヘラケズリ			22.2	19.8	22.2	10.2		
10図-1	5－1	埋土	〃	〃	〃	〃	〃	横方向ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	15.0	14.5	13.7	11.8	7.0		
-2	5－3	かまど	〃	〃			〃	縦方向刷毛目 下端ヘラナデ		〃				27.0	7.3		
-3		〃	〃	〃			〃	一部刷毛目 縦方向ヘラナデ		〃					9.7		
-4		床面	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ				24.2	23.0				
-5		埋土	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ				14.4	13.4				
-6	5－4	かまど	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ 下端 回転ヘラケズリ	〃	回転糸切り 無調整	ロクロナデ	15.6	14.0	11.6	13.0	7.0		
-7	5－5	床面	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃	〃	〃	11.7	13.8	12.4	12.4	6.0		
-8		埋土	〃	〃			〃	〃	〃	〃					8.0		
-9		〃	〃	〃	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ				13.8	12.7	13.5			
-10		床面	〃	〃	一部刷毛目→横ナデ	横ナデ 縦方向ヘラナデ	〃	〃				18.2	17.6	19.1			
11図-1		かまど	須恵器	坪	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り 無調整	ロクロナデ	4.8	13.6			5.8		
-2	4－8	床面	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4.9	14.6			6.0		
-3	4－9	床面直上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4.7	13.6			5.0		
-4		埋土	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	3.9	14.0			6.8		
-5		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	3.8	15.0			8.6		
-6		〃	〃	高台付坪					ロクロナデ	〃					6.8	6.8	0.5
-7		床面	〃	壺			ロクロナデ →回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ 中央部指頭押え	〃				16.4	10.0		
-8	5－6	埋土	〃	〃	ロクロナデ 頸部に刷毛状ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ 一部 回転ヘラケズリ	〃	ロクロナデ	器面剥離		2	7.6	20.2	9.2	9.6	0.5
-9		床面	〃	広口壺	ロクロナデ	〃						22.0	18.0				
-10		かまど	赤焼き	坪	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ				16.2					
-11		埋土	〃	〃	〃	〃	〃	〃	回転糸切り 無調整	ロクロナデ	5.6	14.2			6.0		
-12		床面	須恵器	広口壺 or大甕			平行叩き	平行沈線 あて工具									
-13		〃	〃	〃			〃	蓮華文？									
-14		埋土	〃	〃			〃	〃 ？									

CC03住居跡（第12図）

〔遺構の確認、重複〕　遺構の検出確認面は第Ⅲ層の地山面である。CC032ピットと重複しているが、住居跡は新しい。

〔平面形、規模〕　平面形は隅丸長方形で長軸約3.1m、短軸約2.5mを測る。長軸方向は南北である。床面積は約6.4m²と思われる。

〔壁、床〕　地山を壁としている。残存する壁高は東辺で約15cm、西辺で約10cmを測る。床面も地山を使用している。貼床・周溝は認められない。

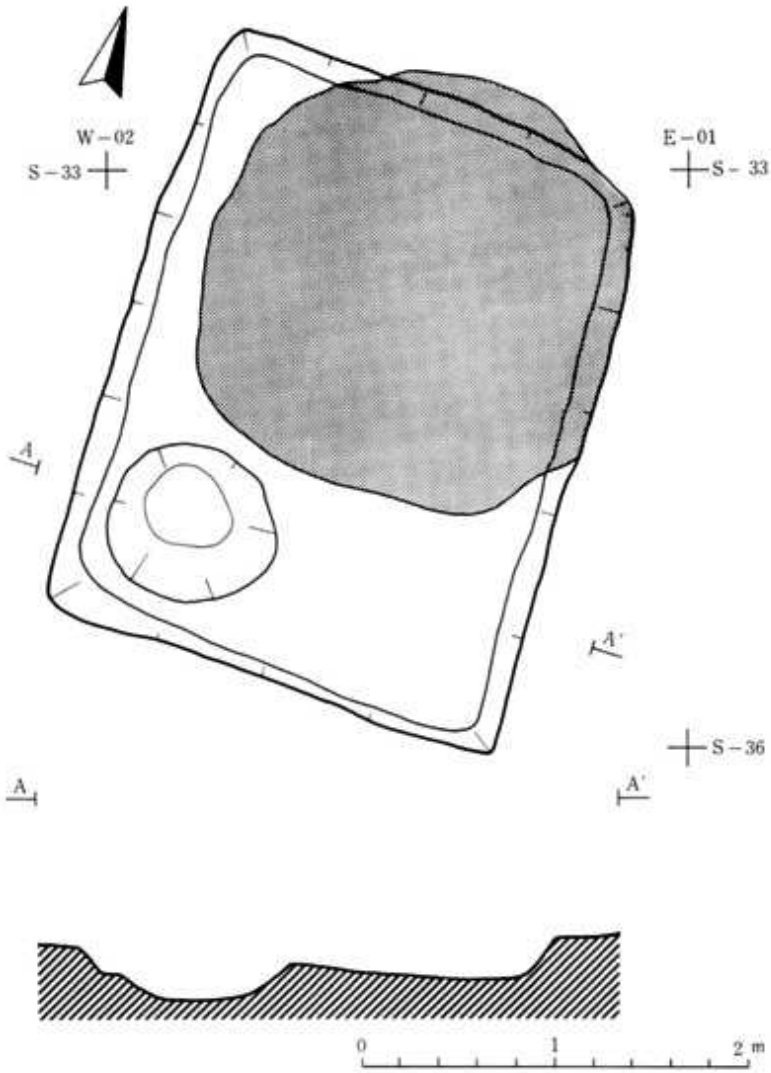
〔柱穴〕　精査を加えたが検出されなかった。

〔カマド〕　カマドは検出されず、焼土の痕跡もない。

〔その他〕　南西隅に径80cm、床面からの深さ約18cm程のピットの検出をみたが、性格は不明である。

〔出土遺物〕

遺物の出土は皆無である。



第12図　CC03住居跡平断面図

CE06住居跡（第13図）

〔遺構の確認〕　遺構の検出確認面は第Ⅲ層の地山面である。

〔平面形、規模〕　西側が後世の攪乱を受けて破壊され、南壁も残存していないため不明であるが、残存部から推定するとほぼ隅丸の方形を基調としたと考えられる。また南北長は4.8～5.0mと推定される。

〔壁・床〕　壁、床共に地山を使用している。残存壁は北壁と東壁の一部だけで他は消滅または破壊されている。残存する壁高は10cm前後を測る。

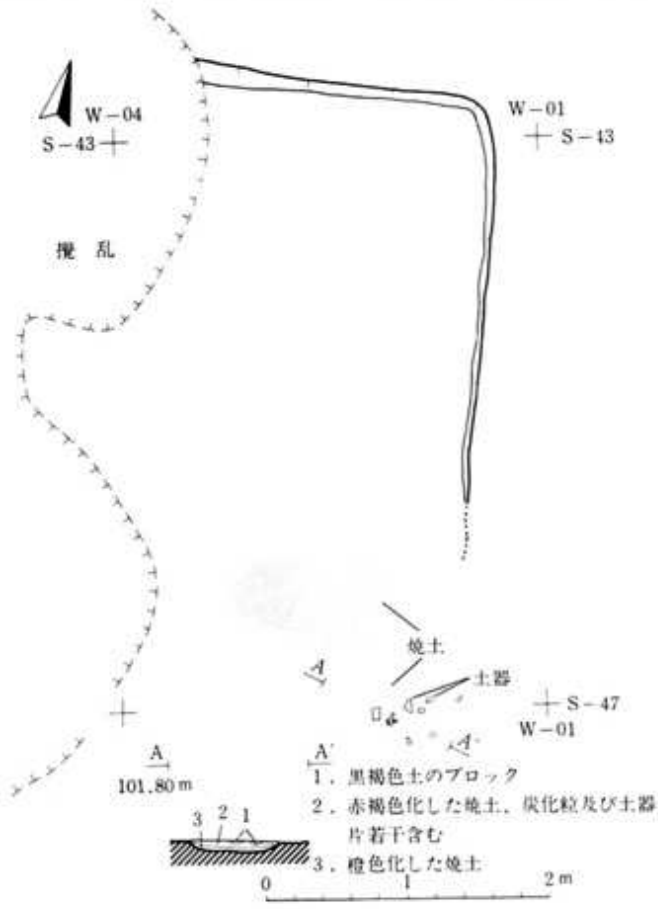
〔柱穴〕　精査を加えたが検出できなかった。

〔カマド〕　カマドそのものの検出はなかったが、南東隅に2個所の焼土を検出した。北側の焼土は極めて薄いものであるが、南側のものはよく焼け5～6 cm程の落ち込みとなっていた。煙道・煙出し部の痕跡は認められなかった。

〔出土遺物〕　CE06住居跡の床面からは遺物の出土は皆無であり、遺構の時期決定には資料が乏しい。第14図第8表の土器は埋土中からの出土品である。

土師器（第14図2～6）

坏　14図2を含め5個体の破片が出土した。2の坏は内面に不整方向に入り組んだ細かなヘラミガキを受けている。他に底部片では、回転糸切り無調整の坏などが出土している（第8表参照）。いずれも内黒である。



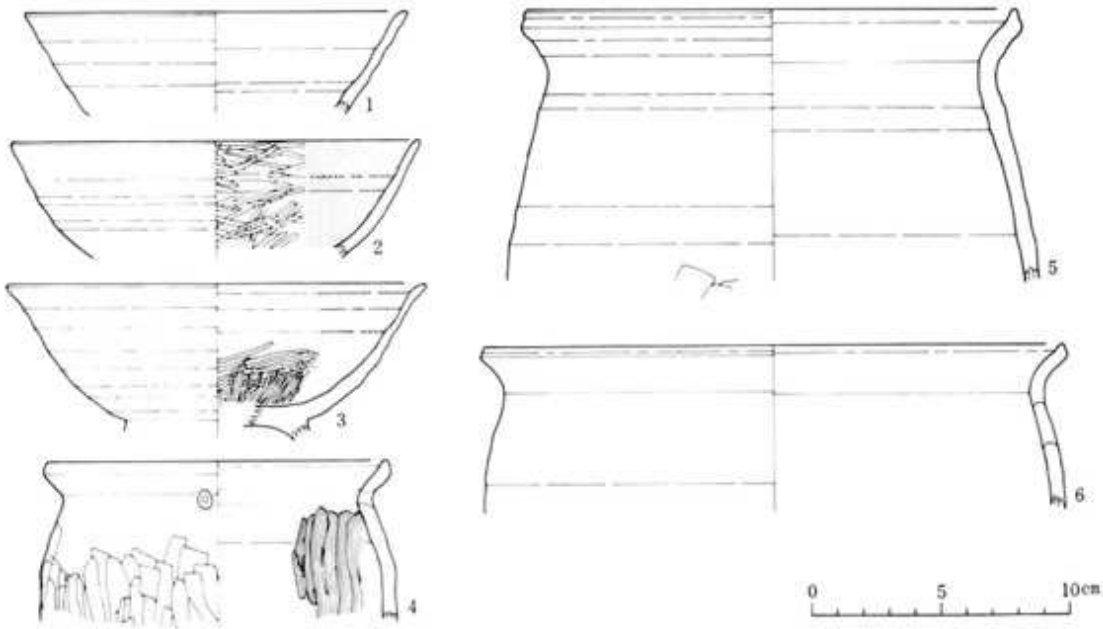
第13図　CE06住居跡平断面図

高台付坏　14図３の１点のみ出土した。底部・高台部が欠損している。坏部は下半に丸味を持って外傾し、口縁部が外傾するものである。内面は下半部のみ細かなヘラミガキを受けている。内黒。胎土は細かく良好、鈍い橙色を呈して焼成はやや甘い。

甕（４～６）　甕類にはロクロ不使用・使用が混在しているが、ロクロ使用甕が多い。４～６の甕はいずれもロクロ使用により成形された甕類である。４は小型の甕で、頸部付近に孔が穿たれている。孔の付近より剥離し、他方の破片を欠損しているため明らかでないが、補修孔の可能性が考えられる。体部の外面はヘラケズリされ、内面の一部には縦方向のヘラナデが見られる。５は体部が張り出す形の甕で、体部下半をヘラケズリしている。

須恵器

坏　14図１は須恵器の坏上半部である。灰白色を呈し、口縁下部に重ね焼き痕が見られる。他に底部片では回転糸切り無調整の破片が出土している。



第14図　　ＣＥ06住居跡出土土器実測図

第7表　　CE06住居跡図示土器観察表

実測図番号	写真番号	出土層位	土器区分	器種	口縁部 外面	口縁部 内面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 外面	器高(cm)	口径(cm)	頸部径(cm)	体部径(cm)	底部径(cm)
1		埋土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				14.8			
2		〃	土師器	〃	〃	ヘラミガキ	〃	ヘラミガキ				16.0			
3	6－1	〃	〃	高台付坏	〃	ロクロナデ	〃	〃	ロクロナデ	ヘラミガキ	5.0	16.2			7.0
4		〃	〃	甕	〃	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ				13.0	1.2	13.8	
5		〃	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ				18.8	17.3		
6		〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ	〃				22.2	21.0		

第8表　　CE06住居跡出土土器破片数

出土層位	土器区分	器種	残存部位	ロクロ	外面	内面	底面	備考	破片数(個体)
埋土	土師器	坏	口縁部	使用	ロクロナデ	ヘラミガキ		内黒	2
〃	〃	〃	体部下半～底部	〃	〃	〃	回転糸切り無調整	〃	1
〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ 下端 手持ちヘラケズリ	〃	〃	〃	1
〃	須恵器	〃	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃		1
〃	赤焼き	〃	口縁部	〃	〃	〃			1
〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃			2
〃	土師器	甕	口縁部	不使用	横ナデ	横ナデ			2
〃	〃	〃	体部	〃	ヘラケズリ	ヘラナデ			3
〃	〃	〃	〃	〃	〃	不明			5
〃	〃	〃	〃	使用	ロクロナデ	ヘラミガキ		内黒	1
〃	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロナデ			1
〃	須恵器	壺	〃	〃	ヘラケズリ	ヘラ状工具によるロクロナデ			1
〃	〃	〃	〃	〃	平行叩き→ヘラケズリ	ヘラナデ			1

(2)　ピット（第15図）

住居跡以外に今回の調査区域に4個のピットが検出された。3個はピットの底面に小穴をもつピットである。以下順を追って記述する。

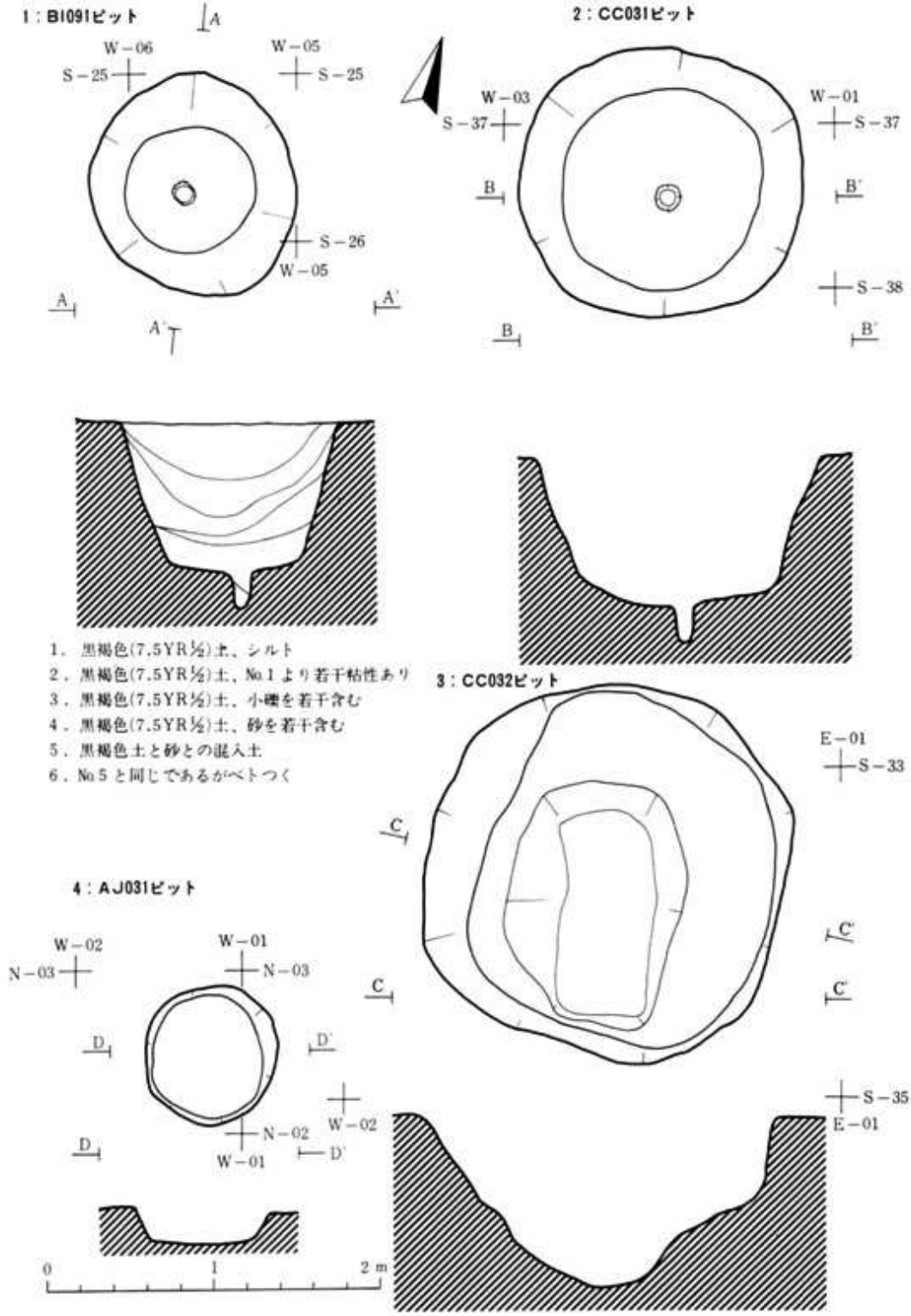
BI091ピット

BJ06住居跡の北側約3mの位置に検出された。口径約1.3m、底径約0.8m、検出面からの深さは約0.9mを測り、底面に径約10cm、深さ20cm程の小穴をもつ。埋土は6層に区別され、自然堆積の様相を示す。遺物の出土は皆無。

CC031ピット

CC03住居跡の北西隅に近接して検出された。口径約1.6×1.7m、底径約1.2m、検出面からの深さは約0.9mを測り、底面に径約15cm、深さ20cm程の小穴をもつ。埋土は自然堆積で、遺物としては石匙1点の出土をみている。

〔出土遺物〕（第16図）　いわゆる横刃形の石匙で、石材は頁岩使用。上部には表裏両面からの剥離によるツマミが作り出されている。表面は中央部に第一剥離面を残し、周囲は細かな二次加



第15図　ピット類平断面図

工を施している。裏面は一次剥離面を大きく残し、二次加工は主として末端の一辺に行われている。刃部は末端にあり、スクレーパー的機能が考えられる。

CC032ピット

CC03住居跡と重複して検出されたピットで、CC03住居跡より古い。口径2.2m内外、検出面からの深さは約1mを測るが、壁の崩壊がひどく明確な規模は不明である。本来は前述の2個のピットと同様底面に小穴をもったピットと推察される。出土遺物は皆無。

AJ031ピット

AI09住居跡の北東隅より東約2.0m程の地点に検出された。口径約0.8m、底径約0.7m、検出面からの深さは約20cmを測る。底面には小穴は認められない。遺物はなし。

(3) グリッド出土遺物

縄文時代（第16図）

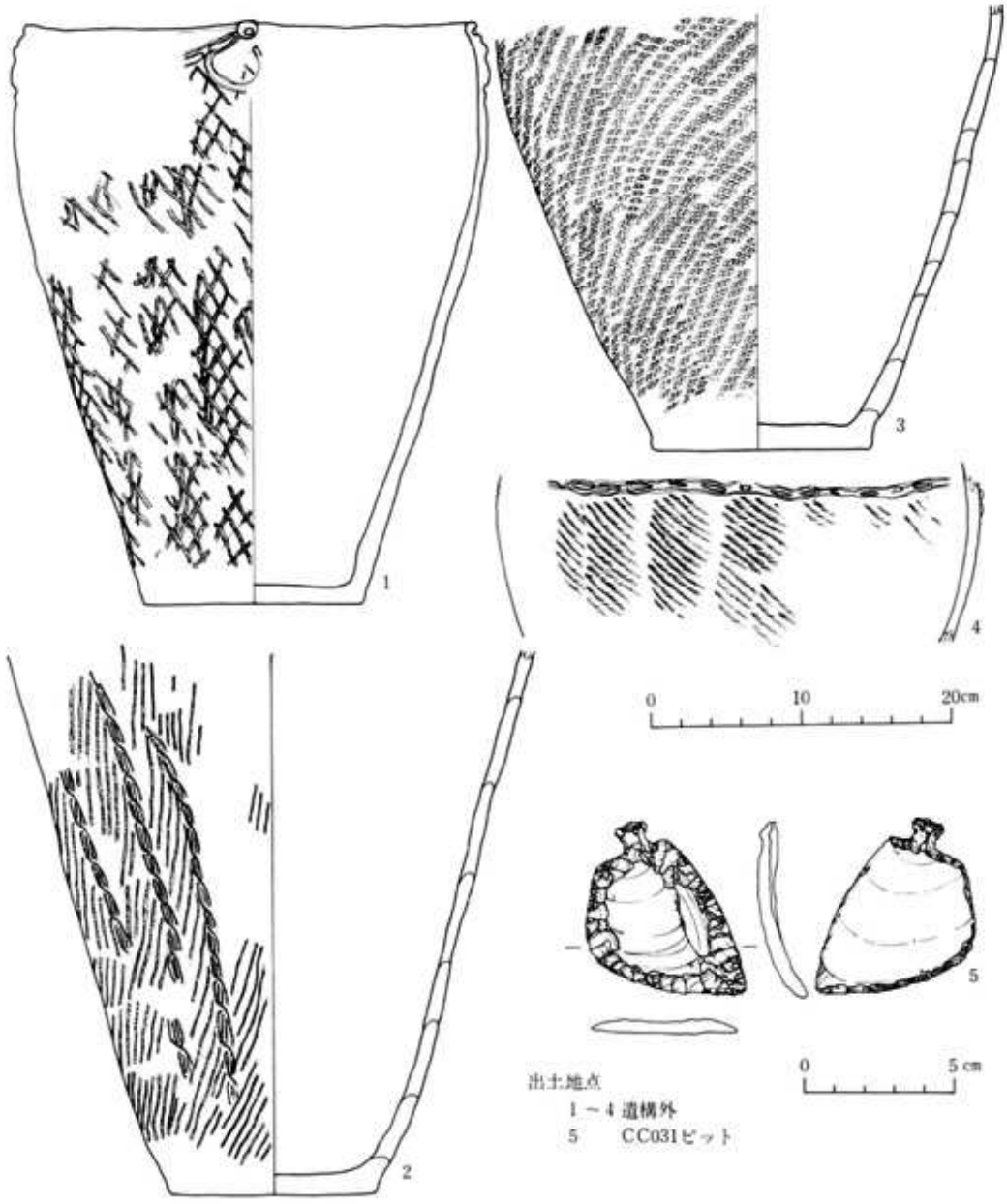
第16図1～4はBC12住居跡の西側BD12グリッド第Ⅱ層から出土した土器類である。出土地点が調査区域外の拡張部分の端部ということもあり、これらの土器類を伴う遺構等は検出されなかった。

16図1は器高39cmを超える大形の深鉢である。体部立ち上がりより外傾して立ち、口縁部は内弯する。口縁に円形文の貼り付けがあり、その下方には沈線文が描かれている。口縁下方には円形文を連絡して連鎖状隆線が横方向に展開する。体部はr無節の網目状撚糸縦回転である。暗赤色を呈し、加熱を受け器面が脆くなっている。2はやはり同様の深鉢体部～底部で、体部外面にはやはりr無節の撚糸が縦回転している。原体の右端部は結節されている。明赤褐色～明灰褐色を呈し、二次加熱を受けている。3は深鉢の体部下半で、体部外面にはRLRの複節あるいは複々節の縄文が縦回転されている。4は体部上半の部分的破片からの推定で、全貌は不明であるが、口縁部は内弯するものと思われる。 頸部には円形の刺突文を施し、それを中心に横方向の連鎖状隆線がめぐる。刺突文は6単位で行われたものと思われる。体部外面にはLの無節縄文が縦回転されていると思われるが器面の板状剥離が甚しく明瞭ではない。

平安時代（第17図）

第17図の土器類は、各グリッドの表土中より出土したものである。このうち平安時代に含まれると思われる図化可能の土器を図示した。

1：約½の残存部からの推定実測であるが、把手の付いた皿状の形態である。把手は片手の可能性が強い。体部は丸味を持って立ち、頸部で屈曲して外方に強く引き出され、さらに上方へ引き出された形となっているが、口唇部は欠損している。全面をフラットにロクロナデした後、



第16図　　出土遺物実測図

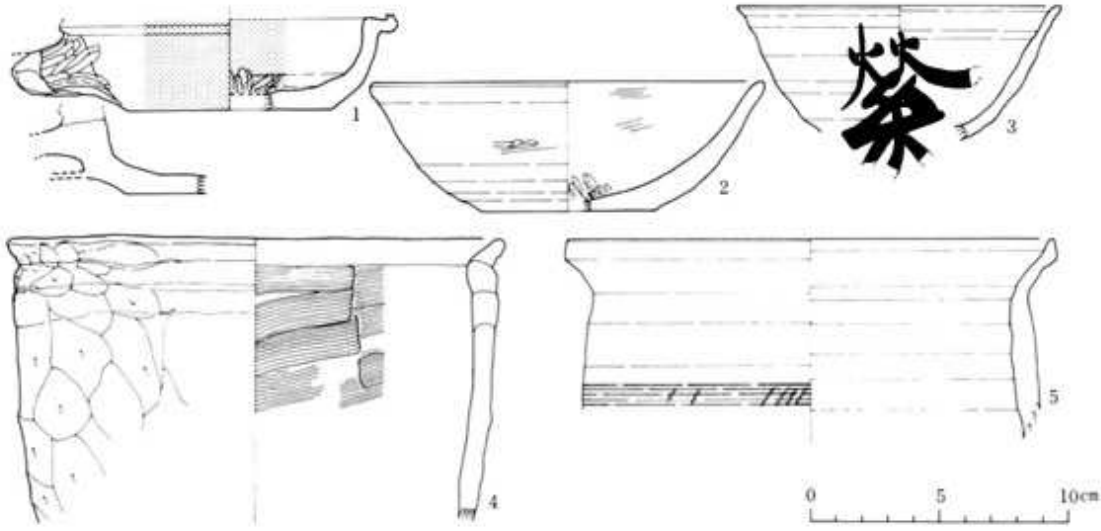
ヘラミガキしている。底部外面は回転ヘラケズリ調整。内外面とも黒色処理されている。胎土は細かく良好である。

2：厚手に作られた坏である。底部回転糸切り無調整のもので、内面は粗くヘラミガキされ、体部外面にも一部ミガキ痕が見られる。内面は黒色処理の可能性もあるが不明瞭であった。胎土は荒く、焼成ともに不良である。

3：内外面ともに再調整、黒色処理を受けない赤焼き土器の坏である。体部外面に墨書を有す。文字は「綦」と判読でき、「綫(タン)」に当ると思われる。「綫」の意味について、大修館書店刊行諸橋轍次著「大漢和辞典」によれば、一、二、三、衣の彩色が鮮やかなこと、四、もえぎ。青黄色。邦だん。種々の色絲で組んだ平組の緒。鎧のをどしの絲・平緒、馬のおしかけなどにいふ。となっている。

4：ロクロ不使用の甕である。巻き上げの痕跡が露骨に残り、頸部付近には指頭による押え痕が並ぶ。体部外面は荒く面取りするようにケズられ、内面はヘラナデされている。色調は鈍い橙色、胎土に石英などの小石を多量に含んでいて粗い。焼成は普通。

5：ロクロにより成形された甕で、体部外面には叩きの痕が見られ、そののち刷毛状工具によるロクロナデがされている。



第17図　　遺構外出土遺物実測図

第9表　　遺構外出土土器観察表

実測図番号	写真番号	出土層位	土器区分	器種	口縁部 外面	口縁部 内面	体部 外面	体部 内面	底部 外面	底部 内面	器高(cm)	口径(cm)	頸部径(cm)	体部径(cm)	底部径(cm)
1		表土	土師器	把手付皿	ロクロナデ→ヘラミガキ	ロクロナデ→ヘラミガキ	ロクロナデ→ヘラミガキ	ロクロナデ→ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラミガキ					8.0
2		*	赤焼き?	坏	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転糸切り無調整	ヘラミガキ	5.0	15.0			6.6
3	6－2右	*	赤焼き	*	ロクロナデ	*	ロクロナデ	ロクロナデ				12.4			
4		*	土師器	甕			ヘラケズリ	ヘラナデ				19.0	18.4	18.4	
5		*	*	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ、叩き→刷毛目状ロクロナデ	ロクロナデ				18.8	16.8		

4．考　　察

今回の調査で発見された遺構は住居跡５棟と４個のピットである。遺物としては縄文時代・平安時代の土器と石器１点が出土した。以下遺構と遺物について若干の考察を付する。

遺構について

＜住居跡＞　５棟の住居跡の検出をみたが遺存状態の比較的よいのはBC12住居跡とBJ06住居跡の２棟である。なおAI09住居跡とBC12住居跡は調査区域外に延びていたため地権者の了解のもとに全掘した。

AI09住居跡：東壁のカマド付近を残しては殆と床面まで削平や攪乱がおよんでいて全貌を明らかにすることはできなかった。

BC12住居跡：他の住居跡とはその構造を異にしている。この住居跡では周溝が壁に沿っており、柱穴は周溝内と床面に検出されている。そのうち周溝は南壁の一部を残して住居跡の四面を全周している。また周溝内の柱穴は各コーナーとその間に配置されている。

周溝の性格については従来、水が床面に流れ込むのを防ぐための排水溝説、水溜説、或は壁体としての施設の根元をおさえこむためのものとする説等があるが、近年では竪穴住居跡の壁に沿って立てられた板材が炭化材等として検出される例が増加している。

そのような例として本遺跡の周辺では、東北縦貫自動車道の関連遺跡として調査された上平沢新田遺跡がある[注1]。この遺跡は本遺跡より西約４kmの地点にあり、AG30住居跡とAH15住居跡が壁板使用と考えられ、AG30住居跡からは炭化板材が検出されている。その構造や配置はBC12住居跡の周溝部の構造とよく似ている。

このことから考えると、本住居跡では壁板の痕跡が検出されなかったが、周溝の性格としては壁板埋設用の溝である可能性が強い。また南辺のほぼ中央部は木根によって攪乱されてはいるが、溝の一部が切れている事からこの部分を一応入口と想定した。

柱穴は周溝内と床面に検出されているが、床面のP_3、P_5、P_6、P_9が主柱穴と考えられ、うち西側の２本は長方形の角材を埋設した痕跡が認められる。さらに住居跡の床面は堅い部分と柔かい部分に区別され、北西隅の柱穴P_9を中心にして北辺と西にかけては柔かくなっている。このことについては前述の上平沢新田遺跡のAG30住居跡では周辺に炭化した板敷の検出をみている。

カマドについては東辺の中央やや南寄りに焼土が検出されたが、煙道等の痕跡は認められなかった。東辺は削平されているものの煙道を伴ったかたちでのカマドは存在しなかったものと考えられる。

以上BC12住居跡の構造上の特徴を要約すると、本住居跡は南側に入口のある板壁使用の竪穴住居跡である可能性が強い。カマドは煙道を伴わず、床は土間の部分と床張りの部分の区別があったものと思われる。いずれBC12住居跡は板壁をともなう浅い竪穴住居跡の構造を知る上では一資料となり得るものであろう。

BJ06住居跡：火災によって廃絶した住居跡である。今回検出された住居跡の中では掘り込みが深く約40cmを測る。カマドの構築方法にもその特徴がみられる。袖の芯には石を使用し、天井にも石を横位に乗せた堅牢な造りをしている。煙道はトンネル式のくりぬきである。

床面に検出された炭化部材や集石の状況からは住居の構築関係についての資料を提供する住居跡である。炭化部材の材質鑑定の結果によれば部材はクリ・ナラ・ケヤキ等を主体としている。

CC03住居跡：CC032ピットが埋没した後に構築されたものである。しかし焼土・遺物等は皆無であり、住居として使用されたかどうかの疑問は残る。

CE06住居跡：今回の調査では一番南に検出された住居跡であり、西側は後世の穴で破壊されており、全貌を明らかにすることはできなかった。遺構の上面も削平され、北東コーナーと壁の一部それに焼土が残存していただけであった。焼土は接近して２個所検出されたが、南側の焼土はこの住居跡に付随したカマド燃焼部の焼面と考えたい。しかし煙道・煙出し部等の痕跡は検出できなかった。

＜ピット＞　４個のピットを検出した。そのうちBI091ピットとCC031ピットは底面に小穴をもつ。CC032ピットはCC03住居跡と重複関係にあり、住居跡よりは古いピットである。CC032ピットは壁面の崩壊が著しくまた底面も原形がかなり変容している。しかし基本的には底面に小穴をもつピットである事は推定できる。以上のことから３個のピットはいずれも底面に小穴をもつピットで、基本的には形状・規模ともほぼ同じであると考えられる。

AJ031ピットは壁はやや垂直に立ち上がり、深さも約20cmと浅く前述の３個のピットとは形態を異にするピットである。

遺物について

＜縄文時代＞　第16図に図示した遺物は明確に遺構に伴ったものではないが、CC03ピット等の様なピットも検出されており、付近に縄文時代の集落が存在する可能性は濃い。土器は深鉢のみ発見されているが、いずれも加熱を受けて変色化、或はカーボン付着などの使用痕跡が認められるものである。このことからこれらの土器は煮沸用器として使用されたことが推察できる。16図１、４は口縁部下方に連鎖状隆線が施され、地文には無節・複節の縄文・撚糸・網目状撚糸が使用されている。この施文手法は縄文後期初頭に見られる手法で県内の遺跡では崎山弁天遺跡第Ⅳ群１類、門前貝塚第Ⅱ群２類土器に比定され得る土器群である。

＜平安時代＞　本遺跡で検出された5棟の住居跡のうち、CC03住居跡は埋土・床面とも遺物が皆無、CE06住居跡も床面からの出土は皆無であった。AI06住居跡、BC12住居跡、BJ06住居跡ともロクロ使用土師器と未使用土師器・須恵器とが共伴している。各住居跡に伴うと思われる土器類の組成は以下の通りである(住居跡埋土出土のものは除外した。数字は比率を示す)。

(AI06住居跡)　土師器―坏(底部不明)、甕(ロクロ不使用５：使用４)、須恵器―小形甕、高台付壺　赤焼き土器―坏

(BC12住居跡)　土師器―坏(底部、底周部回転ヘラケズリ)、甕(ロクロ不使用２：使用１)須恵器―坏(底部回転ヘラ切り)、埦

(BJ06住居跡)　土師器―坏(底部回転糸切り無調整、同体部下端回転ヘラケズリ)、甕(ロクロ不使用７：使用４)、須恵器―坏(底部回転糸切り無調整)、壺　赤焼き土器―坏

土器組成によれば、この時期はロクロ技術が土師器製作に取り入れられていながらも、甕類(特に大形の甕類)の製作についてはなお従前からの手法に頼っていたことが窺える。おおまかに捉えるならば３棟共に、土師器製作がロクロ不使用から使用へと移行する過渡期に包括されるであろう。土師器製作にロクロが使用された時期がいつ頃であるかは今だに明確な裏づけとなる資料はないが、時間の経過の中で徐々に浸透していったものと思われ、まず坏類に、そして小形の甕類に、その後に大形の甕類にと導入されていったものではないだろうか。BC12住居跡ではロクロ使用･不使用の甕類に伴って底部回転ヘラ切りの須恵器坏が出土している。この場合土師器の坏では底部や底周部に回転ヘラケズリ調整を受けたものが伴っており、土師器の甕は２：１の割合で不使用の甕が多い。不使用の甕には頸部に僅かな段を持つものが出土している。またピット内からはロクロ不使用の土師器坏片も出土した。ヘラ切り無調整の須恵器坏は胆沢城や志波城（太田方八丁遺跡）の創建期の遺構からも出土しており、年代幅を考慮しても、この住居跡の年代を９世紀代のあまり遅くない時期に求めることができよう。しかしこの須恵器の坏が在地生産されたものであるのか、他からの搬入品であるのかは周辺に窯跡が調査されておらず、断言できない問題である（紫波町からは２ケ所の窯跡が発見されているが、焼成された遺物は明らかでない[注2]）。いずれBC12住居跡のみならず本遺跡出土の土器は土師器が須恵器を大幅に上回っている。

AI09住居跡、BJ06住居跡は、底部回転糸切り無調整の須恵器が出土している。どのぐらいの年代幅を持ってヘラ切りから糸切り無調整の坏への斉一化がなされたかは明瞭でないが、可能性としてBC12住居跡がAI09、BJ06住居跡に先行するという点を想定した。住居跡の方向、かまどの位置などにもこの２つの住居跡は共通点が見られるものである。

しかしながら、住居跡の絶対年代については、なお明言できる裏付けはなく，３棟ともに今

だにロクロ土師器が完全には定着していない時代、恐らくは9世紀代の中葉から後半の時代幅を考慮した。

5．まとめ

① 今回の調査で発見された遺構は住居跡5棟とピット3個であり、住居跡は平安時代の初めに属すると思われる。ピットについては時期決定資料を欠いているが、今回の調査で縄文土器の発見もみており、この種のピットは縄文期の集落に伴って発見される例が増加していることから一応縄文時代のものと想定した。

② 出土遺物は土師器、須恵器それに赤焼き土器が主体を占め、他に少量の縄文土器が出土した。

③ 本遺蹟は複合遺跡であり、東北本線により東西に二分されていると考えられる。

④ 今回の調査区域は遺跡東辺部の一部であり、遺跡の範囲は西側に延びる。西側には縄文時代・平字時代の遺構の存在が充分考えられる。

注1．昭和50年度に調査した。AG30住居跡は完掘せず、炭化した建物部材をバインダー17で固定し、保存のため埋め戻した。またAH15住居跡では炭化材は検出されなかったが、周溝が検出され、そのコーナーに柱穴が検出された。

注2．紫波町「紫波町史」第一巻(昭47)。

二日町字栗木田の通称杉ノ上に所在し、東北新幹線関連遺跡として調査した杉ノ上Ⅱ遺跡（本報告書収録）の東縁傾斜面に立地している。他は南日詰字箱清水（薬師神社西側）にある。

引用・参考文献

北上市教育委員会（昭45）「北上市稲瀬町上台遺跡」(第1次)

青森県教育委員会（昭53）「青森市三内遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告第37集

秋田県教育委員会（昭43）「胡桃館埋没建物発掘調査概報」秋田県文化財調査報告書第14集

同上　（昭45）「胡桃館埋没建物遺跡第3次発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書等22集

岩手県教育委員会（昭53）「西田遺跡」(第3次調査) 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略表

同上　「上平沢新田遺跡」東北縦貫自動車道関係遺跡現地説明会資料

財岩手県埋蔵文化財センター（昭52）「都南村湯沢遺跡」岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第2集

及川　洵他（昭49）「門前貝塚発掘調査概要」陸前高田市教育委員会

草間俊一他（昭49）「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会

北上市教育委員会（昭52）「尻引遺跡調査報告」

岩手県教育委員会（昭52）「太田方八丁遺跡現地説明会資料」
水沢市教育委員会（昭49～52）「胆沢城跡発掘調査概報」
伊　藤　博　幸（昭54）「胆沢城・志波城創建段階の土器様相―九世紀前半代の須恵器と土師器」第５回古代城柵官衛遺跡検討会資料
高　橋　信　雄（昭52）「岩手県のロクロ使用土師器について」考古風土記第２号

杉ノ上Ⅲ遺跡

遺跡記号：SU Ⅲ
所在地：紫波郡紫波町二日町字北七久保11－1他
調査期間：昭和48年10月16日～12月28日
調査対象面積：3402㎡
平面測量基準点：東京起点478.213km（EA50）
基準高：海抜116.70m

1．遺跡の位置と環境（第Ⅱ図・P12、第Ⅲ図・P14）

杉ノ上Ⅲ遺跡は、紫波町二日町字北七久保地内にあり、東北本線古舘駅より南方1.7kmの本線沿い東側に位置する。本遺跡附近には、高位段丘（西根段丘）面に相当する石鳥谷段丘が残片的に分布し、更にその周辺に中位段丘（二枚橋段丘）がみられる。本遺跡は南北400m、東西2kmの高位段丘とその北側に広がる中位段丘の接する地点の中位段丘面上南縁にある。

遺跡は標高120mの地点を頂点として北緩斜面(写真図版1－2)、南緩斜面(写真図版2－1)を作っている。このうち、南西からの旧河道で開析された南緩斜面に多くの遺構が存在した。遺跡の現状は果樹園、草地として利用されている。本遺跡は新幹線ルート内の杉ノ上Ⅰ・Ⅱ遺跡と地形的には同段丘面上にあり、南北約1kmに接近した遺跡群のうち最南に位置する。

遺跡周辺の歴史的環境をみると、この付近には原始からの遺跡が見られ、特に古代の遺跡が数多く発見され、また、古代城柵の擬定地としても古来より考証されてもきた。この杉の上Ⅲ遺跡附近は、過去に土師器、須恵器の出土や、窯跡の発見などが[注1]相つぎ、地元の人たち、郷土史家の人たちなどによって発表されてはきたが、正式な報告書はほとんどないのが実状である。通称杉ノ上遺跡については、大正13年に地元の人によって発見され、その後、菅野義之助氏が実地調査をし[注2]発表されている。それによると、焼土、木炭と共に多数の土師器、須恵器片が出土し、更に立地からみて登り窯の存在を推定している。

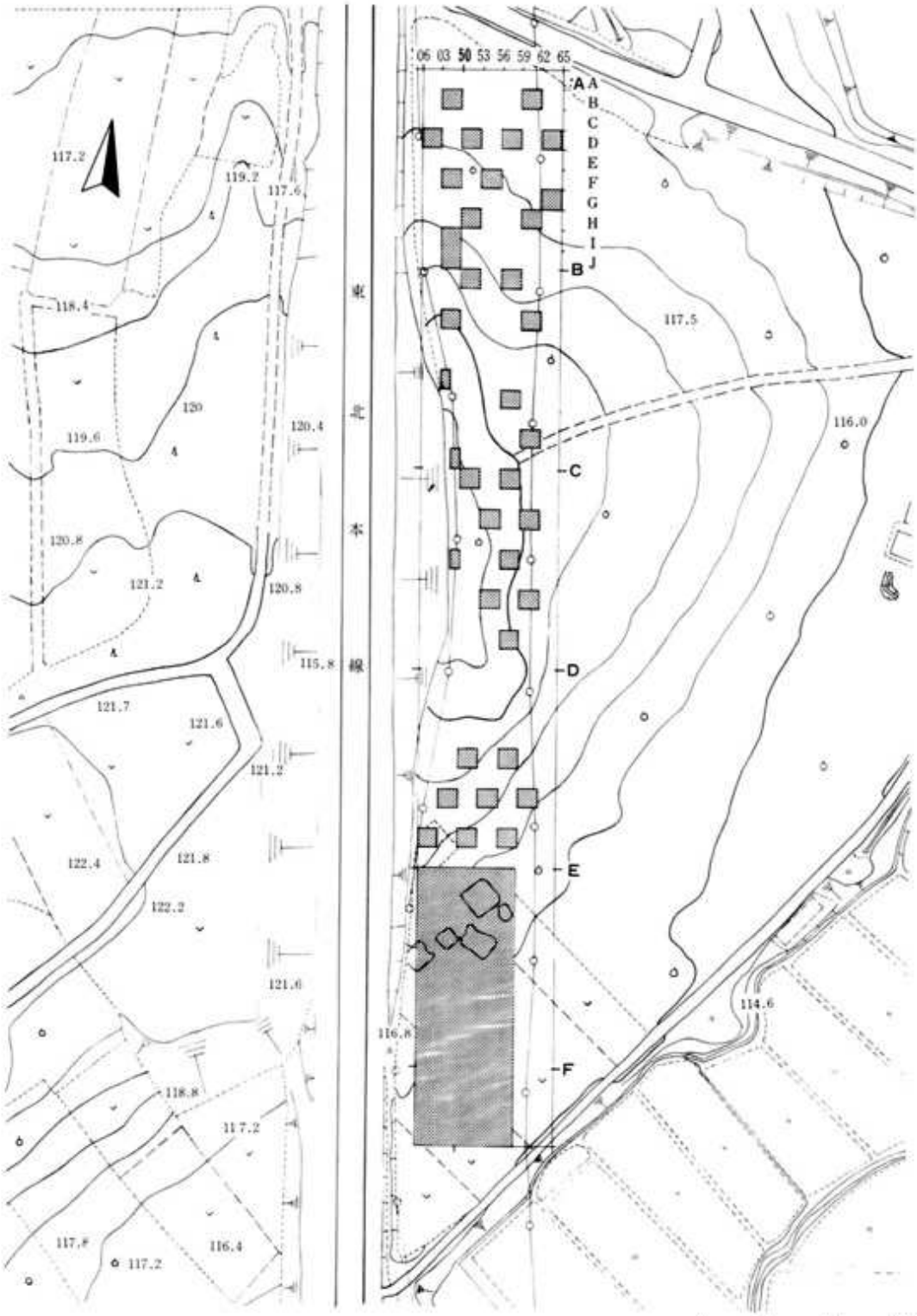
その後、杉ノ上遺跡については正式な調査がなされず、たまたま地元の人が耕作中に遺物の発見をしたりする程度であった。

この他、平安時代の遺跡はこの杉ノ上遺跡の周辺には多く存在する(第Ⅲ表)。また、平安時代以降の遺跡としては、いわゆる平泉藤原氏の分族である比爪氏の居舘跡として調査がなされたところもある。

2．調査の方法と経過

前述のように本遺跡は通称杉ノ上遺跡として過去に遺物の出土がみられ、また、報告もなされているが、過去の調査は、このうち杉ノ上Ⅱ遺跡附近を指すものと思われ、本杉ノ上Ⅲ遺跡は、昭和47年の東北新幹線建設地内の遺跡分布調査の際に須恵器等の破片が発見され、杉ノ上遺跡を北地点よりⅠ・Ⅱ・Ⅲとして登録されたものの一遺跡である。

調査は、路線敷内の遺跡全体を対象に3m×3mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去


06 03 50 53 56 59 62 65
A B C D E F G H I J
東北本線
117.2
119.2
117.6
118.4
120
119.6
120.4
120.8
121.2
120.8
115.8
121.7
121.6
121.2
122.4
121.8
122.2
121.0
118.8
117.2
117.8
117.2
116.4
117.5
116.0
114.6
116.8
0 10 20 30m

第1図　グリッド配置図

し、遺構の検出につとめた。中心軸、基準点、基準高は別記のとおりである。

発掘調査は10月16日から開始されたが、遺構精査、実測、写真撮影などが例年より早く訪れた降雪期と重なり、調査は困難をきわめた。特に竪穴住居跡の保存のため、ビニルハウスを建てたり、テントを建てたりして降雪を避けながら調査を進めた（写真図版７）ため、住居跡全景の写真などに満足のいくものがなく心残りであった。また、除雪などをしながらの調査であったので、一日の調査時間が限られたことなど、悪条件の中での調査であった。

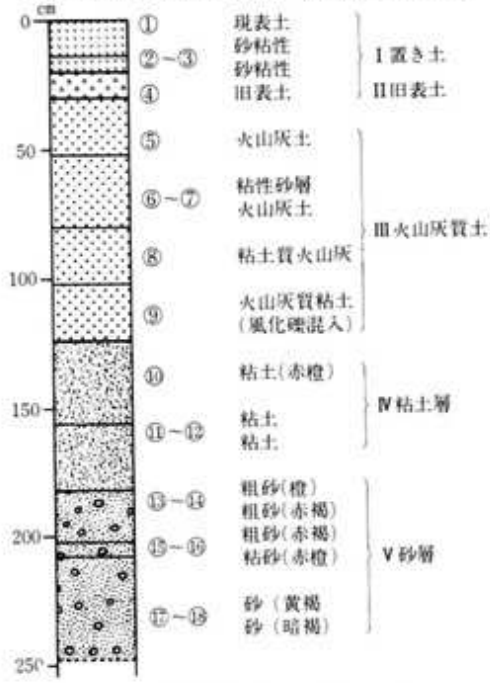
なお、調査開始前にＥブロック東北本線沿いに業者によるケーブル設置のための溝掘りが行なわれ、その際、溝中より第17図の須恵器壺片多数が出土し、すでにとり上げられた後であったため、精査はできなかった。

３．調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は北緩斜面、南緩斜面で観察した。

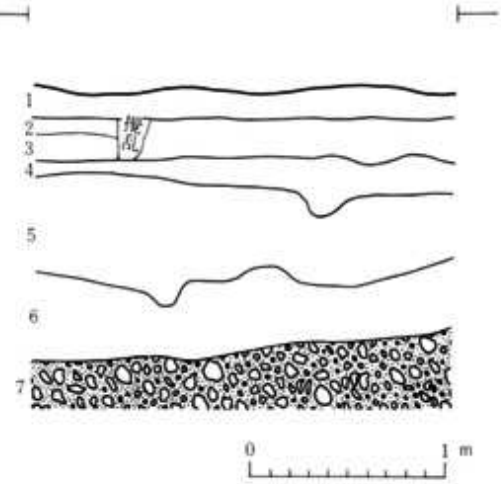
第２図に杉ノ上Ⅲ遺跡北緩斜面（AIJ03東壁面）での模式断面図を示す。層序について略記すると、①現表土・②砂粘性土(風化礫を混じる)・③砂粘性土(風化礫を多く混じる)で①～③は果樹、草地として利用するために置き土したものであろう。④旧表土・⑤粘性のある火山灰土層で橙色（7.5YR⅝）を示す。⑥植生痕と風化小礫を少し含む粘性砂層でパミス(Pumice)も少し含む。明黄褐色（10YR⅞）・⑦粘性のない火山灰土（色調⑥と同じ）・⑧小風化礫を混じる粘土質火山灰・橙色（7.5YR⅞）・⑨風化礫を多く混じる火山灰質粘土・橙色(2.5YR⅝)⑩赤褐色（10YR⅝）の粘土層で根生痕を僅かに含む。⑪・⑫土質・色調は⑩と似るが若干砂質がかる。⑬うすい縁がかった橙色の粗砂で粘性はない。⑭粘質のある粗砂層(うすい小豆色)⑮粗砂で粘性がなく色調は⑭と同じ・⑯赤橙色の粗砂層で⑬～⑮よりあらい。⑰粒子が細かい黄褐色砂層・⑱暗褐色砂層で組成は⑰と同じも



第２図　遺跡模式断面図（AIJ03）

のである。本杉ノ上Ⅲ遺跡の表層地質は第4紀における火山砕屑物の堆積ということができる。

つぎに本遺跡南緩斜面下・Eブロックにおける基本土層（第3図）について述べる。第Ⅰ層は黒褐色の耕作土で10～15cmの厚さをもつ。第Ⅱ層は黒～黒褐色（7.5YR2/1～10YR3/2）のクロボク質土で上層に木炭粒を混入する。第Ⅲ層は明黄褐色（10YR6/6～6/8）の粘土質シルトで腐植質の小礫などを混入する。第Ⅳ層は赤褐色（5YR4/6）の砂質土で植生痕を多量に混じる。この層には上層のシルト質土やパミスがわずかに入りこんでいる。第Ⅴ層は明赤褐色（5YR5/8）の粘土層で腐植礫を混じる層で、部分的にマンガンの集積が認められる。第Ⅵ層は風化礫層である。



層No.	層位	土色	土性	その他
1	第Ⅰ層	黒褐色（5YR3/1）	耕作土	毛根あり。2よりやや粗く、3よりごく軟質
2	Ⅱ	黒色（7.5YR2/1）	クロボク質土	しっとりと固くしまり、木炭粒を混入。
3	Ⅱ	黒褐色（10YR3/2）	クロボク質土	しまりがあり全体的にしっとりしている。
4	Ⅲ	明黄褐色（10YR6/6～6/8）	粘土質シルト	腐植質の小礫混入。
5	Ⅳ	赤褐色（5YR4/6）	砂質土	植生痕多量に混る。
6	Ⅴ	明赤褐色（5YR5/8）	粘土	腐植礫が混り、部分的にマンガンの集積
7	Ⅵ		風化礫層	

第3図　遺跡基本土層図（EJ 56～59 北側）

以上のことから遺跡の立地する段丘は基盤第Ⅲ系玉里層および日詰礫層を不整合におおう二枚橋礫層を構成層としている。この二枚橋礫層は5～6mの厚さをもつ礫層で、その上位に砂および粘土よりなり、火山灰質薄層におおわれる。その後、火山性の腐植層（黒～暗褐色土の黒ボク土壌）の堆積がみられ、現表土を構成している。したがって南緩斜面はその傾斜が強いほどシルト質土の流失が見られ、黒色土の堆積も厚くなっていることがわかる。

〔2〕 発見された遺構と遺物

調査の結果、竪穴住居跡５棟、焼土遺構１、土壙１、石器、土器などが発見された。

(1) 住居跡

ＥＢ50住居跡(第４図、写真図版３－１)

〔遺構の確認面〕 南緩斜面のやや北寄りＥＢ50・ＥＣ50グリッドに黒褐色クロボク質土の落ち込みを発見した。遺構確認面は暗褐色腐植土層下の明黄褐色の砂質土層である。

〔保存状況〕 地形全体が傾斜面であり、特に東南面から強い傾斜をなしているため、住居跡東南壁が流失し、その範囲を確認することはできなかった。また、北東面の壁も若干の壁高を残しているに過ぎない。

〔重複、増改築〕 認められない。

〔平面形、長軸方向〕 東南側が消失しているため、正確な平面形はわからない。しかし、南西側壁、北東壁端から推定すると、ほぼ正方形ではないかと考えられる。大きさは長軸4.7m、短軸4.2mで床面積は17.2m²(推定)である。

〔堆積土〕 住居内に堆積している層は基本的には３層に分けられる。

１層は黒褐色のクロボク質土で、こよりができるほど、シットリした感じである。住居東壁になるほど、１層は薄くなる。

２層は暗褐色の腐植土であり、１層と似る。

３層はクロボク質土で１層と似る。床面東側を除き全体的に火山灰（粉状パミス）が混在しており、１層よりザラつきがある。火山灰は厚い部分で約10cmもあり、住居の中央部よりやや北西寄りに分布し、この３層の中間より上層にかけて堆積している。住居跡南辺附近には分布しない。

４～７層までは住居、およびピットの埋土である。４層は土質の全体観は１・２層に似るが火山灰は混入しない。５層は焼土、灰を若干含み、土器片２も入る。やや強くしまった土質である。６層は極暗褐色土で粘性がある土質である。若干の微細、小礫を含む。７層は地山の土がブロックで少量混在している。土質は固くしまり、指圧痕が若干つく程度である。

〔壁〕 北西壁の残存状態が一番よく、約30cmの壁高を有する。南西壁も約20～25cmの壁高を残している。北東、南東壁はほとんど壁高が見られず、わずかに北、南壁端での残存部分で住居全体の形状を推定できるだけである。

〔床面〕 保存のよい北西側は、多少の凹凸はあるが、平坦でしっかりしている。しかし、あまり固くはない。貼り床などは認められなかった。床面から壁への立ちあがりはゆるやかである。住居中央よりやや西寄りに若干の焼土が認められた。また、住居東隅に焼土の広がりがあり、精査したが、住居東側がかなり流失していることから、原形を出すことはできなかった。

しかし、焼土の位置、広がりなどからカマド跡と考えられる。

〔柱穴〕 住居跡とその周辺のピットは合計9個ある。このうちP_4・P_5はカマドに付属するものであり、P_8は灰溜め状ピットである。P_6は堆積土上から確認されたもので、住居廃絶後のピットと考えられる。P_1、P_2、P_7、P_9は柱痕と掘り方が識別できなかったが、配置関係から柱穴と推定される。P_3は主柱穴であったと考えられる。しかし、床面上からは他のピットは検出されなかった。

〔周溝〕 認められない。

〔カマド〕 東南辺の東寄りにとりつけられている。煙道部、煙出し部、袖部などは削平のため残存していない。わずかに燃焼部としての焼土が90×90cmのほぼ円形の範囲に認められ、この焼土下部にやや固い焼面が認められた。焼面は位置関係から考えて本住居跡のカマド燃焼部底面の可能性が強い。

〔貯蔵穴〕 認められない。

〔その他の施設〕 東南辺のほぼ中央部に長径80cm、短径60cm、深さ約20cmのほぼなべ底状のピットが検出された。このピットには、灰、焼土、土器片などが入っており、灰溜めピットと推定される。

〔年代決定資料〕 床面からの遺物は多いが、完形のものや個体ごとにまとまって出土しているものはない。しかし、全般に床面直上のものであり、住居使用時のものか住居廃絶後に廃棄されたものかは簡単に断定はできないが、たとえ廃棄されたものであっても、住居廃絶の時点からさしてへだたるものとは考えられない。

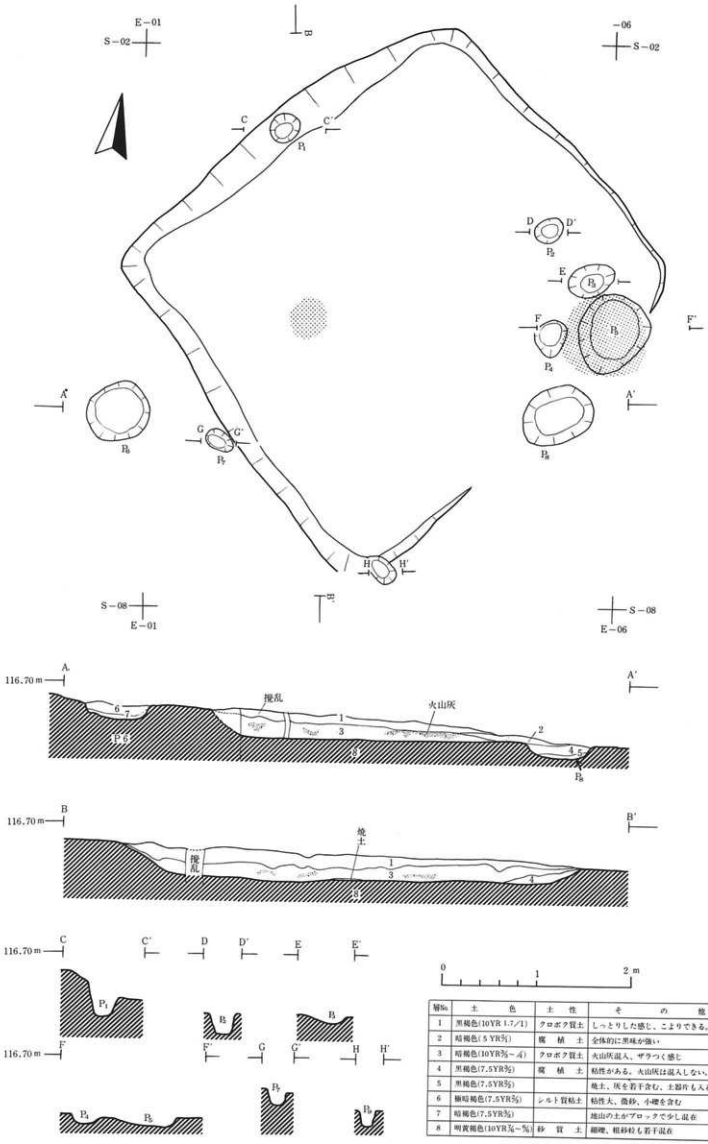
〔出土遺物〕 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の土師器で、坏、甕がある。須恵器もあるが、甕底部片のみである。住居に伴わない遺物としては、フレーク、石皿片などがあるが、ここでは、住居に伴うと思われるものに限って記述したい。

土師器

坏（第5図1～5、写真図版10－4） いずれも平底のものである。1は底、体、口縁の各部が残存する。底径は推定7.4cmであり他の坏に比し大きい。底部切離しは磨滅があるが、手持ちヘラケズリの可能性が強い。底部からやや内弯しながら口縁部に至る。胎土はシルト質土で浅黄橙色を呈し軟質である。底部に黒斑が認められる。なお、住居跡ピット5から墨書「て」（判読不能、墨書範囲1.7×1.0cm）を認める土師器坏体部片が出土した。（写真図版9－5）

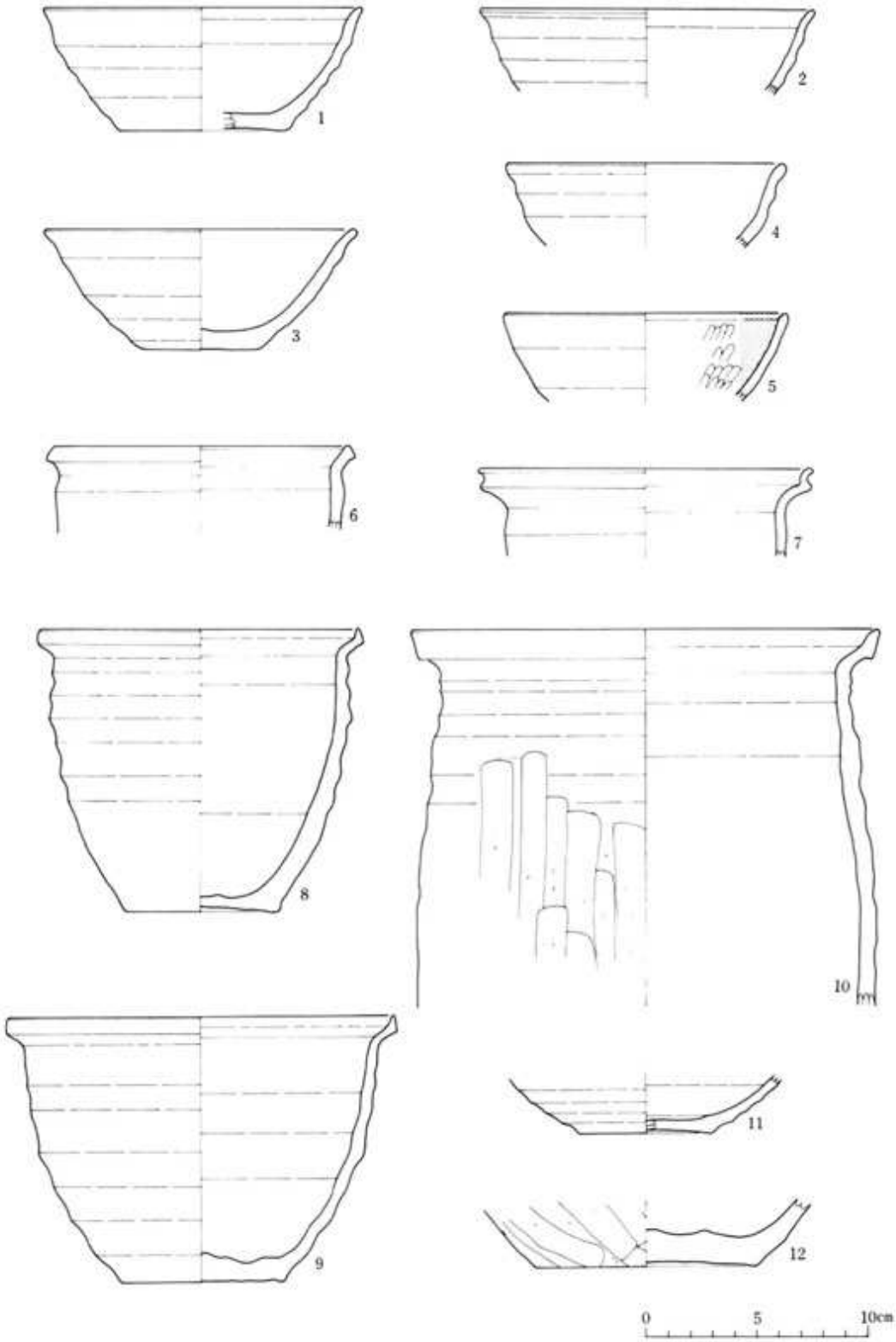
2、4は口縁部片で全体の器形は不明であるが、1とほぼ同器形になると思われる。2は口縁部内面に炭化物の付着が認められる。

3は1、2に比べ器壁が厚く、胎土も砂粒が含まれざらつく。底部外縁、体部下半にナデがみられ、底部外縁に丸味をもたせている。体中央部は丸味をもちながら立上がり口縁部に至る



層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色(10YR 1.7/1)	クロボク質土	しっとりした感じ、こまりできる。
2	暗褐色(5 YR⅝)	腐植土	全体的に黒味が強い
3	暗褐色(10YR⅝～4/)	クロボク質土	火山灰混入、ザラつく感じ
4	黒褐色(7.5YR⅝)	腐植土	粘性がある。火山灰は混入しない。
5	黒褐色(7.5YR⅝)		焼土、灰を若干含む、土器片も入る。
6	極暗褐色(7.5YR⅝)	シルト質粘土	粘性大、微砂、小礫を含む
7	暗褐色(7.5YR⅝)		地山の土がブロックで少し混在
8	明黄褐色(10YR⅞～⅝)	砂質土	細礫、粗砂粒も若干混在

第4図　　ＥＢ50住居跡　平・断面図



第5図　　EB50住居跡出土遺物

器形である。底部切離しは回転糸切りである。

5は内黒片である。内面を斜方向ヘラミガキを施している。推定口径12.6cmである。

甕（第5図6～10、写真図版3－2、8－1・3・5・6）　いずれもロクロを使用したものである。6～9は小形のものである。口径と器高がほぼ同じか(8)、いくぶん口径が大きい器形(9)と思われるが、体下部が欠損している(6、7)ため、十分明らかでない。10は口径より器高が大きい器形である。6、8、9は口縁部が外反ないし外傾し、特に8、9の口唇部は、三角形状に上に挽き出される。7は頸部から短い口縁部が外反し、口唇部を更に内弯させながら外に挽き出し、沈線をめぐらしている。底部切離しは8、9で観察できるが、いずれも回転糸切りである。10は最大径が口縁部にあり、器高が体部径より大きいものである。口縁部、体部だけの残存片であるため、底部径、器高は不明であるが、体部がほぼ円筒形を呈する長胴形の器形である。頸部で強く外反して短い口縁部がつくり出されている。端部上端は、わずかに上方にのびている。器面調整は、口縁部内外面および、体部内面と外面上部にロクロ調整し、外面体中・下部にタテ方向（↓）の軽いヘラケズリが認められる。

須恵器

坏（第5図11）　底・体部下半の残存（⅓）の破片である。回転糸切り技法によるもので、再調整はない。体部はやや広がりをもってほぼ直線的に外傾し口縁部に至るものと思われる。器面調整は認められない。色調は灰白色を呈する。

甕（第5図12）　底部片である。底径約10cmと推定できるが、全形については不明であるが大形の甕と思われる。体外面下部全周に強い手持ちヘラケズリが施されている。また底部外面は、ヘラナデ様のものが若干あり、内面には指頭による押しつけ痕がある。

石器　本住居跡から縄文時代の石器（フレーク）2点、石皿片1点が出土した。

EC56住居跡（第6図、写真図版4－1）

〔遺構の確認面〕　EB50住居跡の東に位置し、Eブロック南面緩斜地の北東寄り、東への傾斜にもなっている。遺構の落ち込みは耕作土下に暗褐色および黒褐色土の状態で確認できた。遺構確認面はにぶい赤褐色の火山灰質土層である。

〔保存状況〕　西から下がる傾斜面のため、検出面にかなりの削平があり、住居跡の壁高が確認できない部分もあった。特に東側においてはその削平が著しく、床面近くまで及んでおり、壁の残存がほとんど見られず明瞭な確認ができなかった。

〔重複、増改築〕　認められない。

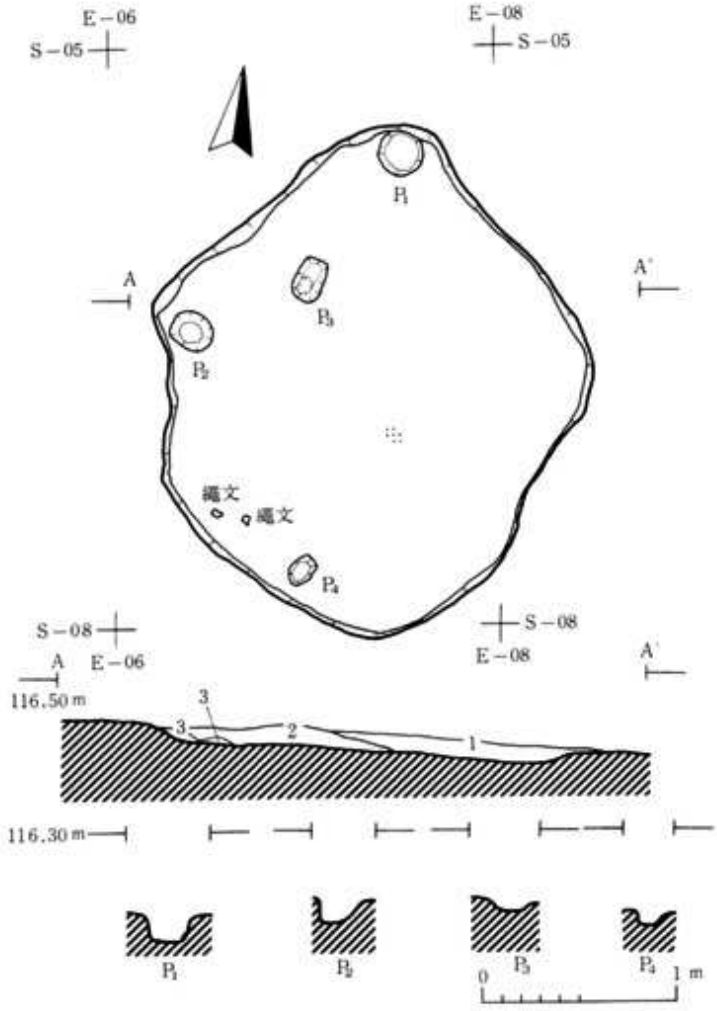
〔平面形、規模〕　長軸約2.6m、短軸2.1mのやや円形に近い不定形である。

〔堆積土〕　3層に大別される。1層は住居跡東半分を覆っている暗褐色腐植土層に該当する。

2層は黒褐色土で住居跡西半分を覆っている。火山灰は混入しない。3層は2層と似た土層であるが、粒状の土壌が一部指頭に残り、壁ぎわに認められる。

〔壁〕 残存する壁高は、壁西側で約10cmであるが、他は5cm弱であり、ほとんど削平され残存状態は悪い。

〔床面〕 にぶい赤褐色の火山灰質土のボソボソした地山を掘り込んで床面としている。風化した小礫、細礫を多量に混じる土層である。床面はほぼ平坦である。



層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	暗褐色(10YR3/3)	腐　植　土	軟質、毛細根僅かに入る
2	黒褐色(10YR5/2)	シルト質土	可塑性の強い土質
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質土	粒状の土壌が一部指頭にのこる

第6図　EC56住居跡　平・断面図

〔柱穴〕 住居内に4個のピットがあるが、柱穴かどうかは不明である。ピット1、2、3の埋土は暗褐色土で粘性がある。微砂が若干含まれ、指頭にザラつく程度である。焼土、遺物は混入していない。ピット4の埋土には、焼土、炭片が若干混入している。ピットの深さ、埋土の状況から疑問はあるが、配列、住居跡の削平などの観点から柱穴とも考えられるが、明確には性格づけをすることはできない。

〔周溝〕 認められない。

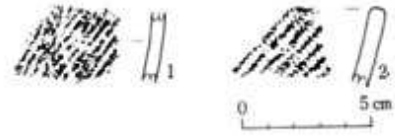
〔カマド・炉〕 住居中央部の床面に10×10cmの焼土が認められた。しかし、焼土はうすい色合いで、やや黒色土の上に浮いた形であることから、炉跡とは即断できない。カマド跡も検出

されなかった。

〔貯蔵穴〕 認められない。

〔その他の施設〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居跡西南壁付近床面上から縄文土器2片が出土した。しかし、これが、住居に伴う遺物かどうかは不明である。



第7図 EC56住居跡出土遺物（⅓）

〔出土遺物〕 前記の縄文土器2片だけである。

縄文土器（第7図1・2） 1は、体部の小破片であり、器形については不明である。地文は撚糸文を施しており、器外面に炭化物の付着がみられる。2は鉢型土器口縁部小破片であり、全体の形状については不明である。地文は右上り単節斜縄文L$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$である。

ED50住居跡（第8図、写真図版4－2）

〔遺構の確認面〕 南緩斜面の中央よりやや北寄り、西からの傾斜をもつED50グリッド周辺で表土除去後、黒褐色のクロボク質土の落ち込みを検出した。遺構確認面は明黄褐色の砂質土層である。

〔保存状況〕 住居跡が緩傾斜面にあるため他の住居跡同様検出面にかなりの削平があり、住居跡の壁残存高が少ない。

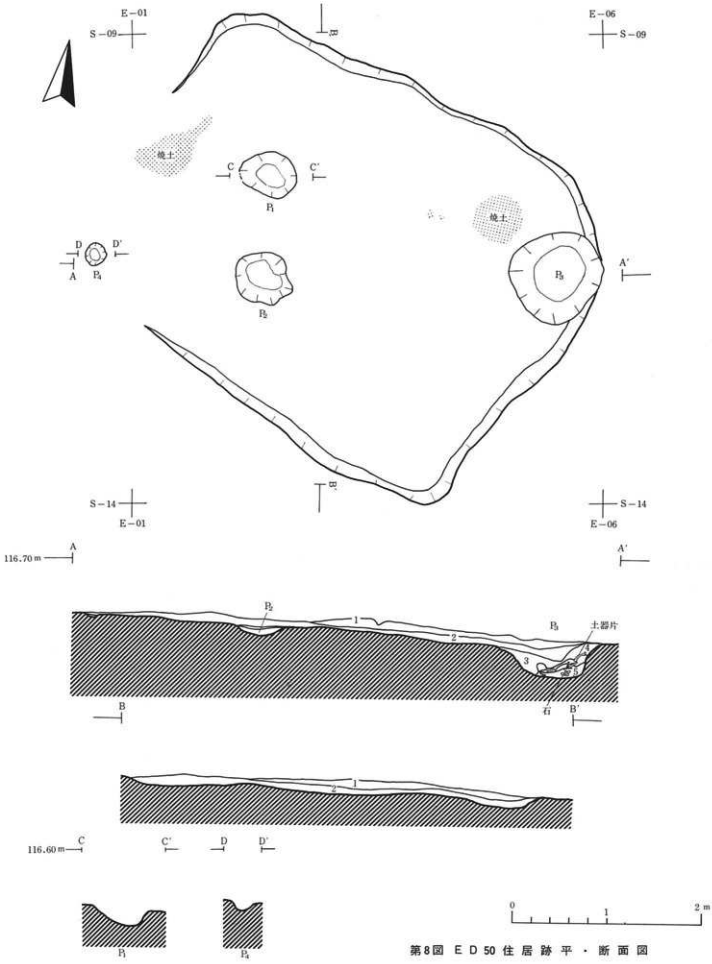
〔重複、増改築〕 ED03住居跡と重複する。ED50住居跡西壁を切ってED03住居跡のカマドが作られていることから本遺跡の方が古い。増改築は認められない。図面作成はしなかった。

〔平面形、規模〕 住居跡全体が削平されているため明確な壁として把えられなかったところもあるが、東西に長軸をもつ長方形である。大きさは長軸約5.0m、短軸約4.0mで、床面積は20.0m²（推定）である。

〔堆積土〕 住居内に堆積している層は基本的には3層である。

1層は黒褐色クロボク質土で若干の土器片を混入している。2層は暗褐色の腐植土であり、EB50住居跡埋土の2層に該当する。3層は暗褐色のクロボク質土で1層と似る。固さやしまりは1層に類似し、火山灰も混入する。4～6は住居内ピットの埋土である。ピット4の埋土4は暗褐色のボソボソした軟質土である。5は暗赤褐色で粘性のある焼土、黄褐色の粘土が小ブロック状に混入し、炭化片、灰なども含まれる。土器片が多量に混在する。6は黒褐色土で若干の細粒砂が含まれザラつく。灰が少し混入する。

〔壁〕 地山を壁としている。残存壁高は5～10cmである。西壁は削平著しくその範囲が判然としない。しかし、西壁端と考えられる位置にピットが認められることから、あるいは柱穴と考えれば壁の位置は推定できる。周溝は認められない。



第8図 ＥＤ50住居跡平・断面図

層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色(10YR 1.7/1)	クロボク質土	指圧で軟くつぶれ、こよりもある程度できる
2	暗褐色(10YR 3/3～3/4)	腐植土	全体に小礫、パミスが混在する
3	暗褐色(7.5YR 3/3)	クロボク質土	ボソボソの感じの可塑性のあまりない土壌、軟質土
4	暗赤褐色(5YR 3/3)	焼土、灰などの混土	べとつく、多少ザラつく感じ。
5	暗赤褐色(5YR 3/3)	4とほぼ同じ粘土ブロック入る	コブシ大の石が数個入る。

〔床面〕 残存している床面は、ほぼ平坦であるが、あまり固い面をなしていない。貼り床は認められない。床面から壁への立ちあがりは、壁高があまり残存しないので判然としない部分がある。

〔柱穴〕 検出された4個のピットのうち、柱穴と考えられるものはP_1だけである。しかし、深さは10cmで浅い。P_2、P_3は耕土からの掘り込みであり、耕作時のものと考えられる。P_4は住居跡に伴う貯蔵穴状のピットである。

〔カマド〕 住居東隅付近に50cm×50cmの円状に焼土の範囲が認められた。周辺には角礫5個、炭片に混じって土器片多数が散在していたことから、煙道、煙出し部などは検出できなかったが、この焼土の位置が主軸を南北とするカマド燃焼部と考えられる。

〔貯蔵穴〕 住居跡東南辺の東隅に楕円形状のP_4が検出された。大きさは90cm×100cm、深さは約30cmである。内部には、暗赤褐色の焼土、黄褐色の粘土などが小ブロック状に混入しており、炭化片、灰などが若干認められる。土器片が重なり合った状態で見られた。なお、このP_4が人為的に埋められたのか、自然に埋ったのかはっきりしない。その他の施設は認められない。

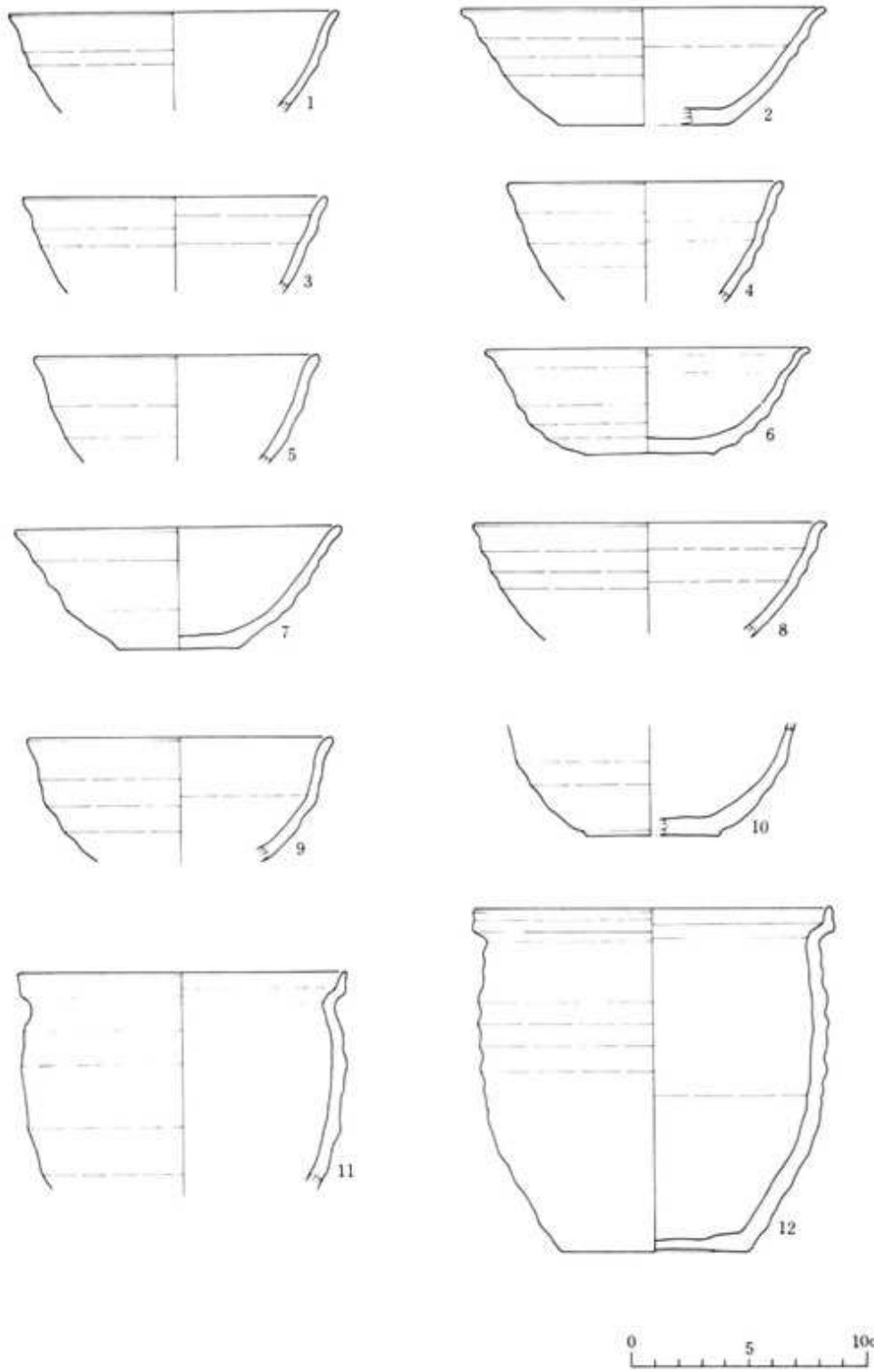
〔年代決定資料〕 遺物が比較的多く出土したのは、焼土周辺、およびピット4の貯蔵穴からのものである。焼土周辺からは第9図No.2・坏片、No.3・坏片、No.12甕(復元)など、ピット4からは第9図No.4・坏片、No.6・坏(復元)、No.7・坏(復元)、No.8・坏片、No.9・坏片、No.11・甕片などの出土をみた(写真図版5－1・2)。これら焼土周辺、およびピット内の出土遺物が、本住居跡の年代を考える上での資料となりうる。

〔出土遺物〕 住居に伴うと考えられる遺物には、前述の床面焼土上の土師器、およびピット3出土の土師器(復元可能3個体分)・坏、甕がある。須恵器の出土はない。

土師器

坏(第9図1～9、写真図版9－7・8) 全てロクロ調整の行われている坏であり、外面にロクロ目が観察される。ロクロからの切り離しは底部痕跡が見られるもの(2、6、7)では全て回転糸切りで、他の外面二次調整は見られない。内面の再調整も見られない。体部は内弯気味に立上り、口唇部で外反するもので、5、9は厚めの口唇部となる。6はかなり薄く成形された口唇部をもち、強く外反する。なお、9は赤焼き土器に分類されるものと思われる。(写真図版9－2)

甕(第9図10～12、写真図版9－3・6) 小形の土師器甕である。いずれもロクロを使用している。12は復元したものであり、10は底部片、11は上半部残存のものである。11、12とも最大径は口縁部にあり口径と器高がほぼ同じか、いくぶん器高が大きい器形と思われるが、体下部が欠損している(11)ので、十分明らかでない。11、12は体部中央でややふくらみ、頸部でゆるやかに外反して短い口縁部がつくり出されている。口縁端部は上に断面三角形状に挽き出される。



第９図　ED50住居跡出土遺物実測図

ED03住居跡(第10図、写真図版6－1)

〔**遺構の確認図**〕 南緩斜面の西、東北本線寄りのやや平坦面で検出された。暗褐色の腐植土および黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構確認面は明褐色の火山灰質土である。

〔**保存状況**〕 南辺の削平が見られ、壁が確認できなかった。全般に南北辺に削平が著しく壁の残存が少ない。また、カマド煙道部の残存状況も悪い。

〔**重複、増改築**〕 ED50住居跡と重複する。ED50住居跡の西壁を切って本住居跡の煙道が設けられていることから、本住居跡の方が新しい。増改築は認められない。

〔**平面形、規模**〕 東西を長軸としたやや長方形状である。大きさは長軸約2.9m、短軸2.5mで床面積は6.24m²(推定)である。

〔**堆積土**〕 住居内に堆積している層は3層である。1層は暗褐色の腐植土であり、若干ザラつく。2層は暗褐色土で1よりもザラつきがある。小礫も若干入る。3は黒褐色土で可塑性の強い土質であり、4はEB50住居跡に見られたような粉状パミス(火山灰)である。風化小礫や細礫を多量に混じる。

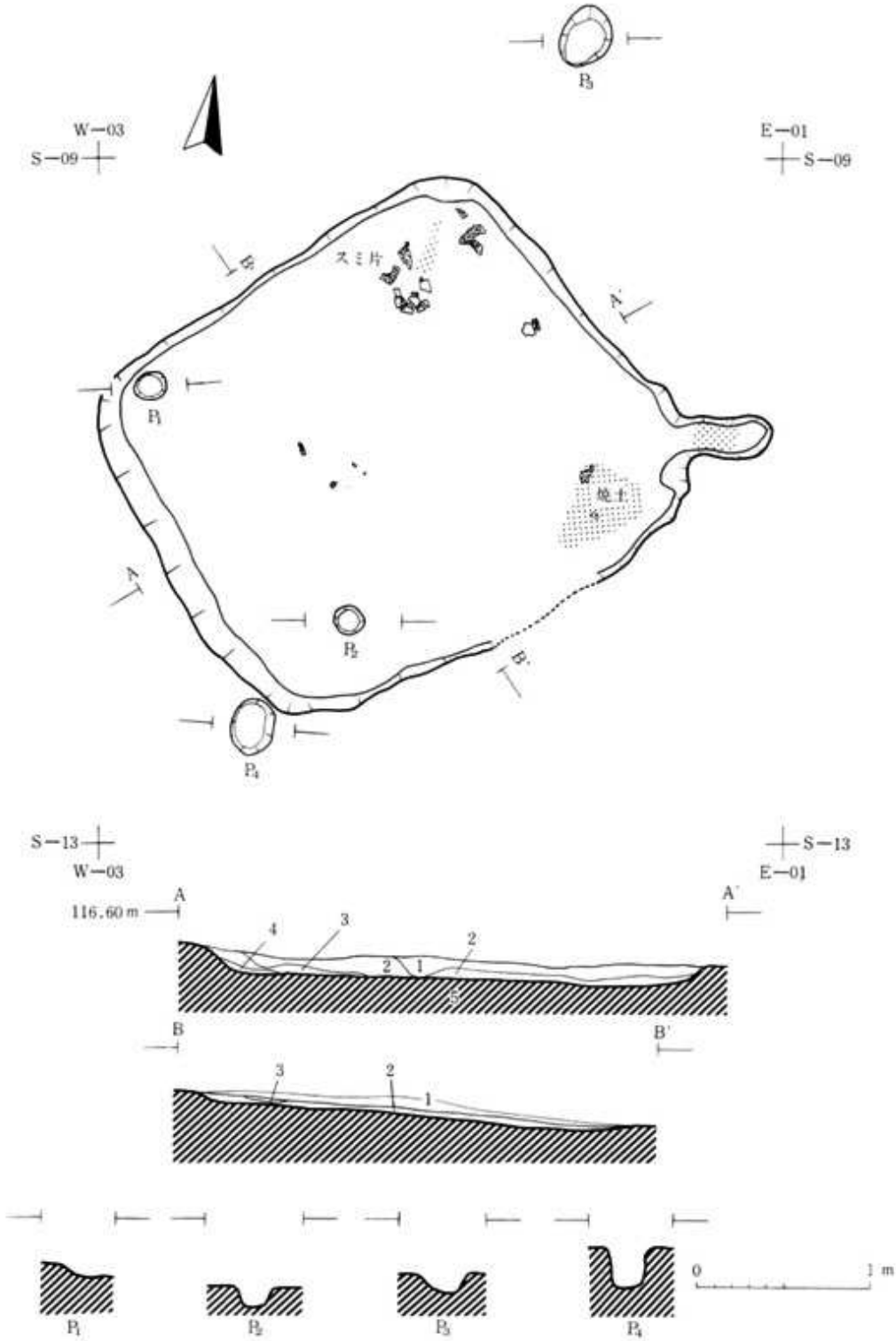
〔**壁**〕 地山を壁としている。南辺壁をやや欠き、北辺も遺存状態が悪い。西辺壁は他の壁に比べ、遺存状態は良い。立ち上がりはゆるやかで、西壁にあっては約15cm前後の残存高である。

〔**床面**〕 小礫が床面上にあるが、地山に含まれる小礫とは異なることから精査したが、埋土中や周辺地山上にも見られることから、意図的なものとは考えられない。全般に平坦であり、固い面をなしている。住居跡北隅、及び東隅床面直上に焼土、炭片が広がっている。

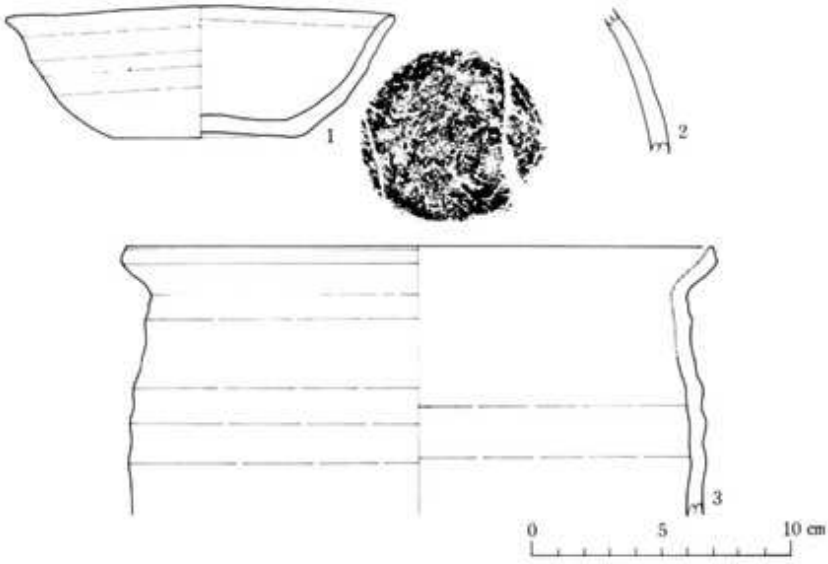
〔**柱穴**〕 住居跡内に2個、住居跡の周辺に2個のピットが検出された。住居跡内のうちP_1は深さがほとんどなく柱穴とは考えられない。P_2は約10cmの深さであるが位置的には柱穴と見られる。P_3、P_4の性格は不明である。

〔**周溝**〕 認められない。

〔**カマド**〕 住居跡東北辺の東隅に設けられている。焼土が60cm×40cmの範囲で住居跡東隅と更に煙道部中央にも見られる。しかし焼土の厚さは1cm程度であまり固い面をなしてはいないが、燃焼部と考えられる。燃焼部は住居跡床面より7cm程くぼんでおり、煙道部へ移行している。燃焼部側壁はみられない。煙道部は削平のため、残存状態は悪い。煙道部床面は凹凸があり、30cm×20cmの範囲で焼土がみられた。煙道部底面は、燃焼部より若干の傾斜をもって高くなる。煙出し部は確認できない。なお本住居跡のカマド煙道部はED50住居跡の西壁を約10cm(推定)は切っていたものと思われる。ただED50住居跡の西壁は削平のためその範囲を確認できないが、煙道残存部の長さがED50住居跡西壁位置より切り込んでいたと思われること、更にED50住居跡とED03住居跡煙道部との近接状態から2住居跡の同時的な存在は考えられない。



第10図　ED03住居跡平・断面図



第11図　ED03住居跡出土遺物実測図（1/3）

〔その他の施設〕　認められない。

〔年代決定資料〕　住居跡中央部床面直上より、土師器坏（ほぼ完形）（第11図・1）、P_2より土師器甕片（第11図・3）が出土している。この2点の土器は住居の年代を推定する上での資料となり得る。

〔出土遺物〕

土師器

坏（第11図・1、写真図版6－1、9－9）　ロクロ調整の行われている坏である。ロクロからの切離しは回転糸切りで、その後の調整は行われていない。底部からやや丸味をもって立ち上がり、口縁部はやや大きく外反する。胎土は石英粒などを含み、ややザラつく。器内・外面全体に炭化物（スス状）のものが付着している。底部外面は磨滅が著しい。

甕（第11図・3、写真図版9－1）　口縁部が「く」の字状に外反し、内外面ともにロクロで調整が行われている。口縁端部は欠損のため不明である。

須恵器

甕（第11図・2、写真図版9－1）　甕体部片である。ロクロ調整が行なわれ、軽いヘラケズリ痕も見られる。

層No.	土　色	土　性	そ　の　他
1	暗褐色(10YR3/3)	腐　植　土	軟質、ややしまりあり
2	暗褐色(7.5YR3/3)		ザラザラした土、粒上の土壌が指頭に残る
3	黒褐色(10YR2/2～3/3)		可塑性の強い土質
4	灰黄色(2.5Y6/2)	降下火山灰	
5	明褐色(7.5YR5/6)	地　山	風化小礫及び細礫多量に混じる火山灰質土

ＥＥ09住居跡（第12図、写真図版６－２）

〔**遺構の確認面**〕 南緩斜面西側の東北本線寄りに黒褐色土の落ち込みを確認した。地山は明褐色土の火山灰質土である。

〔**保存状況**〕 住居跡西側が東北本線側溝盛土のため調査不能であった。また、周辺が傾斜面の地形のため特に住居跡南辺に土砂の流失が見られ、壁の残存は認められなかった。

〔**重複、増改築**〕 認められない。

〔**平面形、規模**〕 平面形はやや南北に長い隅丸方形で、規模は長軸3.6m（推定）短軸3.3mである。

〔**堆積土**〕 住居内に堆積している層は黒褐色土１層だけである。上層は流失したものと思われる。この黒褐色土はＥＤ03住居跡の床面上の土と同じであり、可塑性の強い土質である。

〔**壁**〕 地山を壁としているが、住居跡が東南への緩斜面にあるため壁の削平が見られ、残存高はあまりない。特に南辺壁は削平が著しく、壁の残存が認められなかった。

〔**床面**〕 地山を床としている。北部が南部に比べ約20cmも高く傾斜をなしているが、面はほぼ平坦である。

〔**柱穴**〕 住居内床面で確認できたものが14個、住居外にあるものが２個で合計16個のピットが検出された。この中で柱穴痕と考えられるのが、P_1、P_3、P_4、P_6、P_7、P_9、P_{13}、P_{14}の８個である。これらのピットは内部の土に若干の焼土・木炭が含まれる。ただ、床面全体に削平があるため、柱穴の深さが10～20cmであり若干疑問となる点もある。P_{11}は貯蔵穴状ピットである。

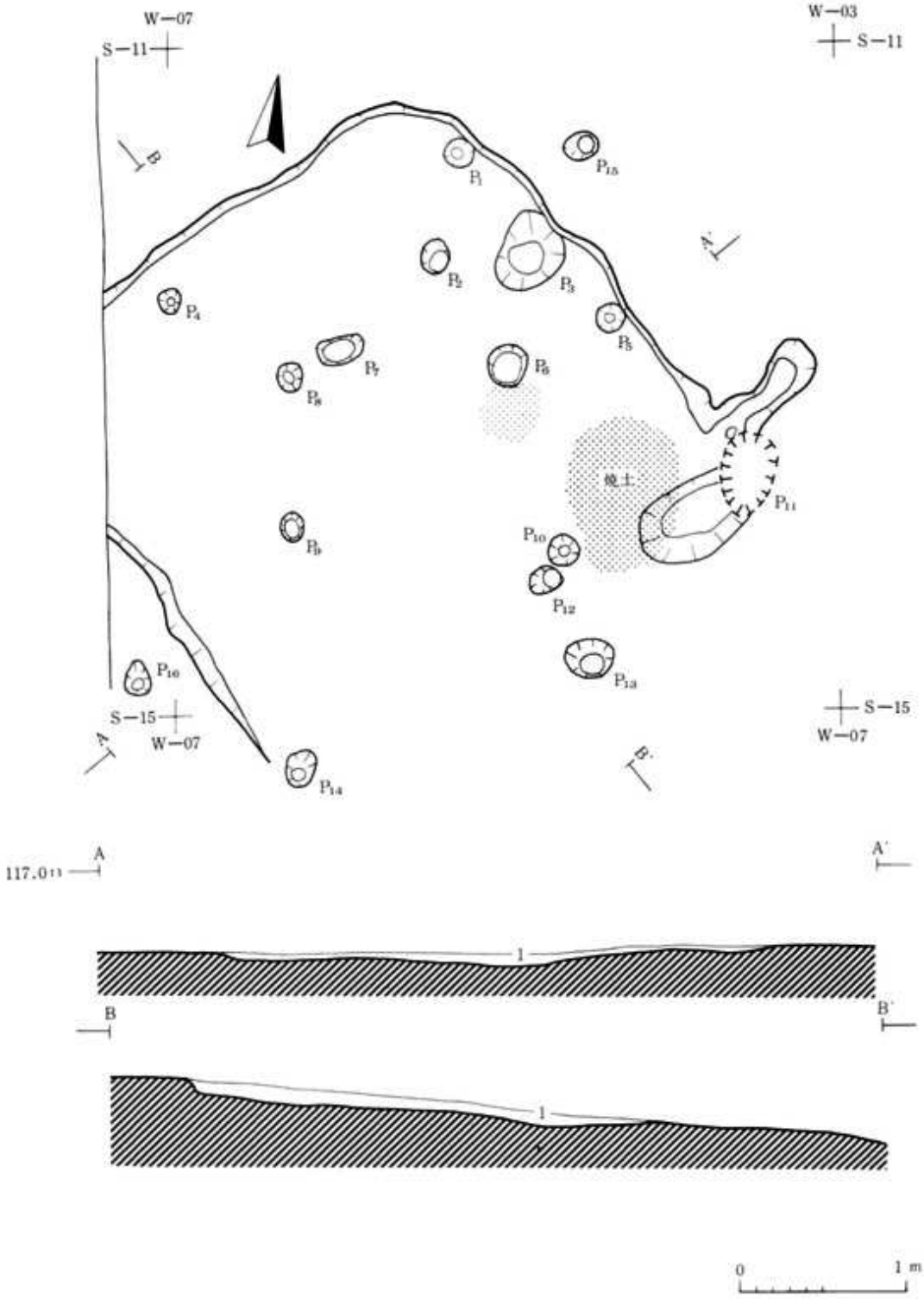
第１表　　ＥＥ09住居跡ピット

Pit	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
深さ（cm）	11.0	13.5	24.5	12.0	17.0	16.0	14.0	11.0	13.0	12.0	23.5	17.0	29.0	12.0	18.0	28.5

〔**周溝**〕 認められない。

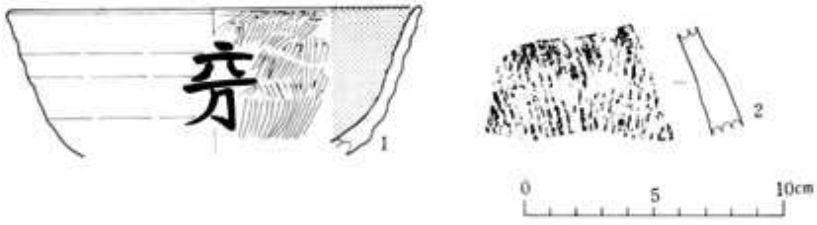
〔**カマド**〕 住居跡東隅に設けられている。カマドは壁を掘り込んでつくられている。焼土が70cm×80cmの範囲に広がっており、燃焼部はこの焼土範囲で約15cmの浅い落ち込みになっている。燃焼部底面は暗赤褐色に焼けており、若干固い面をなしている。煙道部底面、側面には焼土面が認められなかったが、埋土中に小ブロック状で混入していた。煙道は燃焼部底面から約10cm程の傾斜をもちながら上がり、煙出し部へ接続する。煙道部は約60cmである。煙出し部底面は特に低いピット状では検出されなかった。

〔**貯蔵穴**〕 カマド南側に楕円形をしたP_{11}がある。大きさは60cm×40cmであるが、ピット東側が表土からの耕作時における削平のためか破損を受けている。ピット底面には焼土、灰が見られるので、貯蔵穴というよりは灰溜め状のピットとも見られる。



層No.	土 色	土 性	そ の 他
1*	黒 褐 色	シルト質土	可塑性の強い土質

第12図　EE09住居跡平・断面図



第13図　　ＥＥ09住居跡出土遺物（1/3）

〔その他の施設〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居跡埋土１層（土層観察のベルト中）より土師器１片（内黒、墨書）と須恵器１片が出土した。床面直上ではないが、ほぼ床面上であることから住居跡に伴う遺物と考えられる。

〔出土遺物〕

土師器

坏（第13図１、写真図版９－４）　　ロクロ調整の行なわれている坏体部片であるが、底部欠損のため、切離しについては不明である。内面黒色処理が行われており、ヘラミガキ痕が密である。体部外面に墨書文字が観察できる。「夯」と記入されているが、読み方については不明である。推定口径は16cmである。

須恵器

甕（第13図２）　甕体部片である。平行叩き目文がある。

(2) 焼土遺構

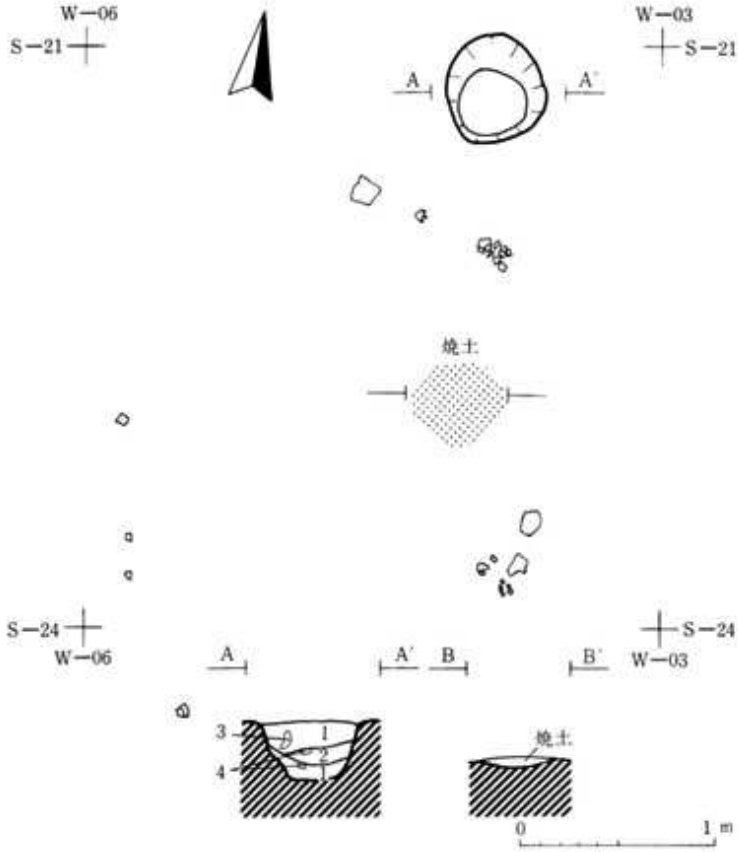
EH06焼土遺構（第14図　）　EH06グリッドのやや南寄りにおいて東西40cm、南北45cmのほぼ円形の大きさで焼土の範囲が確認された。確認面は地山面である。埋土は硬い焼土のブロック、および少量の炭が混じっていた。特に中央部は強く焼け硬い面をなしている。底面および側面はいずれも黄褐色の地山面であり、なべ底状のくぼみをし、深さは約10cmである。埋土中からの遺物の出土はなかった。焼土の周辺を精査した結果、南１ｍから土師器、および須恵器片が発見された。

EH06土壙（第14図、写真図版なし）　EE06グリッドの北側、EH06焼土遺構の北２ｍ地点において確認された。平面形は上面、底面とも不整楕円形である。規模は底面において長軸40cm、短軸35cmである。底面はなべ底状でやや凹むが、ほぼ平坦で、また壁も直線的に開くため断面は逆台形である。 堆積土は自然堆積状態を示している。 遺物は堆積土中からは出土し

第2表　　石　器　計　測　表

写真図版番号	実測図No	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	遺物記入番号
図版10-2	15図-1	48.5	22.0	7.5	4.6	細粒石質凝灰岩	EB50住No.32
〃	〃 -2	47.0	38.0	8.5	12.2	硬質頁岩	EB50住No.34
〃	〃 -3	45.0	24.5	7.0	8.1	珪質頁岩の風化脱色物	EJ 56 No.92
〃	〃 -4	51.0	30.0	12.0	15.6	〃	EI 03 No.17
〃	〃 -5	33.0	19.0	10.0	3.8	硬質頁岩	FB 06 No.79
〃	〃 -6	41.5	32.5	7.5	8.8	〃	EH 03 No. 9
〃	〃 -7	35.4	20.5	5.0	2.1	〃	EI 06 No.34
〃	〃 -8	53.0	35.0	11.0	19.0	〃	ED 53 No. 2
〃	〃 -9	72.0	54.0	12.5	45.1	〃	ED 53 No. 3

ない。



層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色(7.5YR⅔)	シルト質土	粘性ある
2	褐色土(7.5YR⅔)	粘土質シルト	硬く、粘性強い
3	黒褐色土のベースに褐色土が	シルト質土	粘性あり、やや硬い

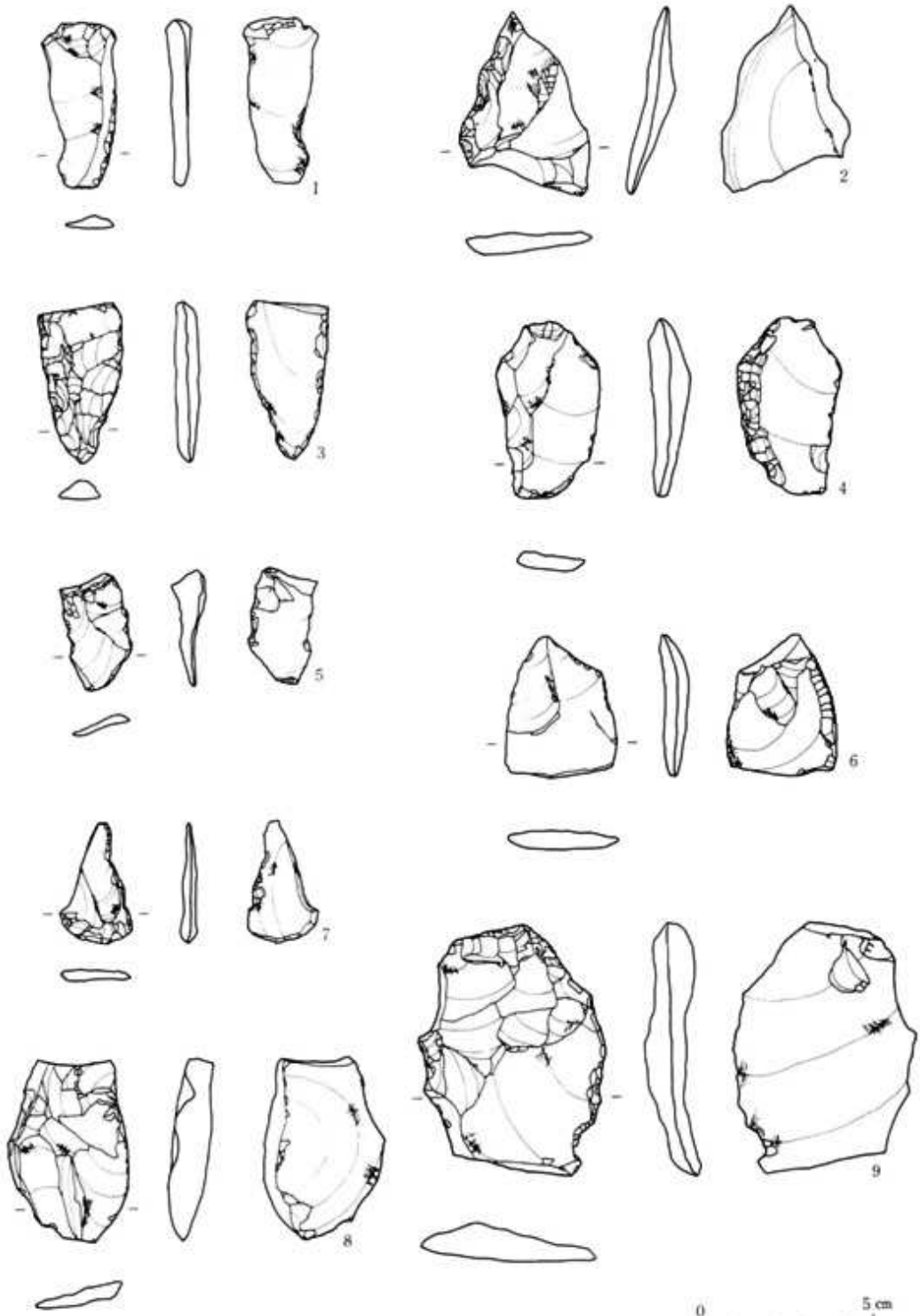
第14図　　EH06遺構　平・断面図

(3) グリッド出土遺物

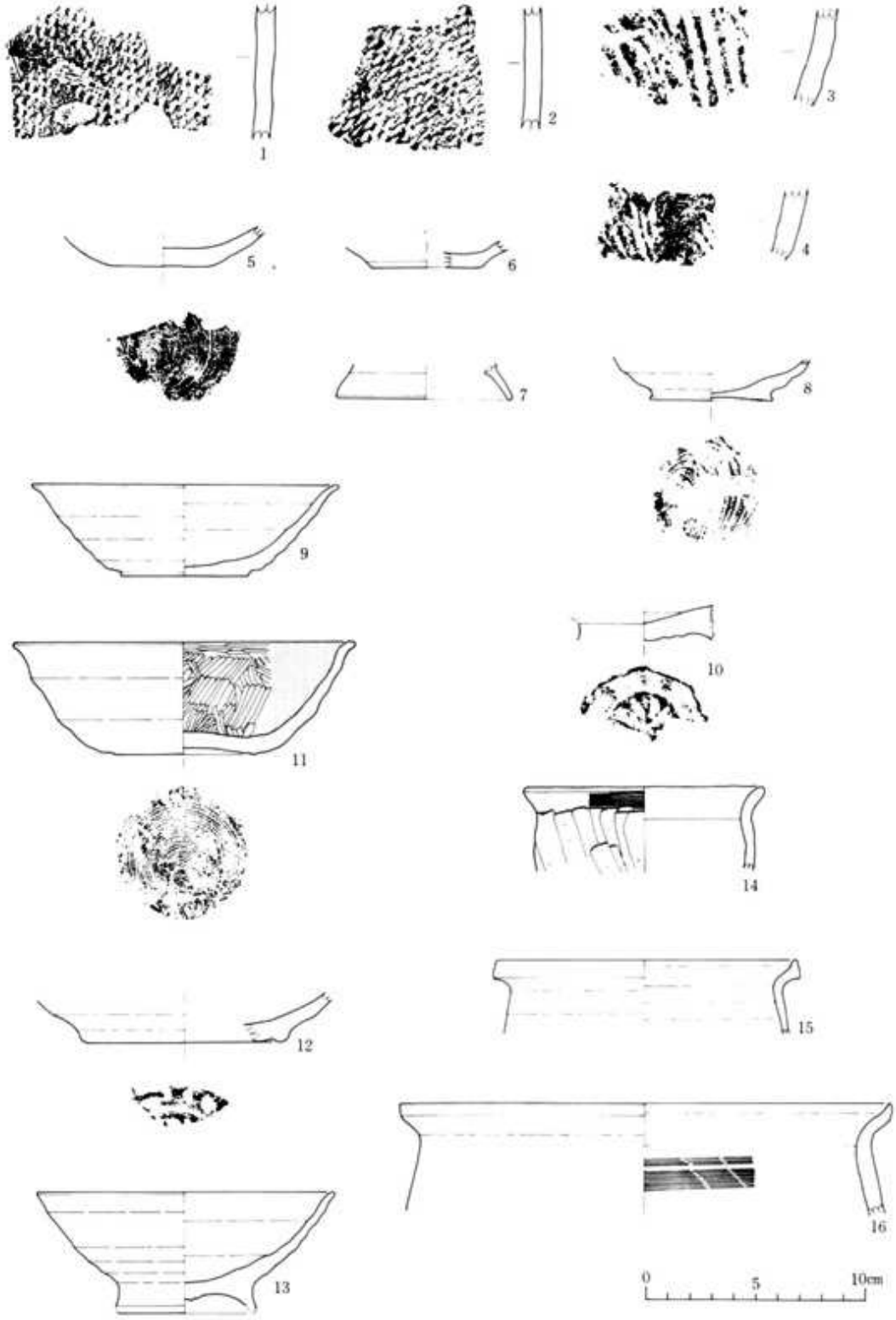
本項において扱う遺物は、各遺構（住居跡、土壙、焼土）に伴う遺物および埋土内からの遺物以外の一般グリッドの表土出土のもの、また遺構に伴うものと考えられるものであっても、耕作、工事等によって攪乱を受け出土状態が明確にならないものなどを取扱うことにした。

石器（第15図1～9、写真図版10－2）

いずれも剥片石器であり、1、2はEB50住居跡埋土から、他はEH以南のグリッド表土から出土した。刃部が



第15図　石器実測図（½）



第16図　　E 区 出 土 遺 物（1/3）

付されているもので、不定形石器が多い。3は木葉状の石槍片である。一部折損しているため全体の形状は不明である。全縁辺に刃部を形成しているが、剥離面、およびその稜線に鋭利さがなく、磨耗している状態がみられる。6は石槍様であるが、刃部が一側縁にだけ外弯状に付され、他は使用痕によると思われる刃潰し状のものが見られるだけであることから石槍とは判断できない。1、5は縦長の剥片を素材とし、一側縁部をやや外弯した刃部を作り出している。4、8、9は縁辺一部に自然面を残し、調整剥離を加えられていない部分を残している。4は背面の一辺にも調整剥離が加えられている。石材は1の凝灰岩を除き全て頁岩である。

縄文土器（第16図1～4、写真図版10－1）

1、2、3はともに繊維を含んでおり、砂粒の混入も見られる。1、2は組紐によるものとも見られたが、節の状態から原体LRLの斜縄文と考えられ梨木畑式相当のものととらえられる。3は撚糸風原体の押捺を施している。これらは矢巾町大渡野遺跡などでも出土している。いずれも早期末から前期初頭のものと思われ、出土地周辺からの流れ込みによるものであろう。

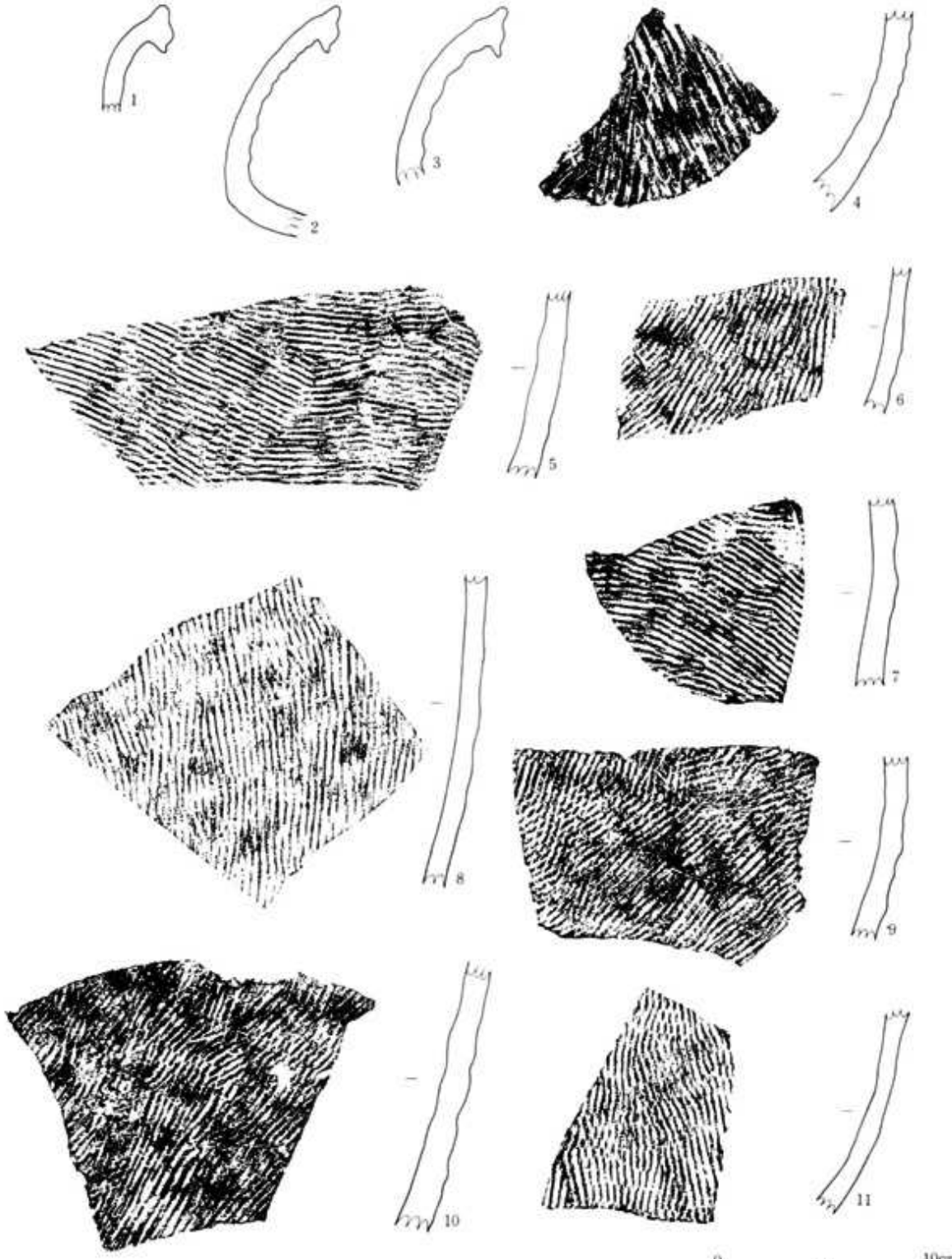
土師器

坏（第16図5～13、写真図版10－3・4・5）9、11、13は復元できたものであるが、他は小破片である。5、6、8、9、11の底部は回転糸切りの切離しであるが、5、9は磨滅が著しい。9は胎土が粗く、砂粒が多く含まれる。体部はゆるい内弯で立ち上がり口唇部は若干外反する。器形全体にゆがみが見られ、焼成も柔らかい。再調整は見られない。11は内黒処理を施したもので内面のヘラミガキも密になされている。ミガキは体部にあっては斜方向で上部から下部の順で行われている。口唇部は横方向のヘラミガキである。体部外面の再調整は認められない。体部下半にススが付着物がある。13は高台付坏である（写真図版10－5）。内面底部に不定方向の擦痕状のものが見られる。これが使用時におけるものなのかは即断できないが、線の磨耗状態から、使用時におけるキズと考えたい。7、10、12は高台部が欠落したものか、台部が小さいまま使用されたものかは不明である。10は台部貼付の底、台部片である。（写真図版10－7）

甕（第16図14～16）　いずれも口縁部片である。14は小型甕でロクロ不使用である。体部上半は軽い縦方向のヘラケズリが見られ、口縁部は横ナデが施されている。全体器形は不明であるが、最大径は口縁部にあると考えられる。15、16はロクロ使用による甕であるが、口縁部片であるため、いずれも全体器形は不明である。

須恵器

壺（第17図1～11、写真図版10－6）　いずれも大型短頸壺の口縁、体部片である。本遺跡の調査開始以前に業者によるケーブル埋設のための溝深掘の際に、溝中より出土したものである。出土地点は既に取上げられていたため正確さを欠くがほぼEA09付近（写真図版2－2）



第17図　ＥＡ09グリッド出土土器

と推定される。出土層は地山面と思われ、遺物の器面に明黄褐色土が付着していたことからもうかがわれる。

出土した壺口縁部片は3個体分である。1、3は頸部から口縁部にかけての破片で、1は推定口径46cm。口唇部は上下に挽きだされ、断面は三角形状を呈する。2は推定口径52cmの土器で肩部から口縁部にかけて残存している。焼成は非常に硬く、内外面に灰の付着、自然釉がかかる。外面に平行叩き目文が施されている。4～11の体部片は接合できるものはない。

坏（図版なし）　坏口縁部片が1点、体部片が数片出土している。焼成は硬質である。全体器形は不明である。

鉄片（写真図版なし）　EA03黒褐色の腐植土層中から出土した。用途は不明である。

〔3〕 出土土器の分類

出土土器には土師器、須恵器、赤焼き土器、縄文土器、石器などがあるが、縄文土器、石器については前述したので以下前三者について述べる。なお、各遺物とも分類には量的に少ないきらいはあるが一応の目安として意味づけをしてみたい。

〔土師器〕　土師器には、坏、高台付坏、甕などあるが、出土量が比較的多い坏、甕については成形、器形、調整技法によって分類することができる。

坏　坏は製作に際してロクロを使用したものだけである。しかし、黒色処理の有無、各部位調整技法により二類に大別することができる。

〈坏A類〉　黒色処理を施しているものである。製作に際してはロクロを使用し、更に調整が加えられているものをAⅠa類、調整の加えられていないものをAⅠb類、不明のものをAⅠc類、ロクロ不使用のものをAⅡ類とした。

AⅠa類　体部下端には再調整は加えられてはいない。しかし底部切離し（回転糸切り）後底部周縁を若干のヘラでの押しつけが見られるものがある（Eブロック出土。第16図－11）。底部から口縁部に向かって丸味をもって外傾するが、上記第16図－11のように口縁部で更に外反している。器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ黒色処理が施され、ヘラミガキの方向は体部下端から底部では放射状、他の部分では横方向、斜方向に施される。

AⅠb類　体部には特に再調整は加えられてはいない。底部切離しは底部欠損のため不明であるが、体部下端の状況から判断して回転糸切りの後は再調整は加えられていない。器形は底部から丸味をもって内弯気味に立ち上がる（EE09住出土、第13図－1）ものである。器面調整は外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は体下部から底部では放射状、他では横、斜方向である。

第3表　出土遺物集計表

( )小破片数

項目＼グリッド						EB50住(1号住)	EC56住(2号住)	ED50住(3号住)	ED03住(4号住)	EE09住(5号住)	EA03~EA09	ED53	EG50~EG53	EH03~EH53	EI03~EI50	EJ03~EJ56	FA06	FB06	FC53	位置不明
土師器	坏	(A)黒色処理	個体数			2				1				1		1		1	1	
			ロクロ使用	(Ⅰ)有	再調整(a)有									1						
					〃(b)無					1								1		
					〃(c)不明	2										1				
				(Ⅱ)無																
		(B)非黒色処理	個体数			5		8	1	1			1	1	2	5	3	1	2	2
			ロクロ使用	(Ⅰ)有	再調整(a)有	2		3												
					〃(b)無			1						1						
					〃(c)不明	3		4	1	1										
				(Ⅱ)無																
	高台付坏		個体数											1		2				
	甕	(A)口径＜器高	個体数			1														
			ロクロ使用	(Ⅰ)有	(a)成形															
					(b)調整	1			1											
				(Ⅱ)無																
				(Ⅲ)不明																
		(B)口径＞器高	個体数			9		3						1		2				
			ロクロ使用	(Ⅰ)有	(a)成形	9		3												
					(b)調整															
				(Ⅱ)無																
				(Ⅲ)不明																
		(C)口径＝器高	個体数					1												
			ロクロ使用	(Ⅰ)有	(a)成形			1												
					(b)調整															
				(Ⅱ)無																
				(Ⅲ)不明																
赤焼土器	坏		個体数					1												
須恵器	坏		個体数			1							(1)			(2)				(2)
	甕(小)		個体数																	
	甕(大)		個体数			1			1	1				(2)	(4)	(4)		(1)		
	壺		個体数								3 (14)									
縄文土器	鉢		破片数				2							4			1			
鉄片			片数								1									
石器			片数			2						2		1	2					

〈坏B類〉 黒色処理が施されていないものであり、製作に際してはロクロ使用のものである。このうち、調整の加えられているものをＢⅠａ類、加えられていないものをＢⅠｂ類、不明のものをＢⅠｃ類とし、ロクロ不使用のものをＢⅡ類とした。

ＢⅠａ類 体部下端と底部外縁に再調整が認められるものと、底部外面をヘラケズリしているものがある。体部外面をヘラケズリしているものもある。体部下半に丸味をもたせて内弯気味に立ち上がり、底部外面を回転糸切りのあとに周縁部をナデ状に再調整している。底外面では手持ちヘラケズリが観察されるものがあり、底径は他のものに比べ大きい。体部外面はロクロ調整痕が見られる。土器色調は10YR 8/6(黄橙)～7.5YR 7/6(橙)であり、焼成は軟質である。底径に対する口径の割合は約0.40である。

ＢⅠｂ類 ロクロ調整痕のみ観察できるものである。色調は10YR 7/3(浅黄)で、焼成は軟質である。胎土は細砂がかなり含まれる。底径に対する口径の割合は約0.43である。底部切離しは回転糸切りのままであり、体部はやや直線的に広がりをもって立ちあがる。

ＢⅠｃ類 口縁、体上半部片のため再調整の有無が観察できないが、器形、胎土、焼成、色調などからＢⅠａ類と類似していることから、再調整が若干加えられているものと考えられる。

なお、ＡⅡ、ＢⅡのロクロ不使用の坏はない。

高台付坏 製作に際しロクロを使用しているものである。３例のみの出土であり、うち２例は底台部だけである。坏体部の稜が見られるが、屈折は大きくなく、なだらかに移行する。台部の接合は、台部接合部を引き出し坏底部に押しつけ、その後、ロクロによる回転でナデつけている。台部は割合高く、やや外方にふんばりをもつものである。色調は橙色（5YR 6/6～2.5YR 6/6)、焼成はやや軟質である。黒斑はみられない。また、他の再調整もない。

赤焼き土器 （第９図９、写真図版９－２）

坏の口・体部片１例が見られる。ここで「赤焼き土器」としたものは、①色調は橙～明赤褐色であり②成形・調整に際しロクロを使用し、③底部切離しが回転糸切り技法によるもので、④内外面とも再調整の施されないものである。またここでは更に、⑤焼成が硬質であることも加味した。本遺跡から上記の５項目に合致するものとしては１例のみの出土であり、他との比較検討はできなかった。

甕 坏同様に、製作に際してロクロを使用したものだけである。口径と器高の比率によって２つに分けられる。なお、各部位に欠損があるものについては、器形の推定をしてＡ、Ｂ類にそれぞれ分類した。

Ａ類 ロクロを使用しており、口径より器高が大きいもの。

Ｂ類 ロクロを使用しており、口径より器高が小さいもの。

Ｃ類 ロクロを使用しており、口径と器高がほぼ同じ大きさのもの。

〈甕A類〉 ロクロを使用したもので、口径より器高が大きいものである。頸部に段差は認められない。口縁部は外反しており、口縁部端はほぼ直立する。体部外面の器面調整はロクロ調整ののち、体下半部にヘラケズリが施されている。体部上半にはロクロ使用による凹凸がみられる。体下半部のほとんどが欠損しているので、底部については不明であるが、比較的大型の甕になるものである。

〈甕B類〉 ロクロを使用したもので、口径より器高が小さいものである。頸部に段差は認められない。口縁部は外反し、口縁部端は直立する。体部外面の器面調整は、ロクロ調整のみで他の調整は施されていない。底面に回転糸切痕がみられる。この類は比較的小型のものである。

〈甕C類〉 ロクロを使用しており、口径と器高がほぼ同じ大きさのものである。頸部に段差は認められない。B類とほぼ同じ大きさで、口縁部および口縁部端の立ち上がりはB類とほぼ同じである。体部外面の器面調整は認められない。底部は安定した平底で、底面に回転糸切痕がみられる。

〔4〕 出土土器の共伴関係および遺構の年代について

(1) 土器の共伴関係

第4表　　土器分類の組合せ

	坏	甕	赤焼き土器	須恵器
EB50住居跡	AⅠc、BⅠa、BⅠc	AⅠb、BⅠa		○
EC56住居跡				
ED50住居跡	BⅠa、BⅠb、BⅠC	BⅠa、CⅠa	○	
ED03住居跡	BⅠc	AⅠb		○
EE09住居跡	AⅠb、BⅠc			○
Eブロック	AⅠa、BⅠb、BⅠc	BⅠa		○
Fブロック	AⅠb、BⅠc			○

出土土器を各遺構、および遺構外出土に分類し、まとめてみると第4表のようになる。（個体数は破片の場合は主として口縁部、底部片によって推計した。）

出土土器は、BB50住居跡、ED50住居跡からのものが多い。

土師器坏についてみると、B類がほとんどを占め、A類の黒色処理のものは少量の出土しかない。また、すべての坏はロクロ技法による成形をしており、BⅠa類が多い。BⅠc類は欠損等が多いため再調整が不明であるが、底部周辺に押しつけ状のヘラナデ痕が若干みられる。

A類の黒色処理を施したものはBB50住居跡、EE09住居跡の2住居跡から出土しているが、これらの住居跡には少量ではあるが、須恵器片の共伴が認められる。

土師器甕は3分類できるが、ほとんどがBⅠa類である。これは、口径が器高より大きいもので、再調整が認められないものである。この類は、小型甕であり、器高も口径より若干小さくなる程度である。ED50住居跡からはこの小型甕のみの出土が見られ、また坏はBⅠ類のみを伴う。更に赤焼き土器も1例ではあるが、これらの出土土器に伴って出土した。

以上、土師器坏、甕について遺構毎に共伴関係を見たが、前述したようにいずれの土師器もロクロ使用によるものであり、これらは、東北地方南部における土師器の型式分類によるいわゆる表杉ノ入式に該当するものであり、県内各地で調査されている集落跡など、その類例は極めて多く、平安時代中頃に位置するものであろう。甕は小型甕の出土数が多くみられ、これらは器形的にもほとんど同じものであり、画一的なものになるようである。

(2) 遺構の年代

出土遺物と、遺構相互の重複関係をもとに各遺構の年代を検討してみたい。

先に述べたように、杉ノ上Ⅲ遺跡は住居跡5棟を検出したが、EC56、ED50住居跡を除き、他の3棟からは土師器、須恵器を出土している。しかもこれら3棟の住居跡出土の土師器はいずれもロクロ技法による成形であり、前述したようにこれらは表杉ノ入式期に該当するものであろう。ただ、出土遺物からは3住居跡の新旧関係を把えることはできない。また住居跡埋土にみられる火山降下物（火山灰）によっても年代推定をすることが行なわれているが、本県においても各地の調査で降下火山灰の堆積と遺構、遺物とを関連づけ、遺構の年代を推定している。その一例として北上市相去遺跡の調査資料によると、相去遺跡群の形成期は10世紀後半～11世紀前半に設定している。墳出火山の違いによっても火山灰のX線回折（別表資料）に差があろうし、また時期にも差があろうことは考えられるが、本遺跡EB50住居跡およびED03住居跡の埋土内の火山灰と伴出する土器に相去遺跡とほぼ同じ様相を持つものがあることから、これらの火山灰を相去遺跡のものとほぼ同時期のものと考えることは可能であろう。したがって本遺跡の形成時期を10世紀後半と推定したい。

つぎにEC56住居跡は縄文時代の住居跡と断定することは前記資料だけでは無理であり、一応時期不明としておきたい。

なお、Eブロック東北本線側のケーブル埋設の溝跡から出土した須恵器壺は最小3個体分を確認できる。住居跡は東北本線寄りと降雪期のため土層の判別にも無理があり、確認できなかったが、住居跡の一部に存在した可能性は十分考えられる。今後、近接地の調査に当っては留意すべきと思われる。

4．まとめ

杉ノ上Ⅲ遺跡の調査における遺構と遺物については以上に記したとおりである。これらの成果をふまえ、本遺跡の主要な遺構・遺物と、今後の課題についてまとめてみたい。

(1) 本遺跡は北上山地と奥羽背梁山脈にはさまれた北上川中流域にあり、沿岸に発達した段丘

群のうち、残片的に分布する中位段丘（二枚橋段丘）面の南縁部に立地している。この段丘は第三系玉里層および日詰礫層を基盤とし、その上に二枚橋礫層が不整合におおい、砂、および灰白色粘土、火山灰質薄層が堆積している。

(2) 平安時代中期の竪穴住居跡4棟と遺物（土器、鉄片）が発見されたが、遺構が緩斜面上に位置していたため、住居跡の壁が流出しており、範囲を確認できないものもあった。

(3) 上記4棟の竪穴住居跡はほぼ同時期のものであろうが、ED50住居跡とED03住居跡は若干の前後関係が認められ、ED50住居跡が新しいものと考えられる。

(4) 上記4棟の住居跡はその構造上に相違が認められるが、流失、削平などのため、比較検討する要素に欠けるものがあった。

(5) 南斜面Eブロックから発見された須恵器壺の出土地点（ケーブル埋設地跡）は、住居跡に含まれる可能性があるが、東北本線寄りのため検出は不可能であった。

(6) 縄文土器の出土したEC56住居跡は、小規模な住居跡であり、時期についても必ずしも縄文時代の住居跡とは資料不足のため、断定することは無理である。いずれ、短期間の住居であったと考えられる。

(7) 南斜面および、平坦地（E、Fブロック）から縄文土器、石器なども発見されており、特に縄文土器は早期末～前期初頭のものと思われることから、この付近は、古来からの生活の場としても利用されていたことが推定される。しかし、遺物に伴う遺構は確認されなかったので、これらの時期にどのような活動があったかは明らかにできなかった。

(8) 遺跡の範囲は、今回の発掘調査地区以外にものびており、特に東側果樹園の緩斜面上や東北本線西側の段丘面上には住居跡等の遺構が存在することが予想され、更に須恵器の出土から段丘縁辺部には窯跡遺構も十分考えられる。杉ノ上遺跡群および近接地の今後の保存対策が早急に考慮されることが望ましい。

なお、堆積降下物（降下火山灰）の分析は岩手県立工業試験場に依頼し、別紙資料の結果を得たが、今後、県内各地の降下物の分析例を比較検討することによって更に資料化されるものと考える。

注1，2　岩手県紫波町　（1972）「紫波町史」第1巻

注3，　北上市教育委員会（1973）「相去遺跡」現地説明会資料

引用・参考文献

岩手県紫波町　（1972）「紫波町史」第1巻

岩手県教育会紫波郡部会　（1925）「紫波郡誌（全）」

岩手県埋蔵文化財センター　（1977）「都南村湯沢遺跡」

岩手県　（1961）「岩手県史」第1巻

宮城県教育委員会　（1978）「宮城県文化財発掘調査略報ー椽塚遺跡ー」　宮城県文化財調

査報告書第53集
宮城県教育委員会　(1974)「東北新幹線関係調査報告書Ⅰ－岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集
桑原滋郎　(1976)「須恵系土器について」東北考古学の諸問題
小笠原好彦　(1976)「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学の諸問題
氏家和典　(1957)「東北土器器の型式分類とその編年」歴史第14輯
岡田茂弘　(1974)「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所紀要Ⅰ
秋田市教育委員会　(1973)「秋田城跡」昭和47年度秋田城跡発掘調査概報
秋田考古学協会　(1976)「野形遺跡」
講談社　(1964)「日本原始美術・Ⅰ　縄文式土器」

分析関係

工試建第　541　号

試験分析成績書

受付年月日　昭和 54 年 2 月 14 日

試験の結果は下記のとおりです

昭和 54 年 3 月 12 日

依頼者住所　岩手県盛岡市内丸10－1

氏　　名　岩手県教育委員会事務局文化課殿

岩手県工業試験場長

依頼品名および数量　遺構埋土堆積物二種類

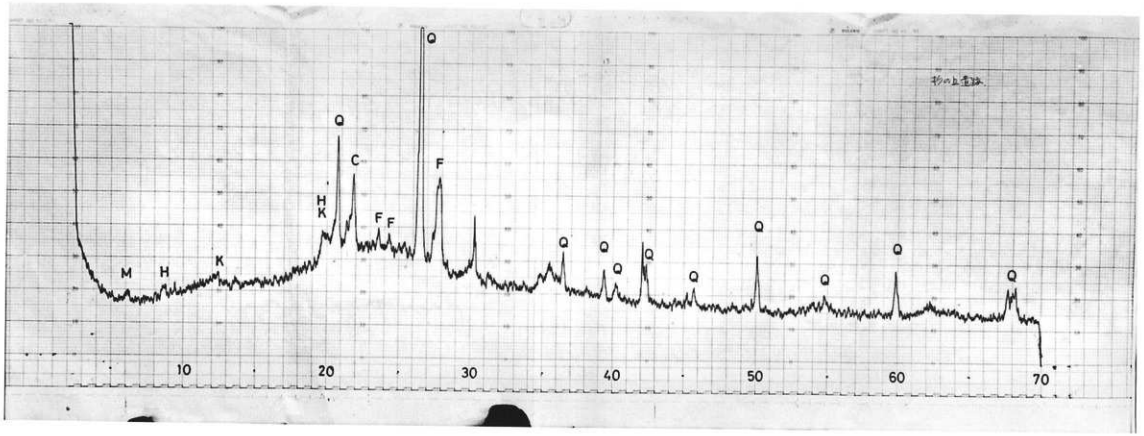
分析試験　　記

印

種　別	定量分析及びX線回折	備　　考
	試験、分析の結果は別紙のとおり	

(1) 化学分析結果

成　　分	百　分　率	成　　分	百　分　率
H_2O^-	2.60	MnO	0.171
H_2O^-	7.28	CaO	1.97
SiO_2	61.05	MgO	0.80
Fe_2O_3	6.20	S	trace
TiO_2	0.612	Na_2O	3.18
P_2O_5	0.114	K_2O	0.99
Al_2O_3	15.59		



杉の上遺跡

Q : Quartz

F : Feldspars

C : α—Cristobalite

M : Montmorillonits

H : Halloysite

K : Kaolinite

条件

Target : Cu

Filter : Ni

Voltage : 30KV

Current : 24mA

Count Full Scale 1,000%

Time Constant : 2 sec

Scanning Speed : 1°/min

Chart Speed : 10cm/min

Divergency : 1°

Receiving Slit : 0.3mm

杉ノ上Ⅱ遺跡

遺跡記号：SU・Ⅱ
所在地：紫波郡紫波町二日町字栗木田7—1他
調査期間：昭和48年10月16日～49年1月29日
調査対象面積：4276㎡
平面実測基準点：東京起点478.98677km（EA50）
基準高：海抜 北111.10m 南111.50m

1．遺跡の位置と立地（第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P14）

本遺跡は紫波町二日町字栗木田に所在し、紫波町役場より北方約2.2kmの地点に位置する。

紫波町は東西約25km、南北約8.5kmの東西に長い区画を有し、東部は北上山系、西部は奥羽山系に連なっている。

東北新幹線は、紫波町南部の彦部付近では北上川東岸の北上山系西部丘陵沿いを走り、緩くカーブして犬渕付近で北上川を渡る。中央部の日詰付近では東北本線と隣接し、そのまま連なって紫波町を抜ける。

紫波町内においても、北上川の西岸には扇状地性の段丘群が広範囲に発達する。これらの段丘は少なくとも新旧を別にする3段以上に分類される。中川久夫氏らの研究成果[注1]によれば、当地域の段丘区分は上位段丘を石鳥谷段丘、中位段丘を二枚橋段丘、低位段丘を都南段丘とし、二枚橋段丘と都南段丘との間に花巻段丘を設けている。

日詰付近では[注2]高位段丘が比較的発達しており、中位段丘はそれにとりつくかたちで点在する。最も広く発達するのは花巻段丘面で、中位および高位の段丘はこの面の外方を取り巻いている。低位段丘は北上川本流沿いに分布している。

本遺跡は中位の二枚橋段丘面に立地する。この段丘は、沢を挟んで北方と南方とを同じ中位段丘に囲まれており、西方が花巻段丘面、東方が都南段丘面となる。低位の都南段丘面との比高は比較的高く、約7～9mとなる。

注1．中川久夫ほか「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻第812号　1963

注2．日詰付近の地形分類に際しては高橋文夫氏が作成した地形面区分図を参照した。
高橋文夫「Ⅲ地形・地質」『都南村湯沢遺跡』(財)岩手県埋蔵文化財センター　1978

2．調査の経過（第1図）

当遺跡は47年から48年にかけての新幹線路線敷予定地内にかかわる分布調査が行なわれる以前より遺跡として知られていた。記録に残るものとして古くは『紫波郡誌』(岩手県教育会紫波郡部会編、1925)に窯跡として紹介されている。したがって段丘上全域を遺跡として認定し、4276㎡を調査対象とした。調査区域の範囲は、東西約18m、南北約38mとなる。

調査は、まず路線敷の2本の中心杭（478.960km、478.980km）を基準にして調査区域全体に一辺3mのグリッドを設定し、そのうち約1440㎡を発掘した。

遺跡の乗る段丘は東北本線によって分断されており、調査区域は複線工事に伴う削平を随所にうけていた。また、地目が果樹園になっているため、抜根の痕跡が所々に見られた。

発掘の結果は、住居跡3棟、溝1本を検出した。遺物はこれらの遺構より出土したものがそのほとんどを占めている。

なお、調査期間が冬期にわたったことにより、積雪のため調査に多くの困難が生じた。自衛策として、住居跡にかかわる遺構はその全域をビニールハウスで覆って調査した。これは、雪に対する防禦には役立ったが、写真撮影はある程度犠牲になっている。

3．調査の成果

〔1〕 基本層位（第2図）

遺跡の乗る段丘面の基本層序を明らかにするために、調査区域内の2地点で深さ約2mの深掘を実施し、断面観察を行なった。その結果は第2図に示すとおりである。

Ⅰa層：暗褐色（7.5YR3/3）土。粘土質シルト。草木根が集中する層。地目は果樹園および草地である。調査区全域を覆っている。層厚10cm土。

Ⅰb層：暗褐色（7.5YR3/3）土。粘土質シルト。相対密度は密で比較的硬い。この層は調査区域の北部に薄く、南部に厚い傾向にあり、北端ではこの層を欠く。層厚0～30cm。

Ⅰc層：黒褐色（7.5YR2/2）土。シルト質粘土。相対密度は中位で軟かい。Ⅰb層と同様にこの層も北部に薄く、南部に厚い。層厚10～25cm。この層からは土器が出土するほか、炭化物・焼土粒も包含する。

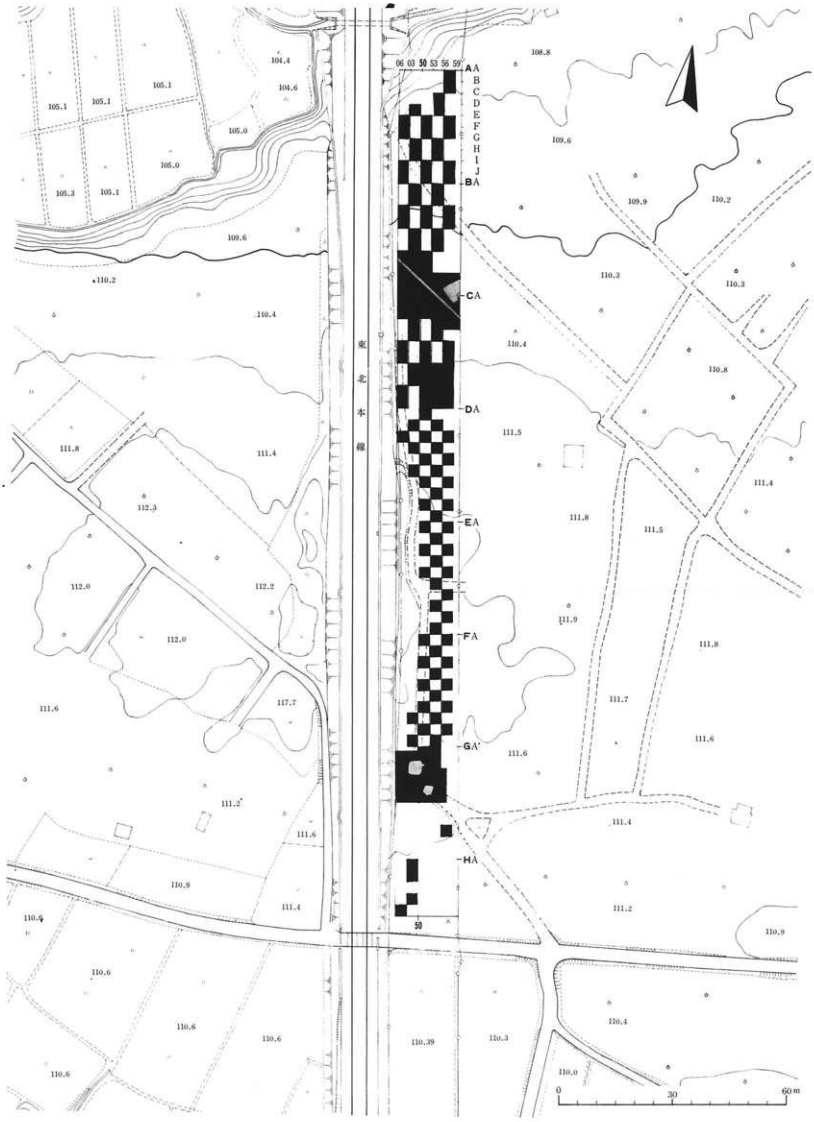
Ⅱa層：褐色（7.5YR4/6）土。シルト質粘土。火山灰土。漸移層で遺構検出面にあたる。本遺跡で発見されたすべての遺構はこの層の上面より検出されている。層厚10cm土。

Ⅱb層：明褐色（7.5YR5/8）土。シルト質粘土。火山灰土。相対密度は中位でやや軟かい。下位に向かうほど色調が明るくなり、粘性が強くなる。層厚40～70cm。

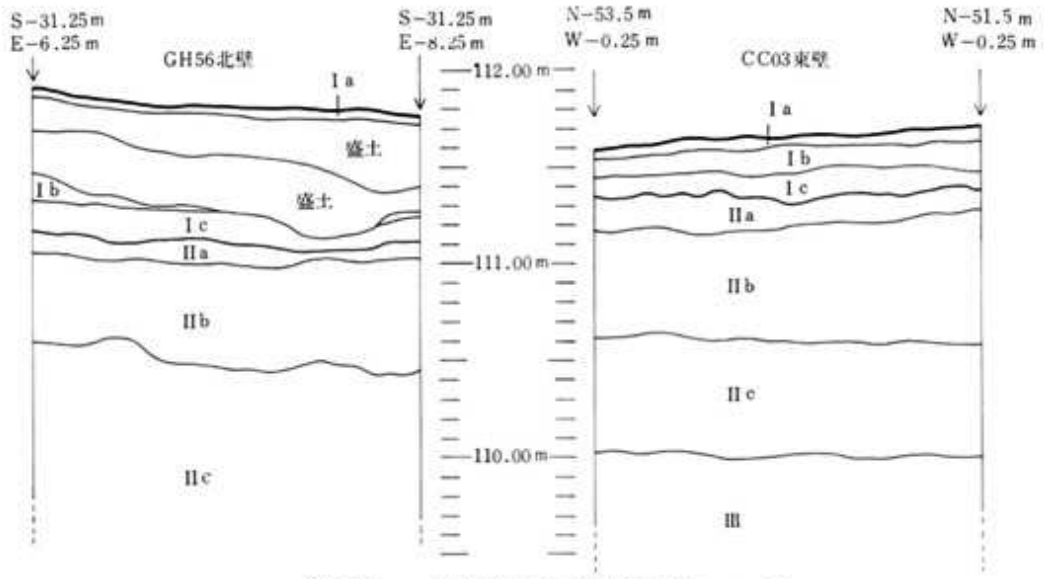
Ⅱc層：灰黄色（2.5Y7/2）土。粘土。火山灰土。相対密度は密でやや硬い。砂および礫を少量混える部分もある。層厚にはばらつきがあり、北部ほど薄く、南部に厚い。約60～90cm。

Ⅲ層：橙色（7.5YR6/8） 砂礫。粘土が所々に混入する。礫量は変化が大きく、礫をほとんど含まぬ細砂～粗砂の部分もある。礫は安山岩・硅岩が主で、径が1cm内外の小礫である。層厚は不明であるが、試錐結果（復建技術コンサルタントK.K、1973）によれば4m前後となる。

なお粗掘はⅡa層の上面までを目標にしたが、結果的にⅡb層の上面まで掘り下げている箇所が多い。



第1図　杉の上II遺跡グリッド配置図



第2図　CH56北壁 CC03東壁セクション図

以上、探掘結果をもとにした堆積層の構成は、Ⅰ層（表土）―暗褐色粘土質シルト層、Ⅱ層―火山灰質粘土層、Ⅲ層―砂礫層に大別される。Ⅱ層は段丘上のみを覆って分布し、下位の水田面には、堆積していない。遺物の出土層はⅠc層になる。

〔2〕 発見遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

BJ56住居跡（第3図～5図）

〔遺構確認面〕　Ⅰc層を掘り下げる途中で木炭片・焼土粒および土器片が出土し、遺構の存在が予想された。遺構はⅡa層を2～3cm掘り下げた段階で検出された。なお、遺構掘込面は畦畔断面の観察により、Ⅱa層上面であることが認められた。

〔保存状況〕　遺構が路線敷外にまたがるため、全体のプランを検出できなかった。調査区域内に限れば、南東部にりんごの木による攪乱をうけているほかはほぼ原形のまま残されていた。

〔増改築〕　1度増築している。増築するにあたっては、15cmほど土を埋め戻して床面を高くし、さらに90cm前後南壁を拡張している。

以下、増築以前の住居を第一次住、増築後の住居を第二次住として説明を加える。

〔平面形・長軸方向〕　第一次住は東西にやや長い長方形、第二次住は南北に長い長方形となる。長軸方向は、第一次がN－128°30′―W、第二次がN－38°30′―Wとなる。

〔規模〕　第一次住は長軸長4.92m、短軸長4.41mとなり、床面積は推定で約18.68㎡である。第二次住の長軸長は5.37m、短軸長は4.92mとなり、床面積はやはり推定で約24.42㎡である。

〔第二次住堆積土〕　遺構内の堆積土は基本的には以下の4層に大別される。

第１層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト質粘土層でⅠc層と近似している。最も厚い層で、分布も広く住居のほぼ全域に及んでいる。焼土・木炭片をごく少量含む。

第２層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土で第１層と同様に住居の全域を覆い、北側に厚く堆積する。焼土粒・木炭の小片を多く含む。第１層に比べて固くてしまりが強い。

第３層：住居が火災に遇ったときに堆積した層と思われる。３層に細分される。

第３層－ａ（明褐色土層）：比較的硬く焼けた焼土。

第３層－ｂ（暗赤褐色土層）：焼土や木炭および土器を多量に含む暗赤褐色のシルト質粘土層である。木炭が多量に含まれる箇所は黒褐色を呈する。含まれる木炭は破片に限らず、太い柱状のものも多くみられ、床面に横倒しの状態で数本検出されている。

第３層－ｃ（褐色土層）：地山の明褐色土と暗褐色土の混入する層。3b層と異なり、少量の焼土粒・木炭粒以外の焼きの強い焼土、柱状の木炭等は含まれない。地山の明褐色土は大小の粒状になって混入する。

第４層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土層で、少量の焼土・炭化物のほか地山の明褐色土を斑状に含む。

以上４層に大別される第二次住の堆積土の相関関係を要約すると次のようになる。第１～２層は住居廃絶後の自然堆積層に位置づけられる。第３層は住居が火災に遇った際に堆積した事故的堆積層ということができる。焼土、柱状の炭化物は3b層に集中し、3c層にはほとんどみられない。これは、屋根の上部等に置かれていた土が落ちこむことによって堆積されたものと推定される。第４層は住居を使用する過程で堆積した生活層と思われ、第４層の上面は住居廃絶直前の生活面と把えることができる。

〔第一次住堆積土〕　遺構内の堆積土は、基本的には２層に大別される。

第１層：暗褐色土と地山の明褐色土の混合土であり、明褐色土は新鮮なかたちで残されている。焼土・炭化物を少量含む。

第２層（暗褐色土層）：第二次住の第４層と共通する層で、住居全域に薄く堆積している。

第１層は、住居を拡張するときに埋め戻した人為的な堆積層である。上面はたたきしめられて非常に固くなっている。第２層は、第一次住を使用する過程で自然に堆積した生活層である。第１層・第２層とも土器等の遺物はほとんど出土していない。

〔壁〕　壁は床面より緩く傾斜して立ちあがる。現存する壁の高さは、第一次住で西壁が27cm、南壁が28cm、北壁が27cmとなる。第二次住はずっと低くなり、西壁で18cm、南壁が13cm、北壁17cmとなる。壁に伴う施設は、共に検出されていない。

〔第二次住床面〕　床面はほぼ平坦であるが、南側より北側にかけて緩く傾斜している。壁際を除いて非常に固い面をなしており、堆積土とは肌わかれ現象が認められる。床面上からは13

層位	層No.	土色	土性	その他
第1層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	地土の細粒、木炭粒を少量含む
第2層	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	地土粒、木炭粒を含む
第3層	3	明褐色(5YR6/6)	シルト	地土(ブロック状)
	4	暗赤褐色(5YR3/6)	シルト質粘土	地土(ブロック状)、木炭(柱状)を多量に含む
	5	褐色(7.5YR5/6)	粘土質シルト	銅類な地山粒を含む
第4層	6	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	地山の細粒を斑状に含む

層位	層No.	土色	土性	その他
第1層	7	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	上面が固化している
		暗褐色(7.5YR3/3)		
第2層	8	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	地山の細粒を斑状に含む
埋り方埋土	9	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	
		暗褐色(7.5YR3/3)		
	10	にぶい黄色(7.5YR6/3)	シルト質粘土	ぼさぼさしている

第3図　BJ56 住　居　跡

個のピットが検出されている。南東部の一部がりんごの木による破壊をうけているほかは、良好なかたちで遺存している。

〔第一次住床面〕　床面は平坦であるが、特にたたきしめられたような固い面をなしていない。床面上からは大小4個のピットが検出されている。

最後に床面を掘り下げると、地山の明褐色土を基本にし、暗褐色土が混入するシルト質粘土層が5～10cmの厚さで認められた。この層は住居掘り方の埋土と思われる。

〔柱穴〕　第二次住の床面より検出された13個のピットのなかで確実に柱穴とすることができるものにはP_1・P_9・P_{12}がある。4本を基本とする長方形の配置形態を示すものと思われるが、対になるもう1本は調査範囲外に入る。P_1とP_9は第一次住の柱穴と共用している。共用するに際しては、柱当りの周囲を二段重ねで補強している。下段には、地山の明褐色土を固くたたきこみ、その上段には第二次住の床面のレベルに合わせて、白色粘土を巻き込んでいる。P_{12}は拡張部分の壁際に新たに掘り込んでいる。深さは3本とも40cm強でかなり深い。

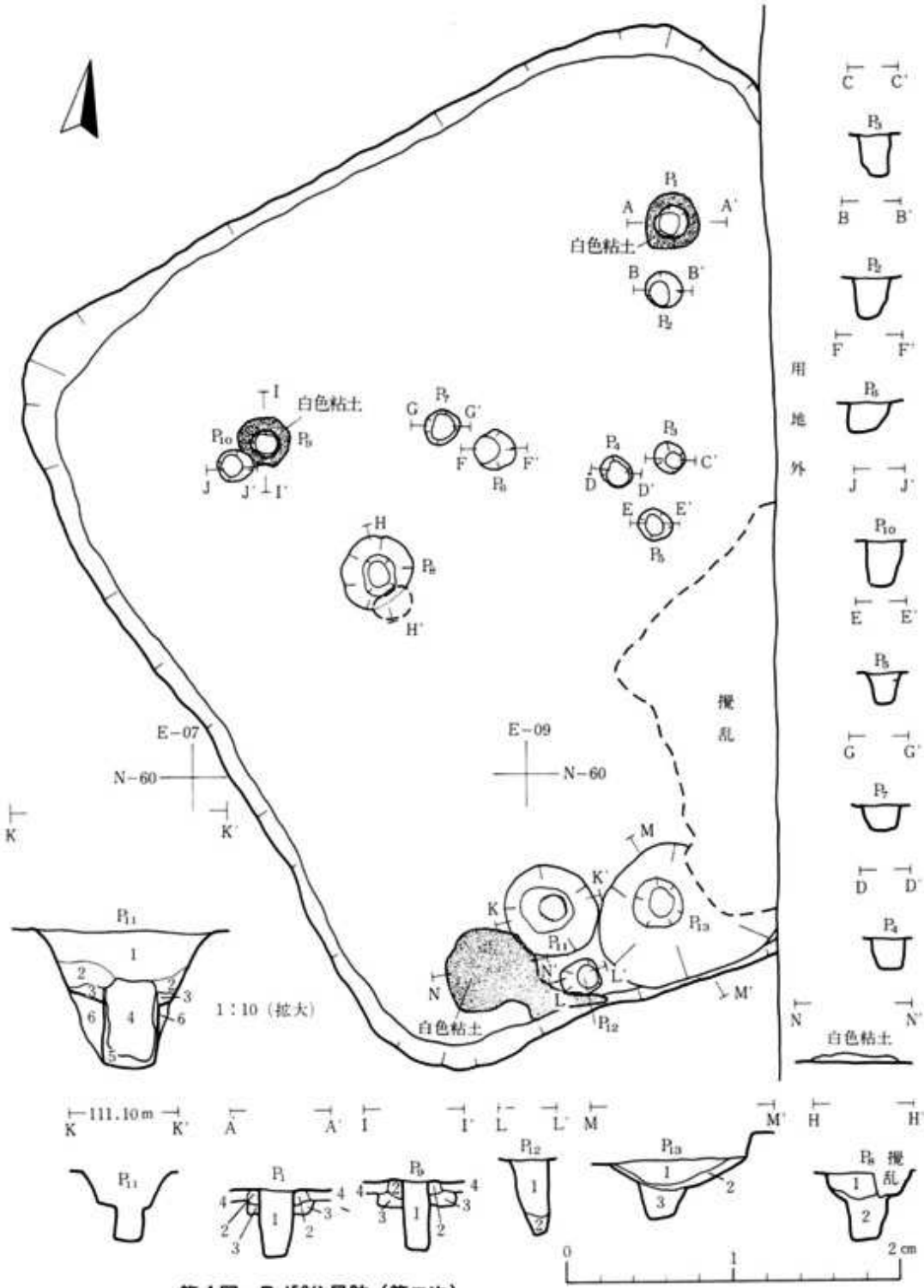
第一次住の柱穴はP_{14}とP_{15}があり、それぞれP_1・P_9と同一ピットとなる。そのほかに、P_{16}は配列に規則性が認められるが、深さは18cmと浅くなる。

〔カマド〕　カマドは、第一次住・第二次住ともに検出されていない。調査区域外になる東壁、ないし南壁西寄りのいずれかに付設されているものと思われる。

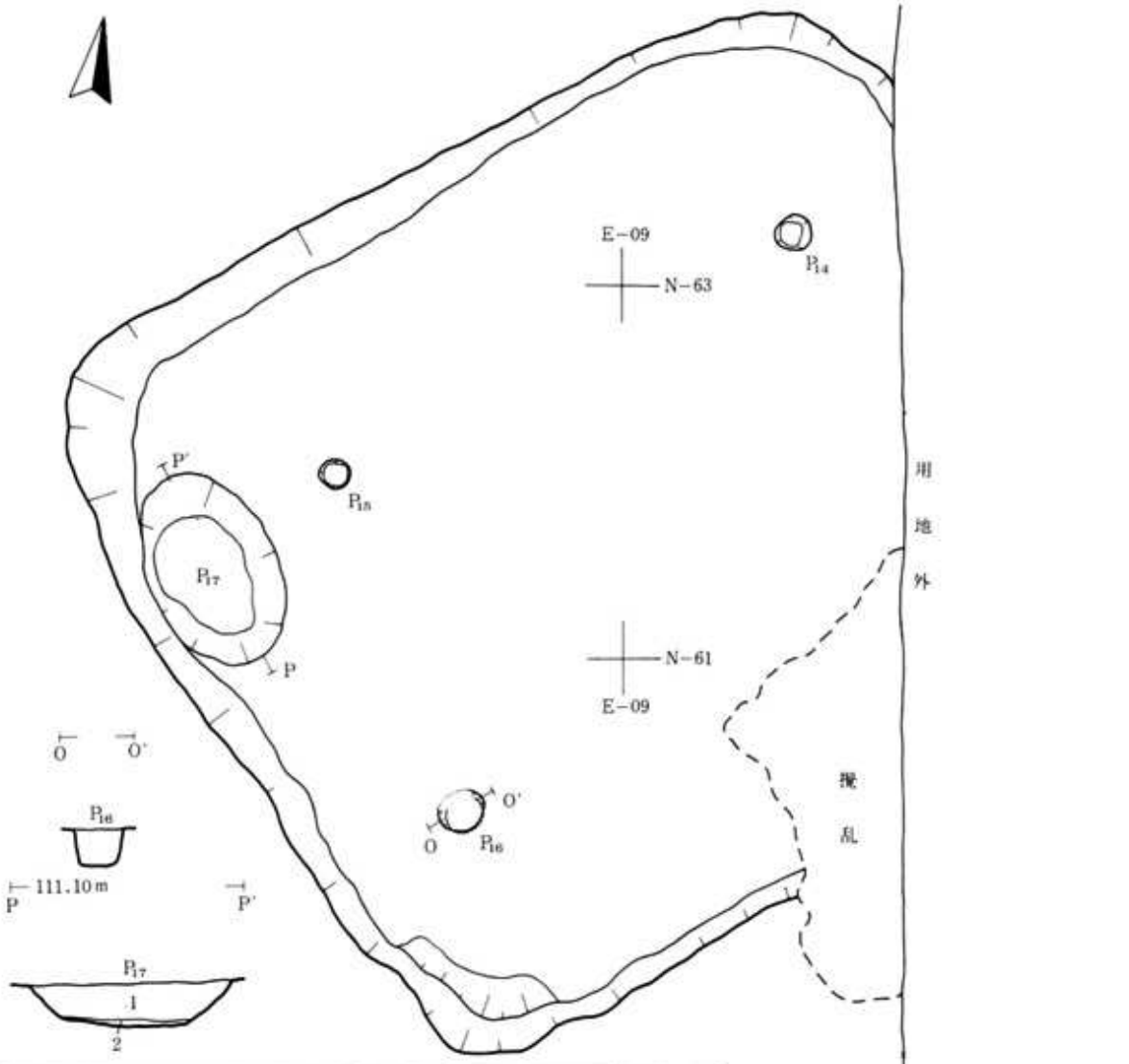
〔貯蔵穴〕　貯蔵穴と断定できるものはないが、類似したものとして、第一次住北西コーナー付近にP_{17}がある。ピット内の層位は2層に区分され、上層は明黄褐色土と暗褐色土の混合するもので、人為的な堆積層である。下層は暗褐色のシルト質粘土層で灰を含みベトベトしている。このピットは、第一次住が廃止される段階で埋め戻されたものと思われる。遺物は下層より須恵器甕片が1点出土している。

〔その他の施設〕　第二次住南壁際にロクロ回転台を据えるためのピット（P_{11}）が検出されている。径約55cm、深さ約23cmで、すり鉢状の断面形を呈する。底部には径約20cm、深さ約18cmのピットをもつ。ロクロ回転板の心棒を据えるための小孔と思われる。堆積土は5層に分けられる。No.1層は暗褐色シルト質粘土層で、住居堆積土第2層と類似している。須恵器甕片を多量に含む。No.2層は焼失時に堆積したものと思われ、暗褐色土を基本にして焼土・木炭片を混入する。No.3層は新鮮な白色粘土であり、貼りこまれたものである可能性が強い。No.4層は心棒の腐植土と思われ、黒褐色を呈するシルト質粘土層である。白色粘土をブロック状に含む。No.5層は白色粘土層となるが、No.3層とは異なりかなり汚れている。心棒のおさえに用いたものであろう。

最後に、このピットを立ち割ったところ、軸になる小孔の周囲に地山の明褐色土と黒褐色土の混合土が固められて入っていた。このことから、この種のピットの構築法として次のような



第4図　BJ56住居跡（第二次）



	層No	土色	土性
P 1	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
	2	灰白色(7.5YR8/2)	粘土
	3	明赤褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土
	4	住居内堆積土層No.7	
P 2		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 3		黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
P 4		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 5		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 6		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 7		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 8	1	褐色(7.5YR4/4)	シルト質粘土
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 9	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
	2	灰白色(7.5Y 8/2)	粘土
	3	明赤褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土
	4	住居内土層No.7	
P 10		黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土

	層No	土色	土性
P 11	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
	3	灰白色(7.5Y 8/2)	粘土
	4	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
	5	灰白色(7.5YR8/2)	粘土
	6	明褐色＋暗褐色	シルト質粘土
P 12	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 13	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
	3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
P 14		P 1 と同じ	
P 15		P 9 と同じ	
P 16		黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
P 17	1	明褐色＋暗褐色	シルト質粘土
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土

第5図　BJ56住居跡（第一次）

手順が考えられる。

1．一且すり鉢状に40cmほど掘り下げる。

2．回転台の軸となる心棒に粘土を巻きこんで底部に立てる。

3．その周囲に明褐色土と黒褐色土との混合土をなかほどまで埋め戻して固める。

4．上部に粘土を貼る。

そのほかにP_{11}と類似したピットとしてP_{13}があり、同じく二重のピットとなる。上部は約80×100cmの径をもち、深さは約18cmとなる。断面形は皿状となる。底部にはさらに径約30cm、深さ約34cmの小孔をもつ。堆積土は3層に区分され、No.1～2層はP_{11}と同様である。小孔に入るNo.3層は暗褐色シルト質粘土層で、地山の明褐色土および白色粘土をブロック状に含む。底部の小孔がロクロ回転台の心棒を据えるためのピットとなるかは不明である。少なくとも住居が焼失によって廃絶される直前の段階では、上部の皿状のピットのみ使用されている。2個のピットの重複となる可能性もある。

P_{11}の上部を中心に、P_{13}にまたがって須恵器大甕が押しつぶされたかたちで4個体分出土している。おそらく、ロクロ水挽き用の水を貯えるためのものであろう。

〔出土遺物〕　焼失家屋であるにもかかわらず、遺物の出土量は少ない。ほとんどの遺物が堆積土第3c層より出土している。

坏

坏には、土師器として類別され、内面にヘラミガキ等の調整を施して黒色処理したもの（A類）と典型的な須恵器で、くすべ色を呈し比較的胎土が密で焼成の良好なもの（B類）とがある。

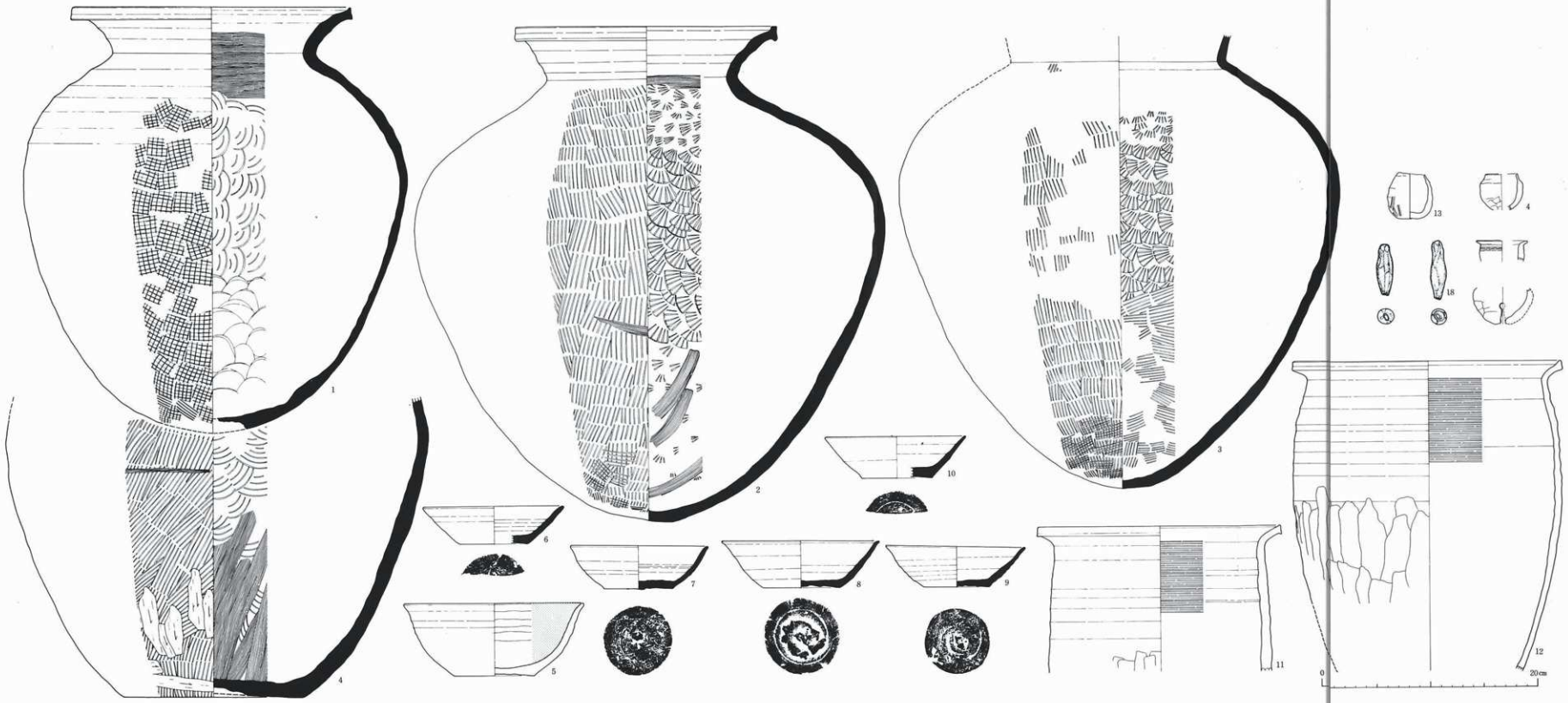
A類（第6図5）：体部から口縁部にかけてかなりふくらみをもって立ちあがる器高の高い大形の坏である。底部は平底で、ロクロ右回転糸切り痕を残す。器高調整は外面はロクロナデ、内面は幅の広いヘラミガキを施して黒色処理をしている。

B類（第6図6～10）：5個体とも底部を回転ヘラ切り技法によって切り離されたもので、再調整のないもの（第6図8～10）と底部に手持ちのヘラケズリを加えているもの（第6図6・7）とがある。体部から口縁部にかけては、直線的に外傾するが、やや丸味をもって外傾するもの（第6図7）もある。

甕

甕には土師器（A類）と須恵器（B類）とがある。

A類（第6図11・12）：ともに形態的には、長胴形の甕といわれるものに該当する。第6図12は、短く外反する口縁部をもち、口唇部は上方につまみだしている。体部は緩やかな曲線を描き中央付近に最大径をもつ。第6図11の口縁部は短く外反し、口唇部は上下につまみだす。体部はやや直線的になる。



第6図 BJ56 住 居 跡 出 土 遺 物

器面調整は共通している。外面は口縁部から体部上半がロクロナデ、体部下半がヘラケズリで整えている。内面は口縁部がロクロナデ、体部上半が刷毛目状ロクロナデ、体部下半がナデツケとなる。

B類(第6図1～4)：器高が40cmを超える大甕である。丸底のもの（第6図1～3）と平底のもの（第6図4）とがある。

第6図1：底部の一部を欠くが、器高約40cmとなる。口唇部は上下に挽きだされ内外面に稜をもつ。体部はほぼ球形に近く、中央付近に最大径をもつ。体部の器面整形は、上半が格子叩き～青海波あて工具、下半が格子叩き～同心円あて工具で叩きしめ、頸部周辺は、ナデを施している。

第6図2：器高が46cmと1よりもやや大形となる。口唇部は上下に強く挽きだされ、上端では広い面をなす。体部はやや肩のはる球形を示し、体部の上半に最大径をもつ。体部の整形は平行叩き～蓮ぐう紋あて工具で叩きしめ、内面の頸部および体部下半はナデを加えている。焼成は非常に硬質であり、体部中央には、焼成時のものと思われるひびわれがある。外面には緑褐色および黒褐色のつやのある自然釉がかかる。

第6図3：口縁部を欠き、現存部分で器高が42cmとなる。口縁部の形態は不明であるが、体部は2と同様にやや肩のはる球形を示し、体部の上半に最大径をもつ。体部の整形は外面上半が平行叩き～蓮ぐう紋あて工具で叩きしめ、体部上半は内外面とも平行叩きで器面を整えている。外面上半には緑褐色のつやのある自然釉がかかる。また、同じ外面上半に、窯壁から溶け落ちたものと思われる大小の粘土粒がこびりついている。

第6図4：口縁部から体部上半を欠く。体部の整形は平行叩き～青海波あて工具で叩きしめ、体部下半は外面にヘラケズリ、内面にナデを加えている。底部は平底で、全面ヘラケズリを施している。

小形手捏ね土器（第6図13～15）

第6図13：底部から口縁部まで内弯ぎみに丸味をもってたちあがるもので、頸部のくびれはみられない。胎土は砂粒を含むが比較的緻密である。外面調整はナデを施している部分もあるが、全面に指頭によるオサエが行なわれている。内面は指でオサエながら器面を整えている。

第6図14：現存部分は約⅓である。球形の体部をもち、口縁部はほとんど直立する。底部は欠損しているが丸底風になるものと思われる。胎土は第6図13と共通する。口縁部は指頭によるオサエ、体部外面はヘラケズリとヘラミガキで調整されている。内面は指でオサエられたものと思われ、指紋が残っている。

第6図15：口縁部から体部上半にかけての破片であり、現存部分は約⅙である。強く外反す

る口縁部をもち、典型的な甕形を呈する。内外とも指によるオサエで調整されており、外面体部上半に3条の細い刻線が囲る。

土鈴（第6図16）

約¼の破片であるため、全体の形態はよくわからない。中央部に小孔をもち、下方に逆V字形に開くものと思われる。外面は軽いヘラケズリと指のオサエで調整されている。内面は比較的丁寧なオサエで器面を整えている。

土錘（第6図17・18）

2点出土している。ともに中央部でやや膨み、紡錘形に近い円柱となる。第6図17は長さ4.6cm、最大径1.6cm、中央部に径約2mmの貫通孔がある。第6図18は長さ5.3cm、最大径1.5cmで、中央部に径約3mmの貫通孔がある。2点とも外面はオサエとヘラミガキで調整されている。

GB03住居跡（第7図）

〔遺構確認面〕　遺構の検出面はⅡa層の褐色シルト質粘土層上面にあたる。しかし、この面では正確なプランは確認されず、Ⅱa層を4～5cm掘り下げた段階で遺構を確認した。

〔保存状況〕　東北本線の複線工事にかかる削平・盛土等によって西壁および南壁の一部はほとんど現存しない。さらに、後世の溝・土壙によって床面西方の一部と西壁が破壊をうけている。原形のまま遺存しているのは東壁周辺に限られ、保存状況は良好とはいえない。

〔平面形・長軸方向〕　東西方向に若干長いがほぼ正方形となる。長軸方向は東西方向にとり、N－98°50′－Wとなる。

〔規模〕　東西方向が3.88m、南北方向が3.66mとなり、床面積は約13.61㎡である。

〔堆積土〕　住居内の堆積土は基本的に以下の3層に大別される。

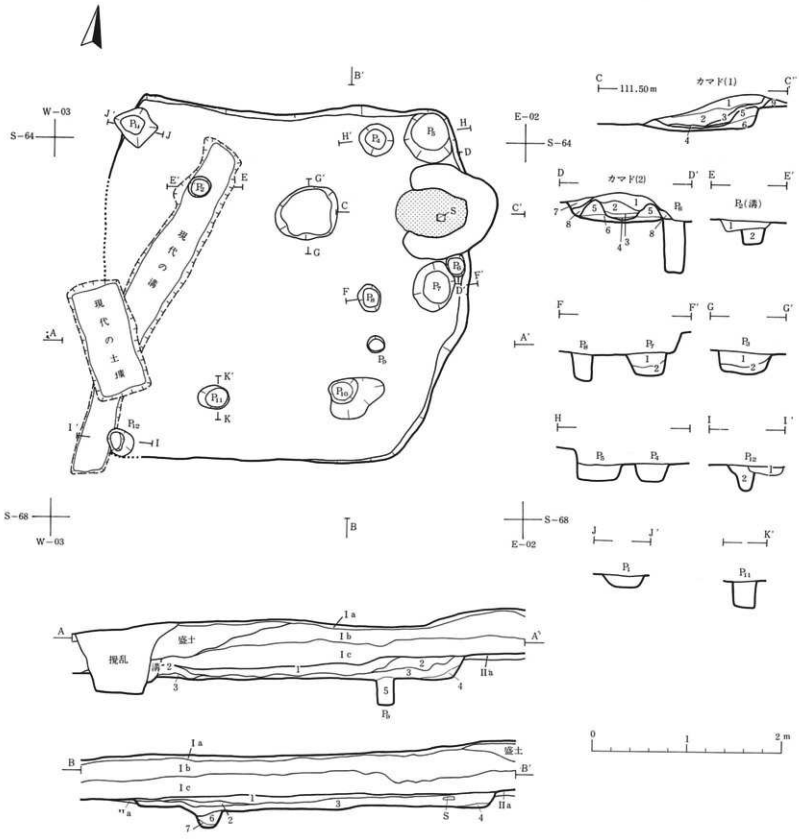
第1層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト質粘土層で、住居の中央付近にレンズ状に堆積する。木炭片・焼土を混入し、比較的粘性が強い。

第2層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土層で、壁沿いに分布する。地山の明褐色土および焼土を混入し、細砂を少量含む。非常に固い。

第3層（褐色土層）：褐色の粘土質シルト層であり、第1～2層に比べて粘性が弱い。住居の全域を覆う。地山の明褐色土を多量に含む。最下部で壁に接して堆積する層は地山の明褐色土とほぼ同質であり、にぶい褐色を呈する。壁剝落の影響のもとに堆積したものと思われる。

以上の堆積土はすべて自然堆積土層として認定される。

〔壁〕　西壁および南壁の一部は削平をうけており遺存は良くない。立ちあがりは比較的きつく、現存する壁高は東壁で23cm、西壁は0～1cm、南壁12cm、北壁16cmとなる。壁際は柔らかくなっているが周溝とはならない。その他の壁に伴う施設も検出されていない。



層位	層No	土　色	土　性	そ の 他
第1層	1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質粘土	地土の細粒、木炭粒を少量含む
第2層	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	地土粒、地山粒、細砂を含む
第3層	3	褐　色(7.5YR5/4)	シルト質粘土	地山粒を多く含む
	4	褐　色(7.5YR5/4)	シルト質粘土	地山粒を多量に含む
P 9	5	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質粘土	
P 10	6	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	
	7	褐　色(7.5YR5/4)	シルト質粘土	

	層No	土　色	土　性	そ の 他
P 1				撹乱層（本柱？）
P 2	1			撹乱層（溝）
	2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質粘土	
P 3	1	明褐色＋暗褐色	シルト質粘土	固化している
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	べとべとしている
P 4		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	
P 5		明褐色＋暗褐色	シルト質粘土	
P 6		黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質粘土	
P 7	1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト質粘土	
	2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質粘土	
P 8		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	
P 11		暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	
P 12	1			撹乱層（溝）
	2			撹乱層（本柱？）

	層No	土　色	土　性	そ の 他
カマド	1	橙　色(5YR6/6)	シ ル ト	部分的に明褐色を呈す、地土
	2	橙　色(2.5YR5/6)	シ ル ト	地土
	3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	埋戻部、べとべとしている
	4	赤褐色(2.5YR5/6)	シ ル ト	焼い地土
	5	明褐色＋暗褐色	シルト質粘土	焼の植土
	6	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	固化している
	7			住居内廃棄土層No 2
	8	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	明褐色土をブロック状に含む
	9	明褐色＋暗褐色	シルト質粘土	固化している

第7図　GB03 住　居　跡

〔床面〕　床面は壁際を除き非常に固い面をなしており、堆積土と肌わかれ現象が認められる。全体的に平坦な面をなしているが、中央部付近が若干高くなっている。東辺の北寄りにはカマドが設置されており、床面全体には貯蔵穴状ピット・柱穴等を含めて12個のピットが検出されている。西側の一部分は後世の溝・土壙によって破壊をうけている。

床面下部の掘り方等は確認できなかった。

〔柱穴〕　床面上に検出されたピットは合計12個である。これらのピットを分類すると、住居の廃絶後埋ったもの(P_1・P_{12})、住居廃絶以前に埋め戻されているもの(P_3・P_5)、住居の廃絶後埋ったもの(P_2・P_4・P_6・P_7・P_8・P_9・P_{10}・P_{11})に分けられる。住居廃絶後に埋ったもののなかでP_7は比較的大形であり、貯蔵穴状のピットと思われる。残る7個のピットのうち住穴と想定できるものにはP_2・P_4・P_9・P_{11}がある。しかし、P_4は深さが19cmとなり他の3個のピットに比べて浅い。もしP_4が住穴となれば、それらを結んだ線はやや歪んではいるものの方形に近い四角形を示す。

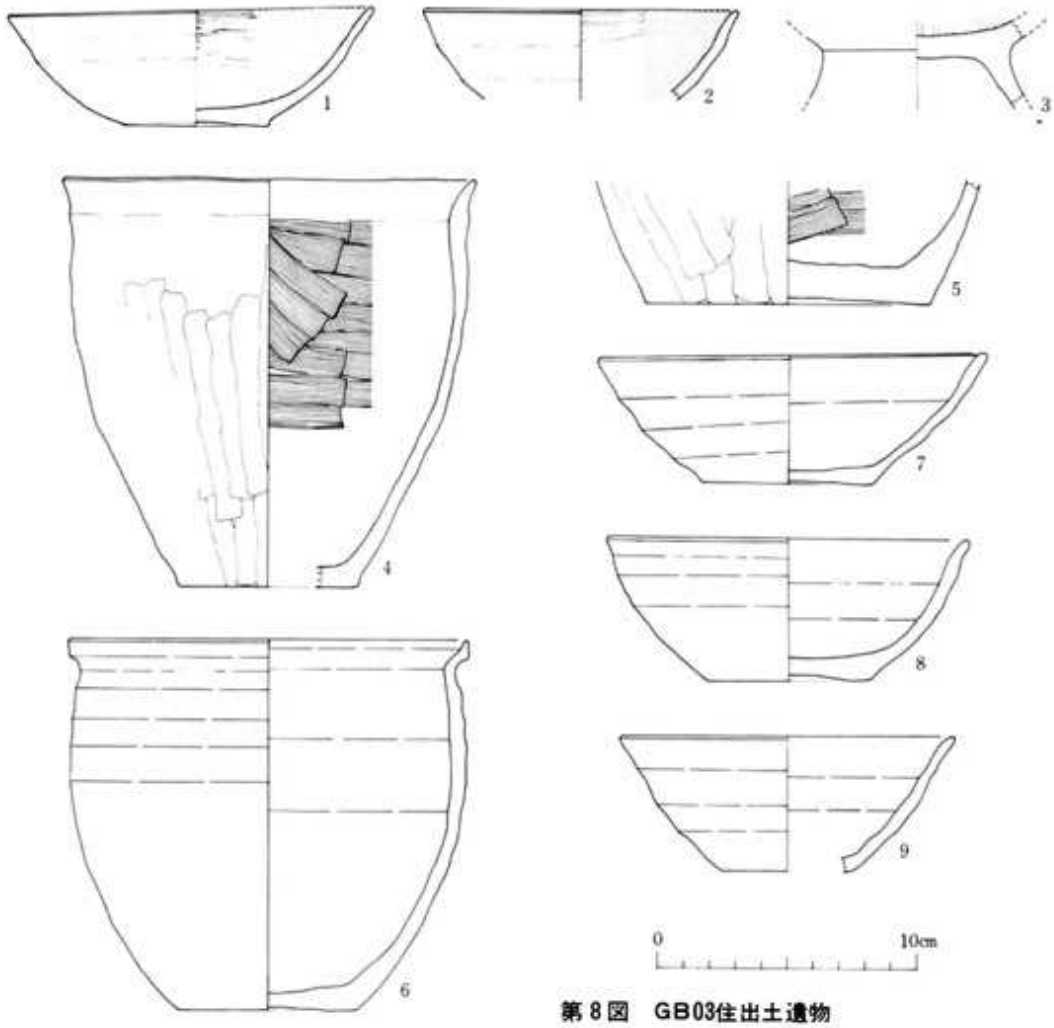
〔カマド〕　カマドは東壁の北寄りに構築されており、主軸方向はN－83°30′－Eとなる。付設部分の床面は若干掘りくぼめ、壁は半円形にえぐり込んでいる。燃焼部は76×51cmの範囲で浅い皿状の落ち込みになっている。中央部やや北寄りの個所には石を使って支脚を設けており、露出部の高さは12cmとなる。焼土は燃焼部全域に分布し、その厚さは2～3cmとなる。焚口から支脚の間がよく焼けている。袖やおおいは、明褐色のシルト質粘土を素材にし、焚口部を残して三方向を取り囲むようにして作られる。煙道部は平面的には確認できなかった。しかし、断面観察によれば、壁をえぐり取った部分に明褐色のシルト質粘土を傾斜させて貼りこみ、間層を作って煙道部としている。煙出部は検出されていない。

〔貯蔵穴〕　貯蔵穴と思われるピットにはP_3・P_5・P_7がある。P_3の堆積土は2層に大別される。上層は明褐色土と暗褐色土との混合土で、遺物は含まない。上面は非常に固くたたきしめられている。下層は暗褐色の粘土で灰を多く含みベトベトしている。さらに、焼土・木炭片・土器片を混入する。カマドの廃棄物の堆積層であろう。P_5は単層でP_3の土層とほぼ共通しているが、上面を固化させていない。P_7が住居の廃絶時に使用されていた貯蔵穴と思われる。堆積土は2層に細分され、上層は暗褐色土で焼土・木炭片を少量混える。下層は焼土・木炭片を多量に含む黒褐色土層で、地山の明褐色土が粒状混入する。

〔出土遺物〕　床面上のほぼ全域に出土しているがその絶対量は少ない。P_3とP_7とが比較的出土量が多い。

坏

坏には、土師器として類別され内面にヘラミガキ等の調整を施して黒色処理するもの(A類)と色調が黄橙色・橙色などを呈し、比較的胎土が粗で、内外面とも調整を加えないもの(C類)



第８図　GB03住出土遺物

とがある。

A類：完全に器形を知り得るものは１個体のみである。第８図１は体部から口縁部までやや丸味をもって外傾し、底部に右回転糸切り痕をそのまま残す。器面調整は外面がロクロナデで、内面は上半が横ヘラミガキ、下半が放射状のヘラミガキで調整している。内面は黒色処理されている。第８図２は口縁部～体部上半の破片で底部を欠く。ふくらみをもって立ちあがる体部をもち、相対的に器高が高い。器面調整は第８図１と同様である。

底部に高台の付くのも破片で１個体出土している（第８図３）。体部および高台の一部を欠く。内面には放射状のヘラミガキ痕がみられる。底部の切り離し手法は、高台取り付けに伴うロクロナデのため不明である。

C類：図示可能なものとして３個体ある。第８図７は口縁部の歪みが大きく、実際の口径は

もう少し小さい。第８図８とともに体部から口縁部にいたる形態はややふくらみをもって立ちあがる。第８図９は体部が直線的に立ちあがるもので口径に比して器高が高い。３点ともロクロによる整形痕以外は認められない。

甕

甕はすべてＡ類（土師器）に属する。

ロクロを使用していないものと、使用しているものとがある。第８図５は大形のもので底部のみの破片である。ロクロは使用していない。器面調整は体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデとなる。底部の外面にはヘラケズリ痕、内面には指頭圧痕がみられる。第８図４はロクロを使用しない小形のものである。口縁部はほぼ直立し、頸部に体部との明瞭な区画を持たない。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデとなる。底部は外面にヘラケズリ痕を残すが、内面は不明である。第８図６はロクロ成形による小形の甕である。口縁部は短く外反し、口唇部は上方に強くひきだしている。器面調整は内外面ともロクロナデのみである。底部には右回転糸切り痕を残す。

GD50住居跡（第９図）

〔遺構確認面〕　Ⅱa層の褐色シルト質粘土層を５～６cm掘り下げて遺構の存在を確認した。堆積土断面図によれば遺構の検出面はⅡa層上面である。

〔保存状況〕　りんごの木による攪乱、畑作利用にかかわる溝状の探掘、および東北本線の複線工事による削平等のためかなり破壊をうけている。

〔平面形・長軸方向〕　東西にやや長い長方形となる。長軸方向はＮ－88°30′－Ｗである。

〔規模〕　東西（短軸）方向2.65m、南北（長軸）方向2.90mとなり、床面積は約6.75㎡である。本調査で発見された住居跡のなかで最も小規模のものである。

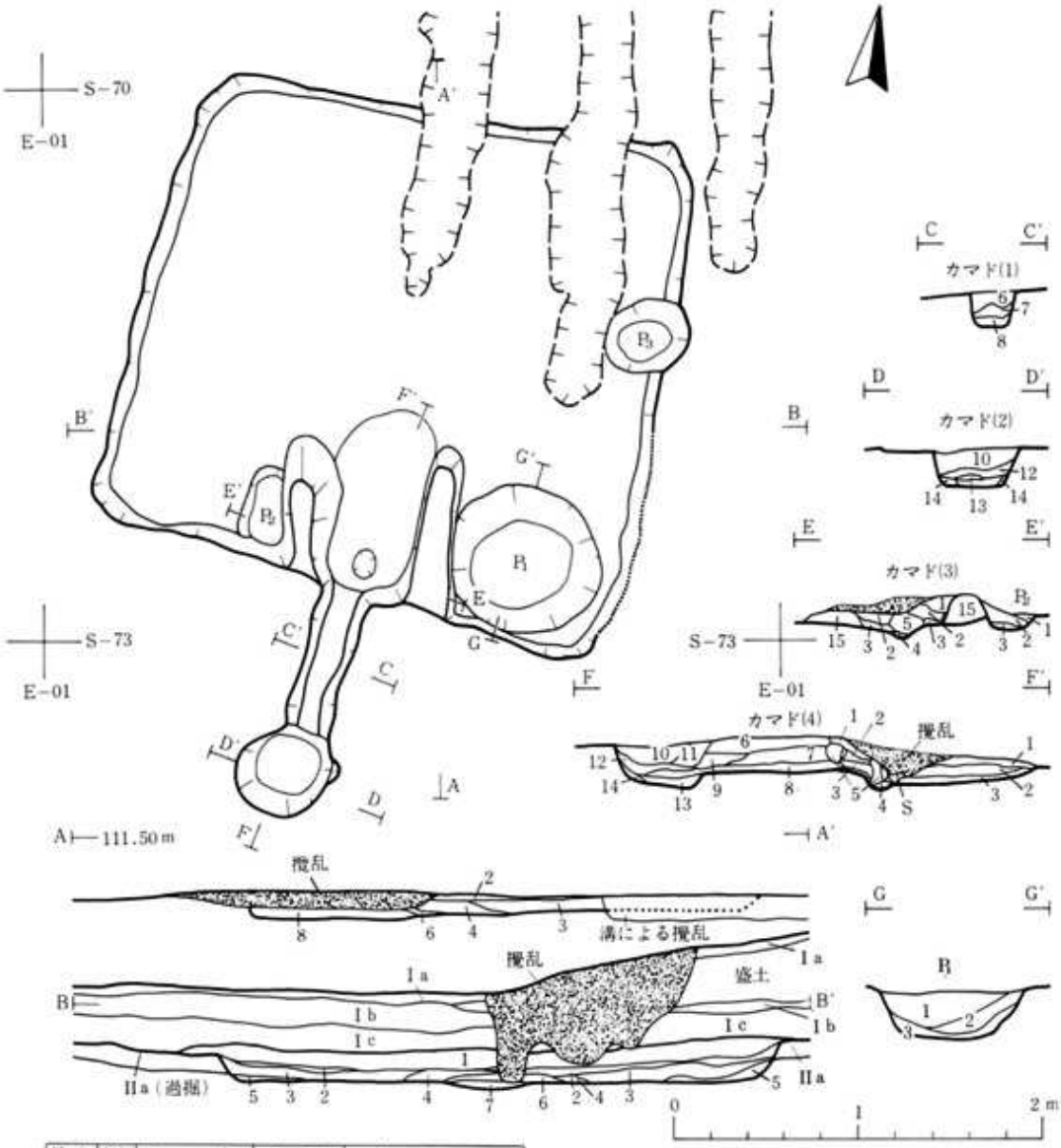
〔堆積土〕　住居内堆積土は基本的には以下の２層に大別される。

第１層（黒褐色土層）：黒褐色を呈するシルト質粘土層で住居の上部に厚く堆積する。緻密で比較的固い。混入物はみられない。

第２層（暗褐色土層）：暗褐色を呈するシルト質粘土層で住居の全域に堆積する。焼土・木炭片・土器を混入する。地山の明褐色土も粒状に含まれ、壁際にはこれが比較的厚く堆積する。壁の剝落に伴うものであろう。

〔壁〕　立ちあがり角度は緩やかである。遺存状態は悪く、所々に破壊をうけている。現存する壁高は東壁が６cm、西壁で12cm、南壁８cm、北壁７cmとなる。

〔床面〕　床面上には凸凹がみられずほぼ平坦であるが、中央部および南東コーナー付近が幾分低くなっている。床面は固くたたきしめられている。南辺・中央部にはカマドが設置されて



第9図　GD50住居跡

層位	層No	土色	土性	その他
第1層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	
	2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	密度が疎、焼土の細粒を含む
第2層	3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	焼土粒、木炭粒を含む
	4	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	焼土粒、木炭粒を多く含む
	5	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土	地山粒を多く含む
	6			カマド　層No.1と同じ
	7			カマド　層No.3と同じ
	8			カマド　層No.15と同じ

	層No	土色	土性	その他
P1	1	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト質粘土	焼土の細粒を少量含む
	2	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	
	3	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土	焼土粒、灰を多く含む
P2	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	
	2	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	
	3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	焼土粒、木炭粒を含む

	層No	土色	土性	その他
カマド	1	褐　色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	焼土粒を含む
	2	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	焼土
	3	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土
	4	暗赤褐色(5YR3/3)	粘土質シルト	密度が疎
	6	褐　色(7.5YR4/6)	シルト質粘土	焼土粒を含む
	7	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土
	8	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト質粘土	焼土(ブロック状)、灰を含む
	5			撹乱（木根？）
	9	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	7より焼きが弱い焼土
	10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	焼土の細粒、地山粒を含む
	11	褐　色(7.5YR4/6)	シルト質粘土	地山粒を多く含む
	12	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	焼土粒、灰を含む
	13	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土	地山粒を含む
	14	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	地山のブロック
	15	明褐色(7.5YR5/6)	シルト質粘土	袖の積土

おり、その両脇には貯蔵穴状のピットがある。

床面下の掘り方等は確認されていない。

〔柱穴〕　床面上には3個のピットが検出されている。P_1とP_2は貯蔵穴と思われ、P_3は住居廃絶後に掘り込まれたものである。竪穴の外部をも含めて、柱穴とすることのできるピットは検出されていない。

〔貯蔵穴〕　貯蔵穴状ピットとしてはP_1とP_2がある。P_1はカマド東側に設けられ、その堆積土は3層に分けられる。上層は暗褐色のシルト質粘土層で住居堆積土の第2層に類似している。少量の焼土粒を含むほかには混入物はみられない。中層は地山の明褐色土を基本とする層で、壁の崩壊に伴う堆積土であろう。下層は住居廃絶以前に堆積したものと思われる褐色のシルト質粘土層で多量の焼土・土器片を混入する。灰も含むものと思われ粘性が強い。P_2は2層に分けられ、上層はカマドの崩壊土と思われる明褐色土と焼土の混合土となる。下層は焼土・木炭片を含む黒褐色土で粘性が強い。P_1・P_2とも住居が廃絶される前には埋まりきってはおらず、使用されていた可能性が強い。

〔カマド〕　南辺の中央部に設置されており、主軸方向はN－8°－Eとなる。燃焼部は120×45cmの範囲で浅い皿状の落ち込みになっている。煙道より15cmほどの場所に支脚を安定させるためのものと思われる小ピットがある。ピットに近接して石が発見されているが、攪乱をうけており支脚石となるかは不明である。焼土の厚さは5cm前後となり、焚口から支脚までの間が良く焼けている。袖は削平のため遺存状態は良くない。素材は地山の明褐色シルト質粘土であるが、調査上のミスから立ち割りを行っておらず、構築法は明確でない。煙道部は燃焼部底面より緩く立ちあがり、約6cmの比高をもつ。煙道は80cmの長さでほぼ水平に進み、煙出部に接続する。煙出部は56×46cmの円形を呈し、煙道端より約6cmほど掘り下げてある。

〔出土遺物〕　カマドの周囲に集中する。出土層位は床面直上および第2層内である。

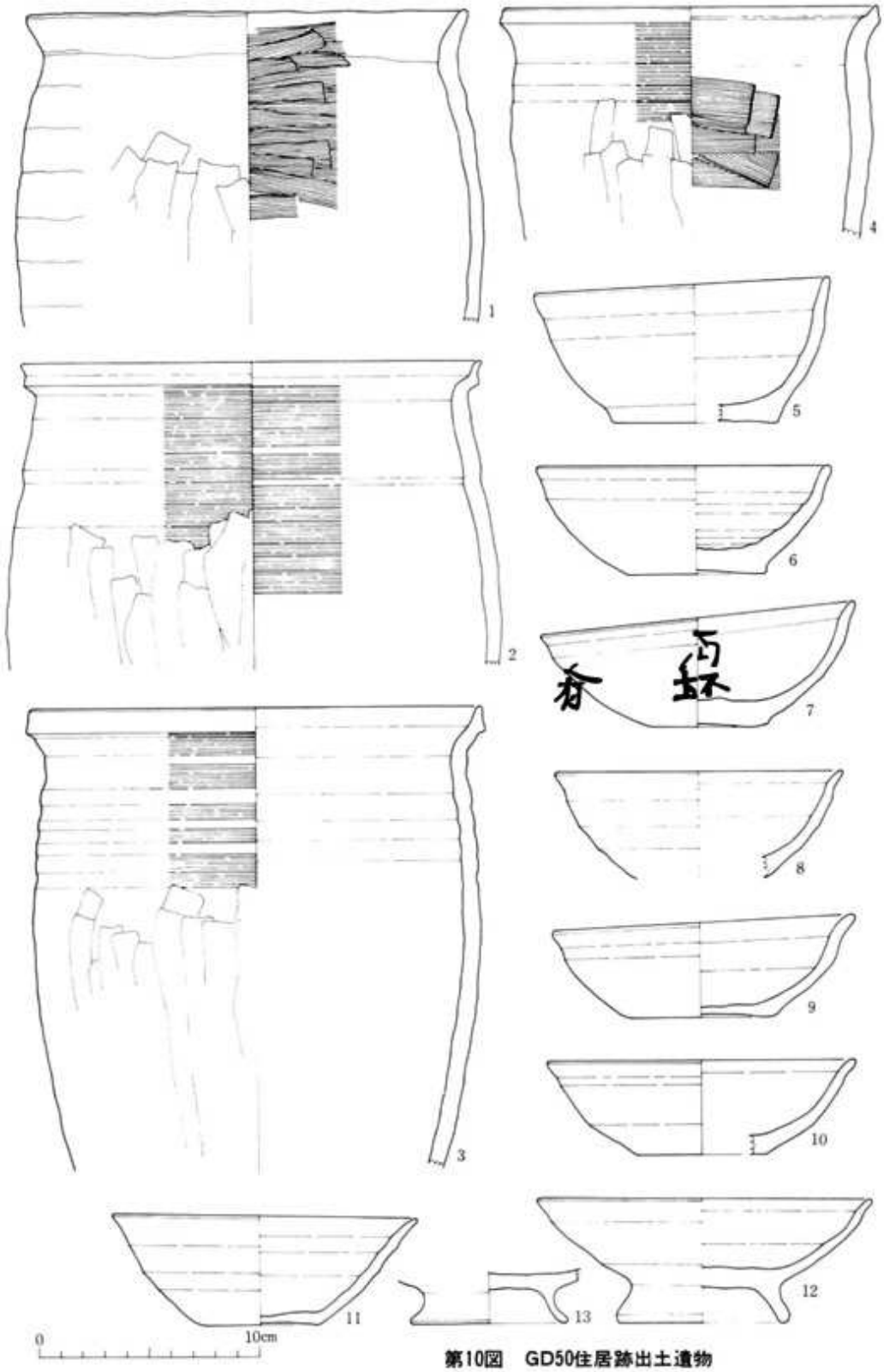
坏

坏は、図示したものすべてがC類として一括される。色調は黄橙色・橙色などを呈し、B類(典型的な須恵器)に比べて胎土が粗で焼成が良くない。内外面とも調整は加えられていない。

第10図5：口径に比べ器高の高いもので、形態上からは坏よりも椀に近い。焼成による歪みが大きい。

第10図6～8：いずれも体部はやや丸味をもって立ちあがるが、口縁部は外反させるもの(第10図7･8)とほぼなめらかに移行するもの(第10図6)とがある。第10図7と8には墨書がみられ、7は「酒坏(さかずき)」と「肴(さかな)」と書かれている。8は摩滅のため判読できない。

第10図9・10：体部がやや丸味をもって外傾し、口縁部はやや外反するものである。口径に比して器高が低い。



第10図　GD50住居跡出土遺物

第10図11：体部から口縁部まで直線的に外傾する。底径に比べて器高が高い。他の土器に比べて色調が明るく、器肉も薄い。

第10図12・13：高台の付くもので2個体出土している。第10図12は体部から口縁部までやや丸味をもって外傾するもので、色調・器肉の厚さは第10図11と共通している。第10図13は高台部分しか残っていない。

以上の坏C類の器面調整は共通している。内外面ともロクロナデのみで仕上げており、第10図13を除いて底部に右回転糸切り痕を残している。第10図13は高台取付に伴うロクロナデのため、底部の切り離し手法は不明である。

甕

甕はすべてのA類（土師器）として類別される。

ロクロを使用していないもの（第10図1）と使用しているもの（第10図2～4）とがある。後者は、長胴形を呈する大形のものと小形のものとがある。

第10図1：体部に最大径をもつ長胴形の甕である。体部下半から底部を欠く。口縁部は短く外反するが、その傾きは弱い。器面は口縁部が横ナデで、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで整えている。

第10図2：体部中央付近に最大径をもつもので、1と近似した器形をもつ。口縁部は極端に短く外反し、口唇部は強く上方へ外反ぎみに挽きだす。器面調整は口唇部を除いて、口縁部と体部上半は内外面とも刷毛目状ロクロナデとなり、体部下半は外面にヘラケズリを施している。

第10図3：口縁部に最大径をもつ長胴形の甕である。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出している。体部のふくらみは少ない。器面調整は口縁部から体部上半にかけては口唇部を除き、外面に刷毛目状ロクロナデ痕を残し、体部下半外面にはヘラケズリを施している。内面はすべてロクロナデとなる。

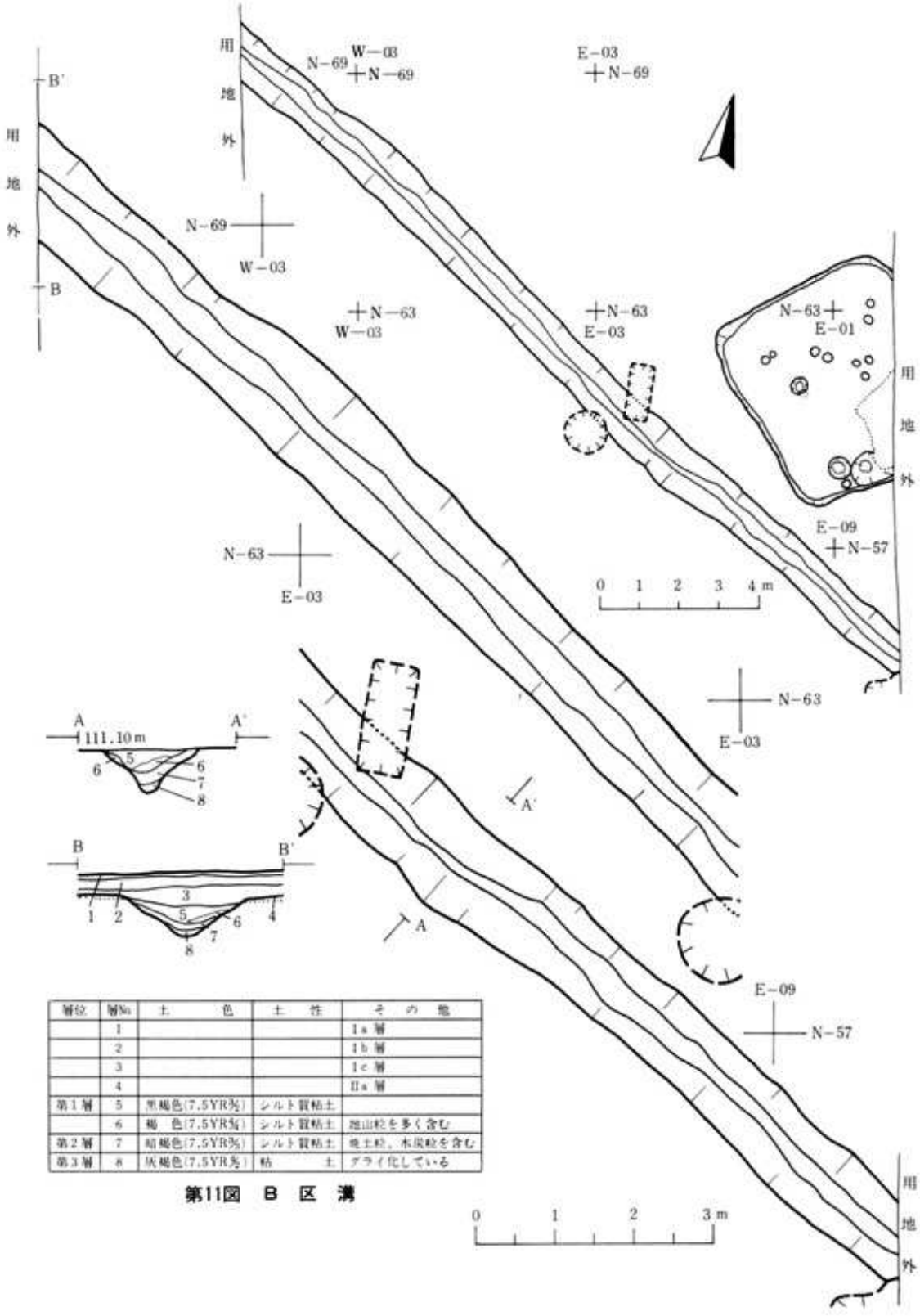
第10図4：口縁部に最大径をもつ小型の甕である。口縁部は短く外反し、口唇部は上方へ挽き出す。頸部のくびれはほとんどみられず、体部から口縁部になだらかに移行する。器面調整は口縁部が口唇部を除いて刷毛目状ロクロナデ、体部外面が刷毛目状ロクロナデとヘラケズリ、内面がヘラナデとなっている。

(2) 溝

B区溝（第11図）

〔**位置**〕 BG06グリッドよりCB59グリッドまで、斜めに横断する。範囲は不明であるが調査区域外まで延びることは確実である。

〔**確認面**〕 確認面はⅡa層上面である。



層位	層No	土　色	土　性	その他
	1			1a 層
	2			1b 層
	3			1c 層
	4			IIa 層
第1層	5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	
	6	褐　色(7.5YR5/4)	シルト質粘土	地山粒を多く含む
第2層	7	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	焼土粒，木炭粒を含む
第3層	8	灰褐色(7.5YR5/2)	粘　土	グライ化している

第11図　B 区 溝

〔重複〕　調査範囲の中央部および東端部が、抜根による土壙や後世の掘り込みによって切られている。

〔形態〕　溝の断面形は立ちあがり角度の緩い歪んだU字形を呈する。中端付近にややフラットな部分を有する。

〔大きさ〕　全長は不明である。調査範囲内に限れば22.5mとなる。幅は上端で約90cm、下端で約20cmとなる。深さは41～52cmとなり、絶対高では東側に高く、西側に低い。

〔堆積土〕　遺構内堆積土は3層に大別される。

第1層(黒褐色土層)：シルト質粘土。地山の明褐色土を粒～ブロック状に混入する。密度は比較的疎で軟かい。

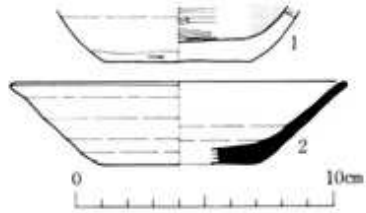
第2層(暗褐色土層)：シルト質粘土。焼土・木炭等をかなり包含する。地山の明褐色土が粉状混入する。土器はこの層から出土するものが多い。

第3層(灰褐色土層)：粘土。グライ化した土で砂分を含む。この層は低くなった個所に堆積しており、部分的にしか確認されていない。

〔出土遺物〕　第1層および第2層より出土する。縄文土器も数片出土するが土師器・須恵器が大部分を占める。器種には坏と甕がある。すべて細片であり、図示可能のものは少ない。

第12図1：A類の坏であり、口縁部から体部上半を欠く。内面にはヘラミガキを施し、黒色処理を加えている。体部外面にはロクロナデの痕跡をそのまま残すが、下端より底部全面にかけて手持ちのヘラケズリで調整している。

第12図2：B類の坏である。小破片の復元であるため絶対的なものではない。底部の切り離し手法は回転ヘラ切りによっている。底部の周縁には手持ちのヘラケズリが施されている。



第12図　B区溝出土遺物

第1表　B区溝出土土器破片集計表

器形	種別	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	破片数	備考
坏	A類	底部	糸切り→ヘラケズリ	ヘラミガキ	1	第12図—1
	B類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	2	
		底部	ヘラ切り→ヘラケズリ	ロクロナデ	2	このうちの1点が第12図—2
甕	AⅡ類	体部	ヘラケズリ	ロクロナデ	2	
			ヘラケズリ	ナデ	2	
			不明	ロクロナデ	1	
			不明	不明	1	
	B類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	2	
		体部	ロクロナデ	ロクロナデ	2	
			平行	蓮ぐう紋あて工具	2	
			格子	平行	1	
			不明	ナデ	1	
深鉢	縄文	体部	RL斜縄文	ミガキ	3	細片のため所属時期は不明

図示遺物観察表(1)

第2表　BJ56住居跡坏観察表

No.	図版番号	分類記号	出土状況	遺存	成形	底部の切り離し	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量測定値(cm)	写真番号
1	第6図5	AI	第二次住第4層(東部)	1/4	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい橙色 内面 黒色処理	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	糸切り痕	ヘラミガキ	口径〔16.8〕 底径〔7.4〕 器高 6.8	図版7-3
2	第6図7	BI	第二次住第2層(東部)	1/3	ロクロ整形	ヘラ切り	外面 灰白色、一部灰色 内面 灰色	砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り↓ヘラケズリ	ロクロナデ	口径〔12.8〕 底径 6.4 器高 4.0	図版6-3
3	第6図6	BI	第二次住第3層(南東部)	1/3	ロクロ整形	ヘラ切り	外面 灰白色、黄灰色 内面 灰色	砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り↓ヘラケズリ	ロクロナデ	口径〔13.2〕 底径〔6.3〕 器高 3.5	図版6-4
4	第6図9	BII	第二次住第3層(南東部)	3/4	ロクロ整形	ヘラ切り	外面 灰色、口縁部オリーブ黒 内面 灰色、口縁部オリーブ黒	砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り痕	ロクロナデ	口径 13.0 底径 6.0 器高 3.8	図版5-5
5	第6図10	BII	第二次住第4層(北東部)	1/3	ロクロ整形	ヘラ切り	外面 灰白色 内面 にぶい黄橙色	砂粒を若干含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り痕	ロクロナデ	口径〔13.4〕 底径〔6.6〕 器高 3.9	図版5-4
6	第6図8	BII	第二次住第3層(南部)	ほぼ完形	ロクロ整形	ヘラ切り	外面 淡赤橙色、淡橙色、にぶい黄橙色 内面 淡赤橙色、灰黄色	砂粒がやや多い	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り痕	ロクロナデ	口径 14.2 底径 7.1 器高 4.4	図版5-3

第3表　BJ56住居跡甕観察表

No.	図版番号	分類記号	出土状況	遺存	底部の切り離し	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量測定値(cm)	写真番号
1	第6図11	AII-1(1)1	第二次住第3c層(北東部)	1/4 体部下半、底部を欠く	不明	外面 にぶい橙色、暗赤褐色 内面 灰色、灰黄褐色、浅黄橙色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	刷毛目状ロクロナデ	ヘラケズリ				器高〔13.5〕 口径〔23.0〕 頸径〔19.9〕 胴径〔21.0〕	図版7-2
2	第6図12	AII-1(1)1	第二次住第3層(東部)	1/3 体部下半、底部を欠く	不明	外面 にぶい橙色、にぶい黄橙色 内面 にぶい黄橙色	砂粒が多い	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	刷毛目状ロクロナデ	ヘラケズリ				器高〔29.0〕 口径〔26.7〕 頸径〔24.0〕 胴径〔28.0〕	図版7-1
3	第6図1	B1	第二次住第3層(南部)	ほぼ完形 底部の一部を欠く	(丸底)	外面 灰色 内面 灰色	砂粒を含む	良	ロクロナデ	ナデ	格子	青海波	格子	同心円	格子	同心円	器高〔39.2〕 口径 26.3 頸径 19.0 胴径〔35.3〕	図版6-1
4	第6図2	B1	第二次住第3層(南部)	完形	(丸底)	外面 灰色 内面 灰色	砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	平行	蓮ぐう紋	平行	蓮ぐう紋↓ナデ	平行	蓮ぐう紋↓ナデ	器高 46.0 口径 24.6 頸径 17.9 胴径 44.1	図版5-1
5	第6図3	BI	第二次住第3層(南部)	3/4 口縁部を欠く	(丸底)	外面 灰色、一部明黄褐色 内面 灰色	砂粒を含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	平行	蓮ぐう紋	平行	平行	平行	平行	器高〔42.0〕 口径 不明 頸径〔20.1〕 胴径 41.1	図版6-2
6	第6図4	B2	第二次住第3層(南部)	1/2 口縁部、体部上半を欠く	不明	外面 灰色 内面 灰色	砂粒を含む	良			平行	青海波	平行↓ヘラケズリ	青海波↓ナデ	ヘラケズリ	ナデ	器高〔27.9〕 底径 16.7 口径 不明 頸径 不明 胴径 39.3	図版5-2

法量測定値の( )内の数字は現存値、〔 〕内の数字は推定値を表わす

図示遺物観察表(2)

第4表　GB03住居跡坏観察表

No.	図版番号	分類記号	出土状況	遺存	成形	底部の切り離し	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量測定値(cm)	写真番号
1	第8図1	A2	ピット7埋土	3/4	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい橙色、褐灰色、口縁部黒色 内面 黒色処理	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	糸切り痕	ヘラミガキ	口径 14.2 底径 5.6 器高 4.5	図版7-12
2	第8図2	A	ピット7埋土	1/4	ロクロ整形	不明	外面 明褐灰色、口縁部黒色 内面 黒色処理	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ			口径〔12.2〕 器高(3.5)	
3	第8図3	A3	第3層(中央部)	1/8	ロクロ整形	不明	外面 灰褐色、にぶい黄橙色 内面 黒色処理	砂粒を若干含む	普通					ロクロナデ	ヘラミガキ	ロクロナデ	ヘラミガキ	器高(3.3) 高台高(2.3)	
4	第8図7	C2	第3層(東部)	3/4	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	砂粒を含む	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径 15.1 底径 6.5 器高 5.0	図版7-15
5	第8図8	C2	ピット3埋土	3/4	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい橙色 内面 浅黄橙色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径 14.1 底径 6.3 器高 5.3	図版7-13
6	第8図9	C4	第3層(東部)	1/4	ロクロ整形	不明	外面 橙色、にぶい橙色 内面 にぶい橙色、にぶい褐色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径〔13.0〕 底径〔5.0〕 器高 5.2	図版7-14

第5表　GB03住居跡甕観察表

No.	図版番号	分類記号	出土状況	遺存	底部の切り離し	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量測定値(cm)	写真番号
1	第8図4	AⅠ 2(1)Ⅱ	第3層(カマド北側)	1/4 各部位とも一部分のみを残す。	不明	外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	砂粒が多い	やや不良	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	不明	器高 15.8 底径(6.9) 口径〔16.0〕頸径〔15.5〕 胴径〔15.5〕	図版7-10
2	第8図6	AⅡ 1(1)Ⅱ	ピット3埋土	1/2 各部位を半截した形となる	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい黄橙色、一部褐灰色	砂粒が多い	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	器高 14.0 底径 6.9 口径〔15.5〕頸径〔14.5〕 胴径〔15.4〕	図版7-11

法量測定値の(　)内の数字は現存値、〔　〕内の数字は推定値を表わす

図示遺物観察表(3)

第6表　GD50住居跡坏観察表

No.	図版番号	分類記号	出土状況	遺存	成形	底部の切り離し	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量測定値(cm)	備考	写真番号
1	第10図5	C1	第2層(カマド焚口)	¼	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 淡橙色 内面 淡黄橙色	砂粒が多い	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径(13.5) 底径(7.4) 器高 6.3		図版8-5
2	第10図6	C2	第2層(中央部)	¼	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい黄橙色 一部明褐灰色 内面 にぶい黄橙色	砂粒が多い	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径(13.4) 底径 6.2 器高 4.9		図版8-6
3	第10図7	C2	第2層(中央部)	完形	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 浅黄橙色、一部橙色 内面 浅黄橙色 一部にぶい橙色	砂粒が多い	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径 14.0 底径 5.6 器高 5.8	「酒」と「香」の墨書有り	図版8-8
4	第10図8	C2	第2層(カマド付近)	⅓	ロクロ整形	不明	外面 浅黄橙色、一部橙色 内面 にぶい橙色 一部にぶい褐色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			口径(13.0) 器高(4.9)	墨書有り 判読不明	図版8-7
5	第10図9	C3	ピット1埋土	ほぼ完形	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい橙色、浅黄橙色 内面 浅黄橙色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径 13.8 底径 6.6 器高 4.3		図版8-9
6	第10図10	C3	第2層(南東部)	¼	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい褐色、浅黄橙色 内面 浅黄橙色 一部にぶい褐色	砂粒が多い	やや不良	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径(14.0) 底径(6.8) 器高 4.5		図版8-10
7	第10図11	C4	ピット1埋土	¼	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 橙色、一部赤橙色 内面 橙色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕	ロクロナデ	口径(13.9) 底径 5.2 器高 5.0		図版8-11
8	第10図12	C5	ピット1埋土	⅓	ロクロ整形	ロクロ右回転糸切り	外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	砂粒を含む	普通	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り痕↓ロクロナデ	ロクロナデ	口径15.2 高台高1.7 底径 6.7 高台径7.8 器高15.2		図版8-12
9	第10図13	C5	ピット2埋土	⅓	ロクロ整形	不明	外面 橙色、淡橙色 内面 にぶい橙色	砂粒を含む	普通					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	器高(2.4) 高台高1.4 高台径7.2	底部、脚部のみ有り	

第7表　GD50住居跡甕観察表

No.	図版番号	分類記号	出土状況	遺存	底部の切り離し	色調	胎土	焼成	器面調整 口縁部 外	口縁部 内	体部上半 外	体部上半 内	体部下半 外	体部下半 内	底部 外	底部 内	法量測定値(cm)	写真番号
1	第10図1	AⅠ1(2)i	ピット1埋土	¼ 体部下半、底部を欠く	不明	外面 橙色、にぶい橙色 内面 浅黄橙色、口縁部にぶい橙色	砂粒が多い	やや不良	横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			器高(14.2) 口径(20.0) 頸径(18.4) 胴径(21.1)	図版8-1
2	第10図3	AⅡ2(1)i	ピット2カマド 焚口	¼	不明	外面 浅黄橙色、一部にぶい橙色 内面 浅黄橙色、にぶい黄褐色	砂粒が多い	やや不良	刷毛目状ロクロナデ	ロクロナデ	刷毛目状ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ			器高(21.0) 口径(20.7) 頸径(19.1) 胴径(20.3)	図版8-3
3	第10図4	AⅡ2(1)ii	第2層(カマドの北側)	¼	不明	外面 にぶい橙色 内面 にぶい褐色	砂粒が多い	普通	刷毛目状ロクロナデ	ロクロナデ	刷毛目状ロクロナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ			器高(10.5) 口径(17.2) 頸径(15.8) 胴径(16.4)	図版8-4
4	第10図2	AⅡ2(2)i	ピット2カマド	¼	不明	外面 にぶい黄橙色、にぶい橙色 灰黄褐色 内面 浅黄橙色、にぶい黄橙色	砂粒が多い	普通	刷毛目状ロクロナデ	刷毛目状ロクロナデ	刷毛目状ロクロナデ	刷毛目状ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ			器高(13.9) 口径(20.8) 頸径(19.6) 胴径(22.4)	図版8-2

法量測定値の( )内の数字は現存値、[ ]内の数字は推定値を表わす

第8表　BJ56住居跡破片集計表

器形	種別	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	個体数	破片数
坏	A類	口縁部	ロクロナデ	ヘラミガキ	1	1
		体部	ロクロナデ	不明		2
		底部	不明	不明	1	1
	B類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	6	6
		体部	ロクロナデ	ロクロナデ		5
		底部	糸切り	ロクロナデ	1	1
			ヘラ切り	ロクロナデ		2
	C類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1	1
		底部	糸切り	ロクロナデ		2
甕	AⅡ類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	7	8
		体部	ロクロナデ	ロクロナデ	1	2
			ロクロナデ	ナデ	1	1
			ロクロナデ	不明		9
			ヘラケズリ	ロクロナデ		15
			ヘラケズリ	ナデ	4	37
			ヘラケズリ	刷毛目	5	11
			ヘラケズリ	不明	4	30
			ヨコナデ	ナデ		2
			刷毛目	ナデ	1	1
			平行	ナデ		2
			平行	平行		3
			不明	ロクロナデ	1	5
			不明	ヨコナデ		6
			不明	不明	1	1
		底部	糸切り	ロクロナデ	2	3
			糸切り→ヘラケズリ	ロクロナデ	1	1
			不明	不明	3	3
	B類	体部	平行	平行	1	1
			平行	青海波		3
			格子	格子	1	1
			格子	青海波		2
			格子	蕨ぐう紋 あて工具	1	1
			ヘラケズリ	ナデ	1	1
			ヘラケズリ	不明	1	1
			ナデ	ナデ		2
			不明	ナデ	1	1
			不明	不明		2

注1．口縁部～底部および体部～底部の破片はすべて底部に入れてある。
2．図示遺物は集計から除外している。
3．個体数はあきらかに判別できるものだけを記入した。

第9表　GB03住居跡破片集計表

器形	種別	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	個体数	破片数
坏	A類	口縁部		ヘラミガキ	2	2
			ヘラミガキ	ヘラミガキ	1	1
		体部		ヘラミガキ		8
		底部	糸切り	不明	1	1
	C類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	5	6
		体部	ロクロナデ	ロクロナデ		2
甕	AⅠ類	口縁部	不明	不明	1	1
	AⅡ類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	2	2
		体部	ロクロナデ	ロクロナデ		3
			ヘラケズリ	ナデ	2	13
			ヘラケズリ	不明	2	10
			刷毛目	ロクロナデ	1	1
			不明	不明	1	1
		底部	不明	ロクロナデ→菊花状痕	2	2
	B類	体部	平行	不明	1	1
			格子	ナデ		3
			格子→ヘラケズリ	ナデ	1	1

第10表　GD50住居跡破片集計表

器形	種別	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	個体数	破片数
坏	A類	口縁部	ロクロナデ	不明	1	1
		体部	ロクロナデ	ヘラミガキ	1	1
			ロクロナデ	不明		2
		底部	糸切り	ヘラミガキ	1	1
	C類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	16	22
		体部	ロクロナデ	ロクロナデ		18
		底部	糸切り	ロクロナデ	1	1
		脚部	ロクロナデ	ロクロナデ	1	1
甕	AⅠ類	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	1	1
			ヨコナデ	ナデ	1	2
			不明	ヨコナデ	1	1
			不明	不明	1	1
		体部	ヘラケズリ	ナデ		5
			不明	不明		3
	AⅡ類	口縁部	不明	ヨコナデ	1	1
			不明	不明	2	2
		体部	ヘラケズリ	ロクロナデ		3
			ヘラケズリ	ナデ	1	60
			ヘラケズリ	不明	4	53
			不明	不明		3
	B類	体部	平行	同心円 あて工具	1	1
			格子	ナデ	1	9
			ナデ	ナデ	1	1

第11表　　グリッド出土土器破片集計表

器形	種別	グリッド名	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	破片数
坏	A類	BI－59	体部	不明	ヘラミガキ	1
		CB－06	底部		ヘラミガキ	1
		CB－53	体部	不明	ヘラミガキ	1
	B類	BJ－50	底部	ヘラ切り	ロクロナデ	1
		BJ－59	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		CA－53	底部	ヘラ切り	ロクロナデ	1
		DB－53	底部	ヘラ切り	ロクロナデ	1
	C類	BI－59	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		CB－53	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		GB－03	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		GC－50	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		GD－53	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		GE－50	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
甕	AⅡ類	BJ－59	体部	ヘラケズリ	不明	1
		CA－53	体部	ヘラケズリ	不明	1
				不明	不明	2
			底部	不明	ロクロナデ	1
		CB－53	体部	ヘラケズリ	不明	2
		CB－56	底部	不明	ロクロナデ	1
		GB－03	体部	不明	ロクロナデ	1
		GC－50	体部	ロクロナデ	不明	1
	B類	BI－03	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		BJ－50	体部	不明	格子	1
		BJ－53	体部	格子	平行→ナデ	1
		CA－59	体部	格子→ナデ	青海波	3
			体部	ヘラケズリ	ロクロナデ	1
		CB－53	体部	ロクロナデ	不明	1
		CB－56	体部	不明	蓮ぐう紋あて工具	1
		CD－53	体部	平行→ナデ	平行	1
		CF－50	体部	ロクロナデ	不明	1
		CG－50	体部	平行	蓮ぐう紋あて工具	1
		DH－53	体部	平行	不明	1
		EF－53	体部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
		GB－03	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	1
			体部	平行	不明	1
				格子	ナデ	1
		GC－50	体部	平行	ナデ	1
		GJ－56	体部	平行	格子	1

注1．口縁部～底部および体部～底部の破片はすべて底部に入れてある。
2．甕B類の破片のなかには壺と区別しにくいものも含まれている。
3．この集計表は平安時代の遺物のみを対象としているが、ほかに縄文時代の土器も破片で7片出土している。これは、前期に属するものと思われるものを1点含むが、その詳細は不明である。

4．考察

〔1〕 遺構

(1) 竪穴住居跡

今回の調査で3棟の住居跡が発見された。これらの住居跡の特徴を項目ごとに比較して若干の検討を加えてみたい。

〔平面形〕 平面形は3棟とも方形を基調としており、正方形に近いものと長方形になるものとがある。いずれも四隅が丸味をおびている。BJ56住は路線敷外にまたがるため完掘していないが、3方のコーナーは確認しており、それに基づいて推定した。

正方形：GB03住

長方形：BJ56住(第1次)・BJ56住(第2次)・GD50住

〔規模〕 各々規模は以下のようになる。いずれもが辺長・床面積とも異なり、類似性は認められない。

BJ56住(第1次)：4.92×4.41(m)　18.64㎡

BJ56住(第2次)：5.37×4.92(m)　24.42㎡

GB03住　　：3.88×3.66(m)　13.61㎡

GD50住　　：2.90×2.65(m)　6.75㎡

〔床面〕 床面の構築方法を検討すると、床面下に掘り方を有するものと地山をそのまま床面としているものとがある。

掘り方を有する住居跡：BJ56住(第1次)

掘り方をもたない住居跡：BJ56住(第2次)・GB03住・GD50住

ただし、BJ56住第2次床面は第1次床面を埋め戻して、床面を構築している。これは結果的に掘り方と同じ機能をもつものと想定される。

〔柱穴〕 柱穴を確認できたものと確認できなかったものとに分かれる。

柱穴を確認できた住居跡：BJ56住(第1次)・BJ56住(第2次)・GB03住

柱穴を確認できなかった住居跡：GD50住

〔カマド〕 カマドを確認できた住居跡には、GB03住とGD50住がある。ともに壁に接して作られ、前者は東壁に、後者は南壁に位置している。側壁の素材はともに地山のシルト質粘土である。

構造的に両者は異なる。GB03住は壁を半円形に掘り込んで主体部(燃焼部・袖部)を構築しており、「∩」字形を呈する。煙道部は斜め上方に急角度で立ちあがるものと思われ、平面的に

は確認できなかった。

GD50住は壁に袖をつくりつけて主体部を構築している。煙道部は壁を水平に掘り抜いて作られ、煙道部にはピットを持つ。全体の構造として普遍的なものとなっている。

第12表　　住居跡一覧

住居跡名称	平面形	規模(m)	床面構築法	柱穴	カマド					
					付設場所	方向	側壁素材	支脚	煙道の傾斜	煙出ピット部
BJ56住(第一次)	長方形	4.92×4.41 (18.64㎡)	床面下に掘り方あり	調査範囲に限り3本	不明					
BJ56住(第二次)	長方形	5.37×4.92 24.42㎡	床面下に掘り方と同様の機能をもつものあり	調査範囲に限り3本	不明					
GB03住	正方形	3.38×3.66 (13.61㎡)	床面下に掘り方なし	4本	東壁北寄	N−83°30′−E	粘土	有	↗(?)	無
GD50住	長方形	2.90×2.65 (6.75㎡)	床面下に掘り方なし	不明	南壁中央	N−8°−E	粘土	有(?)	→	有

(2)　溝

調査区域が限定されているため、その全容が明らかにはなっていない。したがって、その性格・機能等にまで言及することには無理が生じるが、若干の説明を加えてみたい。

溝の形態・規模・方向等は杉ノ上Ⅰ遺跡（本書所収）と極めて類似している。杉ノ上Ⅰ遺跡は本遺跡の立地する段丘と沢を挟んで北側に位置する中位段丘上に立地しており、望観可能の近接した距離にある。

堆積土の状況からみると、最下部にグライ化した層が認められるが、これは低くなった箇所に部分的に堆積しているもので、水が流れた痕跡とは言い難い。

遺物はすべて小破片で、主に第2層より出土する。溝の最下部より出土するものはなく、年代の決定資料を欠いている。出土土器は、縄文時代の深鉢の破片3点を除いて歴史時代のものに限られる。器種には坏と甕があり、それぞれA類とB類に分けられる（分類基準は次ページ参照）。坏A類は再調整を加えたもので、体部下端より底部全面に手持ちヘラケズリを施している。甕A類は体部下半のものに限られ、すべてロクロを使用している。判別不能のものを除いて、外面にはヘラケズリを施している。坏B類の底部片は2点出土しており、ともにヘラ切りで切り離した後に手持ちのヘラケズリを加えている。甕B類は大形のもので、体部外面に格子もしくは平行の叩き目痕をもち、内面に蓮ぐう紋あて工具ないし平行叩きの痕跡をもつ。

なお、縄文土器は細片のため所属時期が不明である。

以上の内容をもつ出土土器は、隣接するBJ56住のそれとほぼ共通している。出土量が少なく、

すべて細片であること、さらには出土層位が上層に限られる点に問題はあるが、BJ56住が営なまれていた段階には、すでに溝が掘り込まれていた可能性が強い。

溝の機能に関しては不明である。ただ、城郭等の空掘とはなりえず、何らかの区画を律するためのものと思われる。集落の外郭・耕地の区割等が考えられるが想像の域を出ない。

〔2〕 出土土器の分類

(1) 縄文時代の土器

表土から7片、溝から3片の合計10片が出土している。すべて摩滅した体部の細片であり、特徴的なものがないため所属時期等の具体的なことは不明である。

(2) 歴史時代の土器

分類の都合上、ここでは住居跡出土の図示可能遺物をとりあげて述べる。なお、表土出土の破片、および住居跡出土の細片についてはそれぞれ表にしてある(第8～11表)。

坏

坏はすべてロクロを使用して製作されている。ロクロから切り離した後の調整技法・焼成技法等の違いにより以下の3種に分類される。

A類―内面にヘラミガキ等の調整を加え、黒色処理するもの。酸化焔焼成

B類―色調がくすべ色を呈し、胎土が密で焼成が良好なもの。還元焔焼成

C類―色調が橙色・黄橙色などで、B類と比べて胎土が粗で焼成があまり良くなく、内外面ともロクロナデ以外の調整を施さないもの。酸化焔焼成

〈坏A類〉 いわゆる土師器であり、外面調整は全個体ともロクロナデのみで、再調整は加えられない。底部には高台が付くもの以外ロクロ右回転糸切り痕をそのまま残す。器形の特徴から以下の3つに細分される。

A1類―体部から口縁部までかなりふくらみをもって立ちあがり、器高の高い大形のもの。

A2類―体部から口縁部までやや丸味をもって外傾するもの。

A3類―高台の付くもの。

〈坏B類〉 いわゆる須恵器であり、底部の切り離しはヘラ切り手法による。切り離し後の調整の有無で2分される。

BⅠ類―底部をヘラ切りで切り離した後、底部全面にヘラケズリを施すもの。

BⅡ類―底部をヘラ切りで切り離した後、再調整を加えないもの。

〈坏C類〉 本報告では赤焼き土器として一括する。器形の特徴から以下の5つに細分される。

C1類―体部から口縁部まで直線的に立ちあがり、器高の高いもの。

C2類―体部から口縁部までやや丸味をもって立ちあがるもの。

C3類—体部から口縁部までやや丸味をもって外傾するもの。

C4類—体部から口縁部まで直線的に外傾するもの。

C5類—高台の付くもので坏部の形態はC3類に近似している。

甕

甕にはA類（土師器）とB類（須恵器）とがある。

〈甕A類〉 製作にロクロを使用していないもの（AⅠ類）とロクロを使用しているもの（AⅡ類）とに大別される。AⅠ類は器形の特徴から二つに分類される。

AⅠ—1類　口縁部が短く外反するもの。

AⅠ—2類　口縁部が直立ぎみに弱く外反するもの。

AⅡ類も同様に器形上の特徴から以下のように二分される。

AⅡ—1類　口縁部が強く外反するもの。

AⅡ—2類　口縁部がゆるやかに外反するもの。

なお、AⅠ類・AⅡ類とも最大径の位置が、口縁部にあるものと体部にあるものとがあり、さらにそれぞれ大形のものと小形のものとに細分される。

最大径の位置が口縁部にあるもの—(1)　　大形のもの—(ⅰ)

〃　　体部にあるもの　—(2)　　小形のもの—(ⅱ)

〈甕B類〉 すべて大形のもので器高が40cmを超える。底部の形態によって二つに分けられる。

B1類—丸底のもの

B2類—平底のもの

第13表　　住居跡における土器の出土状況

				BJ56住居跡	GB03住居跡	GD50住居跡
坏	A		1	1		
			2		1	
			3		1	
	B		Ⅰ	2		
			Ⅱ	3		
	C		1			1
			2		2	3
			3			2
			4		1	1
			5			2
甕	A	Ⅰ	1(2)(ⅰ)			1
			2(1)(ⅱ)		1	
		Ⅱ	1(1)(ⅰ)	2		
			1(1)(ⅱ)		1	
			2(1)(ⅰ)			1
			2(1)(ⅱ)			1
			2(2)(ⅰ)			1
	B		1	3		
			2	1		

〔3〕 住居跡における土器の組合わせ

出土土器には坏と甕があり、前記のように分類された。図示遺物に限って、これらの出土状況をみると、各住居間相互に共通性はあまり認められない。

坏では、BJ56住にはA類とB類とがあり、C類は出土していない。GB03住にはA類とC類とが出土し、B類を欠く。GD50住はC類のみが出土し、A・B類は出土していない。

甕では、BJ56住はAⅡ1類とB類が出土している。GB03住にはAⅠ類とAⅡ$_1$類とが共伴する。GD50住はAⅡ2類が比較的多く出土し、AⅠ類も1点含まれる。

以上の住居跡別の出土状況を表にしたのが第13表である。

〔4〕 出土遺物からみた遺構の年代

坏についてみれば、各住居跡における類別ごとの共伴関係の相違は、住居間の相対年代を想定させうる内容を示している。BJ56住では他の住居跡からは出土しないB類が大半を占め、底部の切り離し技法は回転糸切りよりも古いものとされる回転ヘラ切り[E1]によっている。A類も少量ではあるが出土しており、体部下端より底部全面に手持ちのヘラケズリを施す破片も含まれている。GB03住ではB類を欠き、その不足分をC類で補うかたちとなっている。A類は外面に二次調整を加えないものに限られる。GD50住に至っては坏のほとんどをC類だけで充足させるようになり、A類は破片で少量出土するにとどまっている。

こうした類別ごとの組合わせの変遷は、BJ56住→GB03住→GD50住という住居跡の時間的な推移にそのまま対応するものと考えられる。

甕については、坏にみられるほど時間差に対応する明確な変遷を示していない。ロクロ不使用のAⅠ類はGB03住とGD50住より出土し、BJ50住には認められない。ロクロを使用するAⅡ類は各住居跡より出土するが、その内容は若干異なっている。つまり、口縁部を比較的強く外反させる器形（AⅡ1類）の大形の甕はBJ56住より出土し、その小形のものはGB03住より出土している。GD50住では、口縁部が緩やかに外反する器形（AⅡ2類）のものに限定される特徴をもつ。なお、B類の大甕は各住居に認められるがBJ50住以外は小破片に限られる。

甕のこうした成形、器形上の違いが、出土住居の時期差とどのように結びつくのであるかは明確にできない。ただ、甕の大部分を占めるAⅡ類は、小形のものを除いて体部上半をロクロナデのみで整えるものはなく、内外面のいずれかに刷毛目状ロクロナデを施している。これは、特に体部上半がロクロナデのみでは形成しえなかったことを示しており、ロクロ整形の甕のなかでは古い様相[E2]と思われる。

以上のように、出土した坏の内容からは各住居間の相対年代をある程度想定できた。ところが、甕においては、坏における変遷と必ずしも対応するものではなく、BJ56住に後続するもの

と思われるGB03住・GD50住ではロクロ不使用甕と使用のものとが混在している。このことは、発見された3棟の住居跡が共存したものとはいえないまでも、その時間的な幅は大きく広げられるものではなく、近接した時間内に包括されうる可能性を示唆しているものであろう。

次に、BJ56住出土の坏B類に関して若干ふれておきたい。本遺跡の乗る段丘の東端部に窯跡が確認されており[注3]、そこからヘラ切りの須恵器坏を表採している。したがって、坏B類は本遺跡の生産品である可能性が極めて強く、本遺跡がそれら工人の生産遺跡としての性格をも反映しているものと考えなければならない。住居内よりロクロ施設にかかわるものと思われる遺構が、非常に緻密な粘土を伴って検出されていることもこのことの傍証としてあげられよう。また、GB03住・GD50住は土器の組成内容がBJ56住とは異なっており（遺跡内における位置もかなり離れている）、坏B類はまったく出土していない。これは、杉ノ上窯跡の廃止の時期と密接に関連しているものと予想され、坏C類が坏B類を補完するかたちで出土していることにも注目しておきたい。

絶対年代に関しては明確にしえないが、BJ56住を9世紀の前半代の終りごろ、GB03住・GD50住を9世紀の後半代に一応想定しておく。

注1．岡田茂弘・桑原滋郎　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　1974

注2．ロクロを利用した刷毛やヘラ状工具によるかきとりが、一定の期間に限定しうる調整技法として認定されているわけではない。ただ、すくなくともその初源の時期においては、共伴遺物の内容からみてロクロ技術導入直後の一つの様相を反映しているものであることは間違いなく、系統的な技法として散見する下限の時期も9世紀代におさまる可能性が強い。

注3．「紫波郡日詰所在の窯跡について」『考古学研究会岩手支部連絡誌』No.9　1978

本遺跡が乗る中位段丘が東側の低位段丘に下る段丘崖の斜面を利用して構築されており、道路建設によって一部破壊されている。現在確認されているものは二基であるが、さらに多数存在するものと思われる。遺物はヘラ切りの須恵器坏（無調整・底部手持ヘラケズリなど）を窯中に確認している。

5．まとめ

(1)　今回の調査によって発見された遺構は住居跡3、溝1であり、それらはすべて平安時代の初めごろに属するものと思われる。

(2)　出土遺物は土師器・須恵器・赤焼き土器が主体を占める。

他に少量ではあるが縄文土器も出土しており、同時期の遺構も存在する可能性がある。本遺跡は縄文時代に活動が開始され、平安時代に隆盛期をむかえる遺跡として把えることがで

きる。

(3) 今回の発掘調査は遺跡の範囲のほんの一部分に過ぎない。台地の全域になお多数の遺構が遺存するものと思われる。調査区東隣に窯跡が存在することは、本遺跡の性格を考えるうえで、何らかの示唆を与えるものであろう。

参考文献

秋田市教育委員会　『秋田城跡―昭和50年度発掘調査概報』　1976

伊　藤　博　幸　「岩手県の古代土器生産について」『岩手史学研究』第61号　1976

岩手県企画開発室　「日詰」『北上山系開発地域土地分類基本調査』　1975

岩手県企画調整部　『岩手統計年鑑』　1978

岩手県教育委員会　「杉の上Ⅱ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報』　1974

岩手県教育会紫波郡部会編　『紫波郡誌』　1925

小笠原　好　彦　「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』　1976

北上市教育委員会　『尻引遺跡調査報告書』　1977

佐久間　　豊　「奈良・平安期土器の型式学的分析」『考古学研究』第25巻第2号

高　橋　信　雄　「岩手県のロクロ使用土師器について」『考古風土記』第2号　1977

綜覆建技術コンサルタント　『東北新幹線地質調査書』　1973

水沢市教育委員会　『胆沢城跡―昭和51年度発掘調査概報』　1977

宮城県教育委員会　「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集

〃　「練塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第53集　1978

〃　「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集　1978

杉ノ上Ⅰ遺跡

遺跡記号：SU Ⅰ
所在地：紫波郡紫波町陣ケ岡字幅74－2他
調査期間：昭和48年7月18日～10月16日
調査対象面積：7200㎡
平面測量基準点：東京起点479.16235km（CA50）
基準高：海抜108.00m